

僕の彼女は曜ちゃんです

ゆうき00g3

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

曜ちゃんと主人公の恋愛物語！

目標

Aqoursメンバーと主人公がラブライブ優勝を目指していく中での日常生活+その後を描いていく予定です。

→ここメイン

一話の設定を大幅に変更しました。

主人公 吉田 雄飛 高校二年 身長176cm

握力 50超え ↑中3の時

格闘技経験者。親が軍人のため幼少期からかなり鍛えられている。

兵庫県出身

趣味 車 曜ちゃんの笑顔を見ること 人助け

ぼくのような未来編↓堕天使と過ごした日常。

※キャラ崩壊注意

目次

出会い	1
謎の短冊	6
新たな出会い	10
高海三姉妹	14
学校	17
リリース	25
お寺の娘	28
デート?!	48
危機	53
死	56
知らない天井	60
お刺身はいかがかなん?	64
居場所	67
朝	71
存在意味	75
ありがとう。	79
Aqoursのリーダー	83
challenge!!	91
変な曜ちゃん	96
気持ち	101
願い	105
梨子とピアノコンクール	109
Aqoursの力	115
結果発表	121

里帰り　　～ i n 兵庫～	125
私がやるであります!!	130
衝撃の事実	135
修羅場は寝落ちで十分。	142
恋を伝えるアクリウム	149
久しぶりの休日。	159
恋人として初めてのデート。 1	167
恋人として初めてのデート。 2	172
朝の営み	182
雄飛のとある日常	187
埋め合わせデート	195
動き出す感情　北海道旅行　PART 1	203

出会い

趣味はまだ自分で運転したこともないが、車が好きである。

父親はMAZDA R x 7を乗り回していた。休日には、幼少期からよくドライブに連れて行ってもらった。それもあつて今は列記とした車好きになった。

ちなみに、年齢Ⅱ童貞である。

彼女ができたことがなくこれからどうして行こうかと心配していた。

こんなことを考えながら過ごす中学生時代が…「良かった、」

そう「よかった、」過去形である。

つまり、今は考えられないということだ。

ある日、両親を交通事故で失ったのだ。

しかし、悲劇はこれだけでは終わらなかった…。

両親の突然の死を受け入れられず、学校にいけなくなったことが影響し、進学も難しいと言われた。

正直そんなことどうでもよかった。

「俺も…あの時一緒に死ねればよかった…。」

「あ、そうだ、死にそこねたなら今死ねばいい。

やっぱり俺って天才だな！あはは！」

このときの俺は完全にどうかしていた。

数日後おれは計画を実行するため、夜の浜辺で自殺しようとした。

「母さん、父さん、俺は全力で生きたよ。

もういいよね…。」

そして、ナイフで動脈に斬りつけようとした。

ピカッ！

「?!」

後ろからすごい量のライトで俺は照らされた。

赤いパトランプが見えた瞬間にそれが何なのかすぐに察した。

警察だ…。

そして、おれはある警察署につれていかれた。

「君の両親は？」

「…。いません。」

「どこにいるんだ？」

「…。死にました…。」

その言葉を口にした瞬間警察の顔色が変わった。

嘘をつくなど怒られるのかと思った。

でも、その表情はとても悲しそうな表情だった。

「そうか…。では、親戚の方に引き渡すことにするよ。」

「…。」

黙っていると警察官の人が何らかの合図をした。

「たったいま見つかつたみたいだ。」

言い終わるとその警察官は別の警察官につれてこいと指示をした。

ある警察官とおれは二人きりになった。

沈黙の中、先に口を開いたのは警察官だった。

「実はおれもな、君ぐらいの年に両親を失ったんだ。」

「…。」

「死ぬほど辛かったよ。だから君の気持ちは痛いぐらいわかる」

「そうなんですか…。」

「そんな君におすすめの場所がある」

「…。おすすめの場所？」

彼は温かい笑顔でいった。

「ああ、沼津だ。」

「…。なんでそこじやなきやだめなんですか？」

彼の言っていることがまったくもって理解できなかつた。

「なんでかわからないけど、あの場所には何かあるんだよ。暮らして

みたらわかる。なんて言うのかな。暖かいんだ。」

「沖繩じゃないんですから、あんまり変わりませんよ」

「気温の話じゃないんだよ、なんだろうな…。まあ行ってみたらわかるよ。」

「そうですか…。」

「俺はそこで変われた。きっと君もそうだ。行ってみるといいよ。」

「わかりました。…考えておきます。」

そして、俺はおばに引き取られた。

そして話は、高校二年生。

プルルルルルル!

新幹線の主発を意味する警報が鳴り響くホームに俺は立っていた。

雄飛「なんとか、おばには納得して貰ったけどこれからどうすっかなー。」

泊まる宛もなければ金もたいしてあるわけではない。厳しい状態の中、家を飛び出してきてしまった。

駅員「大阪行き、のぞみ出発いたします。」

雄飛「あ、やべ！行かなきゃ！」

指定席はとっていないため自由席に座る。

雄飛「はあー、緊張してきた。」

俺はあの後、兵庫県の私立高校に入った。そして、勝手ながら学校をやめて静岡県沼津の高校に行くことにした。そう。あの警察官に言われた場所だ。ちなみに、精神状態は当時に比べてかなり安定した。そして、静岡で行く予定の学校の名前は、浦の星？だったかな。少し前にネットでたまたま男子生徒一人を募集していると聞き、試しに電話をかけてみた。

???「全然オーケーデース!!それでは○月○日までにごつちに引越してネー!ヨロシクー!」

とだけ、言われて電話を切られた。

今通っている高校より面白い先生が多そうだと期待を胸に抱きながら…。

新幹線に揺られ、乗り換え、揺られを繰り返してるうちに名古屋についた。

「そこで、俺は出会った。一人の少女と…」

雄飛「あ、あの子めっちゃタイプかも…」

名古屋駅にて乗車してきた銀髪のショートの子を見て、俺は気分がはね上がった。

??「隣いいかな?」

雄飛「はっ、はいいいい!」

ボーツと見とれているとその女の子が話しかけてきた。

??「そ、そんなにびっくりさせちゃったっ!」

ご、ごめんね!」

雄飛「い、いえ、お、俺が悪いんですよ…!」

(気を使って謝ってくれるとかどんだけ人がいいんだよ!)

??「あ!せっかく出会ったのも何かの縁だし、自己紹介するね!私、渡辺曜って言うんだ!よろしくね!」

雄飛(会ってそうそう自己紹介するのか?!どんだけコミュニケーション能力高いんだよ?!)

雄飛「あ、お、俺は吉田雄飛っていうんだ。よ、よろしく?」

曜「おー!雄くんでありますか!いい名前だね!」

雄飛「あ、ありがとう?」

曜「ところでさ!どこからきたの?」

雄飛「えーと、兵庫から…」

曜「ひよ、ひょうご?!」

雄飛(そんなに驚くことなのか?!まあ、たしかにかなり距離はあるけど…)

「そ、そうだよ。兵庫だよ。」

曜「へー!そうなんだー!あ!高校何年生?」

雄飛「俺は二年だよ。」

曜「え?!同い年じゃん!だったらなおさら気が合うかもね!」ヨーソロー

そう敬礼しながら言う曜ちゃんなんだその敬礼?!

雄飛「お、おう！こ、これからよろしく！」

(よし、だんだん慣れてきたぞ…)

曜「どこに向かっているの？」

雄飛「静岡の沼津ってところ」

曜「えっ?!」

何故か驚いた顔をする曜ちゃん。

雄飛「え？俺なにかおかしいこといったかな？」

曜「う、ううん！実はね！私が住んでるのが沼津なの！」

おお…！これはなんとという偶然！もしかしたら格安で泊まれる宿とか知ってるかも…！まあ、その内住む家もみつけないとだな。

雄飛「おお!!それは助かる！これから色々世話になるな！」

よろしくな！曜ちゃん！」

曜「うん！質問があつたらどんどん聞いてね！」

雄飛(お、これはチャンスかもしれない…。曜ちゃんのLINEをー)

曜「あつ！そうだ！せっかくだしLINE交換しない？」

雄飛(向こうからきたー!!!)

「えっ!?!あ、おう…しようぜ！」

曜「ど、どうしたの？そんなに驚いて…。もしかして嫌だった？」

雄飛「そんなわけあるか！こんなにかわいい女の子からLINE交換しよって言われてうれしくない男がどこにいる！」

曜「あ、そ、そうなんだ！」／／

少し顔が赤い気がするが気のせいかな？

雄飛(これで沼津の生活がさらに楽しくなるな)

謎の短冊

曜（このゆうくんって子、めっちゃかっこいいし、性格も優しい…これから仲良くなれそうだな♪）

曜ちゃんからは、かなり好印象の吉田雄飛であった。

もちろん、彼はそんなこと知るよしもないけど…

駅員「次はー、沼津、沼津です。後降りのお客様は足元に注意して下車してください。」

雄飛（ここが沼津か…）

あたりを見渡すと商店街のようなアーケードが見える。

特にそれ以外は…とくに、普通？

なにか特別なものがあるとか、オブジェがあるわけでもない。

珍しいものを強いて言うならこの汽車の車輪のオブジェくらいか。

曜「あー！今日も疲れた！」

雄飛「ところで曜ちゃんは名古屋に何しにいったんだ？」

曜「私、水泳やつてるんだ！今日と昨日は大会があったから泊まり込みで水泳してたんだ！」

雄飛（と、泊まり込みで水泳か！中々ハードなスケジュールだなあ）

「お疲れさま！疲れてるのになんにも知らない俺に今から町の案内して貰うとなると…」

曜「大丈夫!!私、体力には自信があるから！」

雄飛「お、おう。じゃあよろしく！」

曜「よーし！全速全身！ヨーソロー!!」

きれいに敬礼を決めてからこっちこっちと手招をしながら大通りの方に早足で歩いていく曜。

雄飛（だから！ヨーソロー!!ってなんなんだ?!…かわいいからまあいいけど。）

心でそう思いながらついていく雄飛であった。

約三時間後

曜「あ！あそこに短冊があるから書いていかない？」

雄飛「え？今日七夕だっけ?!」

曜「違うよ！でもおいてあるよ？なんでだろうね。」

雄飛「地元の君が知らないなら俺が知るわけないじゃん！」

曜「たしかにそれもそうだね！あはは！」

雄飛「じゃあ、なんであるかよく分からない短冊に願いごとでも書くか！」

曜「うん！」

曜（ゆうくんなにを書くのかな）

雄飛（曜ちゃんなに書くのかな）

お互い動きが止まる。

そして同時に顔を上げた。

曜「ぷっ、あはは！」

雄飛「あはは!!」

久しぶりに大声で笑ったかも…。なんでだろう。曜ちゃんといっしよだとなんだか楽しいな。

曜「ごめんね、なんだか七夕でもないのに短冊書いているのがおかしくって！さあ書こ！」

雄飛「俺も同じこと思ってた！」

雄飛（今年も幸せにすごせますようにっ…）

曜「ゆうくんはどんなこと書いたの？」

雄飛「お、おい！こら！みるなー!!」

曜「えへへ、なんか真剣に考えてたから気になっちゃって…」

雄飛「まあ、曜ちゃんならいいか…」

曜「え？なにか言った？」

雄飛「あ、いや、なんでもない！」

（心の声が漏れてたー!!というか何言ってるんだおれー!!）

曜「私も、ゆうくんなら見られてもいいかな…」

雄飛「え?…」

曜「あっ！バス行っちゃう！」

雄飛「え?!い、いそげー!!」

曜「ゆうくんそつちじゃないよ!!」
雄飛「うわ!こつちかー!!」

結局、曜ちゃんは何てお願いしたんでしようか…。
夕日が差し込むバスの中、大会で疲れたのかうとうとし始める曜ちゃん。

雄飛「どこで降りるんだ？」

曜「後5駅ぐらいかな。」

雄飛「寝ててもいいぞ、起こしてやるから」

曜「うん、ありがと…」

そう言つて眠りにつく曜ちゃん。雄飛のかたによりかかりながら寝息をたて始めた。

雄飛（え?待つて?!なんかこの状況やばくね?!でもめっちゃ幸せかも…）

運転手「次はー〇〇〇前ー、次はー〇〇〇前ー。」

雄飛（あつ、起こさなきゃ）

「おい、曜ちゃん、おきろー」

曜「ふえ?」

雄飛「ほら!寝ぼけてないで降りるよ!」

曜「あ!う、うん!／／」（寝顔見られちゃった…／／／／）

雄飛（少し顔が赤い気がしたんだが、気のせいかな?まあ、そら俺みたいな奴の肩借りて寝てたんだからしょうがないか。）

バスを降りて曜はいきなり無言になり歩きだした。

ついていこうかどうか迷ったが、結局ついていくことにした。

曜「…。」

雄飛「…。」

曜「…。」

雄飛「…。」

そして、気がつくとも海がよく見渡せる場所にきていた。

時刻は17時を示しており、夕日を見るには最高のシチュエーションだった。

雄飛「おー、きれいだなあ。といろかなぜ曜ちゃんは俺をここまで連れてきたんだ？」

曜「ゆ、ゆうくん！」

雄飛「は、はい？」

曜「これからどこに住むかとか決まっていたりするの？」

雄飛「あ、」

(そ、そういえばホテルとってねええ!!!)

雄飛「あー、いや、ないわけじゃ、ないんだけど…。」

流石にこれで決まってるないなんて言えば計画性のないやつだと思われてしまう。とりあえず誤魔化しを…

曜「絶対決まってるないよね？」ジトーだめでした。

雄飛「あつ、はい。」

曜「き、決まってるないんだったらさ！う、家に来ない？／＼」

雄飛「え？今なんて？」

「え、それってどういう…」

曜「と、泊まるどころがないんだったら、家に泊まらない？つてこと！」

雄飛「な、なんか怒ってる!？」

「あ、そ、そういうことか、じゃあお言葉に甘えて…」

(ん？待てよ、曜ちゃんの家泊まる？女の子の家泊まる？)

……、あ、夢か)

曜「現実だよ!!」

雄飛「なんで心読んでんだよ！」

とまあ、こんな感じでとりあえず曜ちゃんの家に行くことになりました。

新たな出会い

さて、俺はどうしようか。

え？今どういう状況かって？

俺も正直よくわかってないんだよね。

ちゃんとわかってるのは俺は電車で曜ちゃんにあって沼津にきた。三時間案内してもらって…。

なんだっけ？

「だ、か、ら！今日は私の家で泊まるの！」

「お、落ち着いてくれ！曜ちゃん！」

たしかに俺は泊まるどころがない！でも流石に会って初日に女の子の家に行く気にはなれないよ！」

（仲良くなりたいたいから行きたいけど！）

「ふーん」ムウー

（曜ちゃんが頬を膨らませてる…。かわいい…。）

「そ、そんな顔してもダメなものはダメだからな。」

「もしかしてゆうくん、私のこときらい…?」

「そんなわけあるか！むしろ好き…あつ。」

「そ、そうなんだ…!」／／／

そっぽを向いてしまう曜ちゃん。

（ヤバい、言っちゃった。絶対きらわれた。）

あー、せつかくいい子にあったのに…。（泣）

ガシツ！曜ちゃんが雄飛の腕を掴んだ。

「えっ?」

「じゃあ！問題ないね！全速前進！よーそろー!!!」

そう言っつて全速力で走り始めた。

「うわあああ!!!な、なんでだよおおお!!!」

うん、わかってはいたよ。

今の状況を簡単に説明すると、俺は今曜ちゃんとふたりきりだ。そう。二人きり。

こんなにかわいい女の子とそんな状況になって緊張しないはずがない。そして、おれの理性がいつまでもつか…。

もし、そんな男がいるなら教えてくれ。弟子にして貰う。

まあ、そんな話は置いといて今の状況をどうするか考えている。

ちなみに曜ちゃんはどうとうと自分がしたことを恥ずかしく思い始めたのか、顔を赤くしそっぽを向いたまま無言である。

なにか作戦はないのか…。

…、よし、これでいこう。

「よ、曜ちゃん、や、やっぱり俺、泊まるところ探してそこに泊まるよー！」

「えっ？もう8時だよ?!今から探す何て…。」

「じゃあ、一瞬だったけど邪魔しました!」

曜ちゃんの言葉を最後まで聞くことなく、俺は荷物を持って走って曜ちゃんの家を飛び出した。

曜ちゃんごめんよ、

それからどれくらいたつただろうか…。

かれこれ1時間半くらい歩いた。

(だんだん疲れてきた…。あー、曜ちゃんの家泊まった方がよつたかなー、でも流石に…ね…)

「お？ここは泊まるところか?」

看板には「旅館 浜の家」とかいてある。

(泊まれるかどうかわからないけど…、聞いてみるか。)

時計をみるともう9時半を回っていた。

「夜遅くにすみませんが、お部屋空いてたりしますか?」

「申し訳ないですが、現時点お部屋に空きがなくて…。」

(あ、終わった…。)

「はい。夜遅くにすみませんでした。」

(あ、まじで終わった…。どうしよう、行く宛ないし、沼津にきたばかりで全然土地勘ないし…。積んだ…。)

「今から曜ちゃんの家に戻るとしても、時間かかるし、スマホの充電切れてるし…。何せ疲れた。」

なにこのどうしようもない状況…。

野宿でもするか…。

「ねえ！その君！」

(あ、疲れすぎたせいか、みかんが歩いている。)

「ねえってば！」

「うわ！びっ、びっくりしたく。」

「こんな遅くにどうしたの？もうそろそろ10時だよ？もしかして家
追い出されちゃったとか？そんな私みたいな事にはなつてないよ
ね、」

「実は…、カクカクシカジカ」

「な、なるほど。よくわかんないけど、家がないんだね！」

「う、うん。まあ、そう言うことだね。」

「じゃあ、家に…」

(こいつもかー!!なぜだ?なぜそんなにすぐに異性を家にあげることが出来るんだ?!うれしいよ?!こんなにかわいい女の子の家にいけるのは!でも、おかしいだろ?!)

「え?黙っちゃったけど、どうかしたの?」

首をかしげながらその少女は聞く。

「い、いや、なんにもないけどさ…。」

(どうしよう、断るか?でも、流石にな…。宛がないしな…。と、とりあえず時間かせぎを…)

「な、名前何て言うの?」

「私は、高海 千歌!よろしくね!あなたは?」

「俺は、吉田 雄飛だ。呼びやすいように呼んでくれ!よろしくな!」

シーン

(つ、次の話題だ!)

「ち、ちなみにきみの家はどこなの?」

「(こ)こー!」

「え?」

「だから!こ)こー!」

「旅館ですが…？」

「うん！ここが私の家！」

「え、えええええええつ?!」

続く

高海三姉妹

「ホントに？」

「ウソなんてついて何になるのー？」

「た、たしかに…。」

「じゃあ、いこつか！」

まだちゃんと状況を理解出来てない俺の手をぐいぐい引つ張って何故かうれしそうな高海さん…。

旅館の名前は「十千万」

中に入ると綺麗な女の人が二人いた。

「あら、千歌ちゃんお客さん？もしかして、彼氏？」

「誰だー？」

高海さんは二人を連れて奥の方につれて行ってしまった。

取り残された俺は今日起こったことが色々と凄すぎて頭がパンクしそうになつて放心状態だった。

「えつとね、これは…ということがあつてね！」

「なるほど。」

「じゃあ、これからは家族だな！」

え?!か、か、家族?!え?今、家族つて言った?!

その後、しばらくすると高海さんと二人が奥から出てきた。

「私は、高海志満です。よろしくね！」

「私は、高海美渡だ！よろしく！これからビシビシ行くからな！」

え?ビシビシ?なんのことだ?!というかこの人たち姉妹だったのか?!ダメだ、思考が色々追い付いてない…。

「あ、は、はい！よ、よろしくお願いたします。」

挨拶が終わると高海さんが部屋に連れていってくれた。

「はい！ここがあなたの部屋ね！それと、これからは下の名前で呼んでね！」

(この人たちはフレンドリーな人が多いな)

「わ、わかった！これからよろしくな！千歌！」

「うん！よろしくね！ゆうくん！」

「それにしてもえらいごうせいな部屋やなあ」

「そ、そうかな？えへへ♪」

（「かわいい…」）

「え？今なんて？」

（しまった…、また心の声が…）

「な、なんでもないよ？」

「ほんとかな？」

「ほんとだよ？」

「あ！そういえば、ゆうくんどこからきたの？」

「あれ？さつき外で言わなかったか？」

「あれ？そうだっけ？忘れちゃった！えへへ♪」

「じゃ、じゃあ、もう一回説明すると…。」

…

「あ！そこからきたんだね！」

「おう。やっとわかってくれたか…。」

なんやかんやこれを説明するのに20分近くたっていた。

兵庫県つて説明すると、「どこのくに？」つて聞いてきたり

「わかった！」つて言うから確認してみたら九州の方のこと言ってるし、色々疲れすぎて精神的にしんどい…。

「高校生なんだよね？」

「おう、そうだよ。高校2年だよ」

「あ！ちかと一緒だね！うれしいな♪」

（え？まじでなんだよ、このかわいい生き物）

「あ！これからちかのお家に住むといいよ！」

「え？あ、うん、ありがとうつて…。ええええええ?!流石に唐突すぎだろ?!」

「え？だつてお家ないんでしょ？」

「うぐつ！た、たしかにそうだが…。」

「じゃあ、けっていね！」

「お、おい！まってくれ！」

それだけ言い残すと千歌は俺の部屋（仮）から出ていってしまった
…。

「ああ…。これからどうすれば…。どうすればいいんだ…。」

学校

あのあと俺はなんやかんや寝ることができた。

風呂はめちやくちや広いし、布団ふかふかで気持ちいいし、
とんでもなく幸せ。

そして、今はというと千歌と一緒に朝ごはんを食べている。

そして、千歌が突然話を振ってきた。

「そういえば、学校どうするの?」

「ん?学校?うらのほしだったかな?そこに途中入学してもらう事になっ
ているよ」

「え…。」

なぜか千歌の顔色が突然変わった。

「それ、本気でいつてる?」

え、なんかヤバいこといつちやった?

顔がこわいんだけど…。

「う、うん。」

「そ、そうなんだ…。」

え、なんなんだ?何があるんだ?!

「ちかちやーん、学校行こー!」

あれ、どこかで聞き覚えのある声が…。

まさか…。

「あつ!曜ちゃん!」

「え?よ、曜ちゃん?」

「あれ、なんでゆうくんがちかちやんの家にいるの?」

「えっ?!曜ちゃん知り合いなの?!ゆうくん!どういうこと?!」

「え、えーと…。まあ、いろいろあります…。」

「ふーん、私の家は断って、ちかちやんの家には泊まるんだー。」

ちよ、顔が、顔がこわい…。

「よ、曜ちゃん、お、落ち着いてくれ!」

ペシンッ!

痛い。まじで痛い。たしかにね、怒るのはわかるよ…。

異性って言う条件は同じなのに曜ちやんの家を飛び出して

千歌の家にとまったんだから…。でも、ここまでしないでよくね？好きな男がそんな事したなら怒るのはわかるけど、会って初日の男だよ？なんでそこまでするんだ…。

「きよこの授業って時間割どうりだったよねー？」

「えっ?!ちかちゃん今日は金曜日の時間割だよ?!」

「ええ?!うそおお!!ど、どうしよう!曜ちやああん!」

「か、貸してあげるから授業始まるまえにとりあえず先生にいいにっこ!私も一緒に行つてあげるから!」

どうしよう、話に入れない。入ろうとして口を開こうとしたら曜ちやんがこつちを殺意に満ちた目でみてくるし…。そんなに怒ってるのか?!謝つたほうがいいのか…。

「…。ゆうくんはこの学校いくの?」

千歌との会話の間におれにボソツと聞いてきた。

「俺は「うらのほし」ってところに行くらしい。」

「え?う、うらのほし?」

「お、おう。」

あれ、やっぱりだ。千歌と全く同じような顔してる。

「ゆ、ゆうくん、」

「な、なんだ?」

戸惑っていると千歌が耳元で…。

「じ、実はね…。浦の星って言う高校は…。ボソツ」

「えっ、えっ?ええええええええ?!」

バスの中に雄飛の叫び声が響いた。その叫び声はバスの窓ガラスを揺らしたほどすごい声だったらしい。

「次はく浦の星女学院前でーす。次はく浦の星女学院前でーす。」

ブロロロ

あああ…。バスがいつてしまった。

どうしよう、女子高だど?そんな事何にも聞いてないんだが…。

さては、あの帰国子女みたいな口調の先生のせいだなあ。

「あつ、理事長。」

「り、理事長？」

「こいつが主犯と思われる帰国子女の人物？」

「HEYっ！ゆうひー！Nice to me you！」

「な、Nice to meet you…。」

「今日からよろしくデース！」

「よ、よろしくお願いいたします…。って！ここ女子高なのか?!俺はそんな事一切きいて無いんだが、どういうことだよ!」

「あれえー？ホームページにちゃんと書いたと思うんだぞなー」

「えっ？」

慌ててスマホを出してホームページを調べてみる。

書いてありました。

「う、うそだろ…。」

「で、どーする？学校。」

もうここまでできて兵庫に帰るのは無理だ。

金もないし…。

「はあ…。やる。今さらどうしようもないし、やるよ。曜ちゃん、千歌、理事長？これからよろしくお願いします。」

「もう！マリーでいいわよ！」

「そ、そうか！よろしくな！マリー！」

「イエース！よろしくデース！」

いまおもったけどなんでこの人千歌や曜ちゃんと同じ制服（リボンの色は違うけど）着てるんだ？そういう趣味なのか、なるほど。

あれから俺は、理事長（これ以降マリー）に教室に案内された。

入った瞬間体が動かなくなった。

なぜなら、とんでもない数の女子が居たからだ。

そう、ここは女子高なのだ。

もちろん忘れていたわけではない。

初めは視線がいたかったりしたが、向こうがとんでもなくフレンド

リーなため、その日の内にほとんどの子と仲良くなれた。

俺は女友達がほとんどいなくなつたため、とても嬉しかった。

ちなみに理事長はこの生徒でもあるらしい。

それを聞いたときは色々頭がパンクしそうになった。

そして、放課後になった。

「ゆうくん！」

「お？どうした千歌」

荷物を片付けて家に帰る準備をしていると千歌が声をかけてきた、

「部活とかは入ったりしないの？」

「部活かあ、あんまり考えてないな」

「前の学校ではどうだったの？」

「陰キヤなので、無論帰宅部です。」

「あ、あはは、そうなんだ…、ちかも中学校と高校一年生までは帰宅部だったんだー！」

「ってことは、今なにかしてるのか？」

「うん！スクールアイドルって言うのをやってるの！」

「スクールアイドル？なんだそれ」

「えっ?!スクールアイドル知らないの?!」

「う、うん。名前からの考察はなんとか出きるけど…。」

「えっとね！スクールアイドルって言うのは…カクカクシカジカ」

「なるほど、そんな凄いことやってるのか。よくするなあ」

「といってもメンバーは三人しかいないんだけどね…。」

「三人？曜ちゃんとお前とだれだ？」

「梨子ちゃんって言う子なんだけど…、というかよくちかと曜ちゃんがやってるってことわかったね！」

「まあ、それはなんとなくかなあ、仲良さそうだし…。」

「そっかー！えへへ♪でね！話を戻すとよかったらゆうくんもスクールアイドル部入らないか？って言うお誘いをしたの！」

「おれが？俺は男だぞ、ちゃんといってるし。」

「ちよ、ちよっと最後のは言わなくていいから！／／／／」

「あつ！つ、つい、すまん！」

危ない、普通に男友達と話すようなノリでいってしまった。

「そういうことじゃなくて、マネージャー？みたいなのをやって欲しいかなあつて！」

「マネージャーか…。」

スポーツちゃんとやったことあんまりないからちゃんと出来るかわからないけど、なんとなくこの頼みを受けた方がいい気がする。

「どう？やる？というかやって！」

「わかった！その頼み引き受けよう！」

「やったー!!!やったよ曜ちゃん！」

「えっ?! よ、ようちゃん?!」

「よ、曜でいいよ。」

教室の扉から曜がひよっこり顔を出した。

「お、おう。曜、聞いてたのか？まあ、聞かれて不味い話ではないが…」

「うん、私が聞こうとしてただけどちかちゃんがどうしても私がやるって聞かなくて…」

なぜだろう、とんでもなく説得力がある。

「曜ちゃん！そこまで言わなくてもいいじゃん！」

「えー！だって私から言いたかったんだもん！」

「え？なんで？」

「そ、それは…。[……だから…ボソツ]」

「「え？なんて？」」

「ゆうくん！ちかちゃん！二人して聞かないでよ！」

「だって、気になるしなー、千歌。」

「うん！気になる！」

「もう！ばかー！！／＼」

ついに曜は昇降口の方に走ってどこかにいってしまった。

「そういえば、三人いるっていったよな？もう一人は？」

「あー、梨子ちゃんは今日ピアノのコンクールで学校お休みしてるの。」

「アイドルもやってピアノもやってるのか?!大変だなあ。」

「うん…。苦労かけてないか心配だよ…。」

「大丈夫、彼女だけに負担がかからないように俺もこれから頑張るから安心しろ」

そう言つて無意識に頭を撫でていた。

「あつ、／＼／＼うん、ありがと／＼」

「これから頑張ろうな！」

「うん！」

「すでに雄飛は感じていた。沼津にきてからすでに精神状態がかなりいい状態になっていることを。」

(あの警官に言われた通り、ここ(沼津)は温かいな…、)

リリー

俺がスクールアイドル部に入った次の日。

いつものように朝ごはんを高海家一家と食べ、登校準備をしていた。

「おはよー！ちかちやん！」

「はーい！ゆうくんいこー！」

「お、おう！」

俺は急ぎ足で部屋に鞆を取りに行き、勝手口から外にでた。

家の件だが現在はなんやかんや高海家の旅館（十千万）にお手伝いをしながら住ませてもらっている。

「話を戻しまーす！」

「あ、昨日ぶりだね！ちかちやん！」

あれ、なんか聞き覚えのない声だな？

「あれ？あなたが最近、ちかちやんの家に引っ越して来たって言う雄飛くんだったけ??」

「あ、はい、吉田雄飛って言います！よ、よろしくお願いたします。」

「ちよ、ちよつと、同級生なんだから別にそんなにかしこまらなくていいのに…。私は、桜内梨子です！よろしくね！」

「あ、はい、うん、よ、よろしく！それと俺は千歌の家に引っ越してきた訳じゃなくてちよつと事情があつて一時的にという事で住ませてもらつてるだけだよ。」

「あつーそうだったの?!な、なんかごめんね！」

「一応言っておかないと変に誤解する人がいたりしたら困るしな！笑」

そう言つて曜のほうを見る。案の定目付きがこわい。
なぜだか知らんが、最近曜は家の話をする毎に毎回怖い目をするのである。やっぱりちゃんと謝つてなぜ怒っているのか聞くべきだろうか。

「あつ?!もう、こんな時間だー!!いこー!みんな!!」

「あつ、ちかちゃんまつてよー!!」

俺も三人に続き、無事バスには間に合った。

放課後

「ゆうくん!放課後だよ!」

「お、おう。そう急かすなよ」

「早く!はやくー!」

「い、いったいどこに行くんだ?」

「ふんふーん♪」

だめだ、聞いてない。

そう言つて手を握りぐいぐい引つ張つていく千歌。

唯一の男ということもあり周囲からの目線がいたい。

引つ張られ続けて、数分後体育館下の教室についた。

「なにこー!」

「部室!」

「部室?あ、すくーるあいどるぶつてやつか」

「うん!と言つてもまだ結成したてだから何も無いんだけどね」

「なるほど。∴。これから部員を増やしたりする予定とかは?」

「一応目につけている子はいるよ!」

「入つてくれそうか?」

「わかんない!」

ガクッ

思わず転びそうになった。まあ、千歌らしいと言えば千歌らしいかも知れない…。出会つてそれほど時間がたった訳じゃないが、なんとなくわかつた。

「それで、今日俺をここに連れてきたという事はその子らを勧誘しに行くのか？」

「うん！そういうこと！よろしくね！」

え？よろしくね？

「お、おい、千歌、それは俺に行けって行ってるのか？」

「うん、そうだけどどうしたの？」

「ち、千歌は行かないのか？」

「私はやることあるから！はい！この紙に書いてある子に聞いてきてね！じゃあね！」

え。まさか本当に一人でやる感じ？ま、まさかなく。千歌がそんな無責任なことする分けないよな！うん！きつとこれはどつきりに違いない！

その後、千歌を待っていたが無論帰ってくるわけがない。

「あ、あいっー!!!ふざけるなああ!!!」

ど、どうしよう、曜とか梨子とか千歌は話しやすかったがこれから会いに行く子達は話しにくいかもしれない。

しかも、そんな子達の前で下手な発言したら…。想像したくもないな、うん。

と、とりあえず一人目だな。

えーと、名前は「国木田 花丸」って言う子か…。

お寺の娘

あれから俺は、紙に書いてある場所に行ってみることにした。
「ここかな?」

紙に書かれてあった場所、それは図書室であった。

「し、失礼します。」

入ってみたが人の気配がなかった。

まあ、そら放課後の図書室に来る人などあまりいないだろうと思いつながら、図書室を見渡していると、

ドンッ

え・・・なんか物音したんだけど…。

な、なんか怖くなってきた、

そう、これは吉田雄飛の弱点の一つ、「ビビリ」なのだ。

小さい頃からお化けなどの目に見えない生物が苦手なのである。

ガタッ

「ひ、ひいつ!」

「誰かいるぞら?」

「でたアアアアアアアア!」

「ぞらアアアアアアアア!」

「あ、あれ?」

「ず、ぞら?」

見ると一年生の制服を着た美少女がいた。

「お化けじゃなくてよかった」ぞら。

しーん…。

き、気まずい…。と、とりあえずなんか話そう。

「は、はじめまして、吉田雄飛って言います、よろしくお願いします。」

「お、おらは…」

「おらっ…」

「あつ、わ、私は国木田花丸っていうず、い、言います。…。」

「さ、さつきは驚かしてごめん…。」

「ま、マルもおつきな声だしちゃったぞら。こちらこそごめんなさ

い。」

国木田さん髪の色きれいだなー

「ど、どうかしました？」

「いや、きれいだなあって4」

「えっ?!／／／」

し、しまった！本音が…

「い、いまのは…そ、その…」

「と、とりあえず、座って話すぞらー！」

「そ、そうだな！そうしよう！」

あーまずい、開始早々やらかした。

なんで俺なんか千歌はまかしたんだよ…。

「え、えーと、吉田くんはどうして図書室にきたぞら？」

「えーとね、国木田花丸ちゃんって言う子を探しに…、ん？国木田花丸ちゃん？あれ？もしかして…。」

「はい、おらが国木田花丸ぞら。」

「おー！そうか！君が国木田花丸ちゃんか！」

「そ、そうぞらが、なんぞら？」

「スクールアイドル部に入ってほしい！」

「え、えーと、それはなんぞら？」

「えーと、それは、多分ステージにでてーそれでー…。」

「ふむ、ふむ」

千歌呼んできた方がよくね？

まずい、俺をスクールアイドルのことあんまり知らないんだった。

そう、吉田雄飛はまさか、スクールアイドルのことを聞かれるとは一切予想してなかったのである。まったく知識がないため名前の通りだとしか説明しようがない。しかし、ここでそれを言うところから入ってくれと頼んでいるのに頼んでる側がわからなければ、今後の信用問題に関わるかもしれないと雄飛は予想していたのである。

うっ、ど、どうしよう…。今からでも千歌を呼ぶか？

たまたま図書室に来てくれるとかないかなあ。

ないよなー。なんか用事あるとか言ってたし。

「吉田くん？その続きはなんぞら？」

「あ、えーと、…。」

「まずい！非常にまずい！誰かきてくれえええー！！

ガラガラ！

「ゆうくんー、終わったー？」

「よ、曜？！どうしてここに？」

「なんかちかちゃんに様子みてきてーって頼まれちゃって、来てみたんだけど…？」

「よ、曜ちよつと耳貸せ」

「えっ?!そ、そんないきなり…?!」

「いいから！」

ゴニヨゴニヨゴニヨゴニヨ

「な、なるほど。わかった！／＼」

「曜、顔赤いけど大丈夫か？」

「だ、大丈夫！」

(熱々のカップルずら?)

「どっちでもいいから早く教えてほしいずら！」

「ず、ずら？」

「で、です！」

「国木田ちゃん、我慢しないでいいとおもうぞ。俺はその方言かわいいからすきだぞ。」

「で、でも…。」

「大丈夫！笑うやつがいたらそんなときは俺らが言っつてやるから！な？
曜？」

「うん！花丸ちゃんの方言可愛くてとってもいいとおもうよ！」

「そ、そうずら？」

「うんうん！」

「じゃあ、このまましゃべるずら！」

この時花丸は自分のことを理解してくれる人がここにもいたんだ
と思いつても幸せそうな笑顔

を見せたのである。その笑顔はこの世の冷たさをすべて忘れさし

てくれるほどいい笑顔であった。

(「なんだろう、この幸せな気持ち…。」)

そう思う曜と雄飛であった。

そして、その後スクールアイドル部とはなんなのか、なぜ花丸ちゃんに入ってほしいのか、

などいろいろ説明した。

「なるほど、だからマルに頼みに来たはずらか？」

「そういうことだ。どうだ入ってくれるか？」

「…お誘いはとっても嬉しいですが、オラにはむりずら…。」

「り、理由聞いてもいいかな？」

「オラ人前苦手だし、「ずら」とか言っちゃうし、…。」

「そうか…。じゃあ、質問の仕方を変えよう。」

「ゆうくん、あんまりせめたてるようなことしちやダメだよ。」

「ああ、分かっている。花丸ちゃん、最後に聞かせてくれ。」

『スクールアイドルやりたいか?』

「きよ、興味はあるずらが…。」

「じゃあ…。」

「や、やっぱりむりずら!!」

そういうと、花丸は逃げるように図書室を去っていった。

「ゆうくん、ちよつと言い過ぎだよ…。」

花丸ちゃん、きつといきなり選択肢狭まれて困ったんだと思うよ?」

「そうか…。悪い事しっちゃたな…。」

そして、数分間沈黙が続いていた。

「と、とりあえず帰ろつか。」

「…そうだな…。」

それから俺達は、無言でバス停まで歩いていった。

「なあ曜、俺はこれからどうすればいいと思う?。」

「とりあえず仲良くなるそこから初めて見たらどうかな?」

「そうだな…。そのためには、どうすれば…。」

「一緒にお出かけしてみたらどうかな?」

「お、お出かけ?!」

「え、そんなに驚くこと?」

「そ、そら異性と出かけるってことは『デート』ってことだろ?」

「確かに…。で、でも、距離をつめるにはそれが一番じゃないかな?」

「ま、まあ一つの手段として頭の片隅に置いておくことにするよ…。」

そうこう話しているうちに十千万付近のバス停についた。

「曜、今日はいろいろありがとな。」

「わたしなんかしたっけ?」

「まあ、気にするな。いつか恩はかえすよ。」

「なんかよくわかんないけどありがとう!」

「じゃあ、また明日な。また連絡するよ。」

「うん!じゃあねー!」

曜と別れた後、しいたけを撫でながら考えていると千歌がみかんを食べながら出てきた。

「あれ?ゆうくん何してるの?」

「おう、ちよつと考えごととしてただけだよ…。千歌こそどうしたんだ?」

「しいたけの散歩!ゆうくん…。気分転換も大事だよ!」

「ああ、そうだな。ついていっていいか?」

「うん!一緒にいこ!」

そのあと、俺は千歌にすべてを話した。

「曜ちゃんの案がいいとおもう!」

「ええっ?!お前もかよ!」

「うん!だってケンカしちやっただんでしょ?」

「いや、喧嘩した訳じゃないんだけど…。」

「でも仲直りした方がいいとおもう!」

「まあ、うん。そうだな。でも、どうやって誘えば…。」

「みかんあげればいいとおもう!」

「千歌は本当にみかん好きだな。」

「うん! 大好き!」

「まあ、千歌の笑顔のおかげで元気でしたよ! ありがとう!」

そう言つて頭を撫でた。

「えへへ♪」

(か、かわいい)

「と、とりあえず帰ろつか!」

「うん!」

その晩俺は、決心した。

「よし、デートに誘うか!」

——翌日——放課後——図書室——

「いざ入るとなるとなかなか緊張するな…。」

「誰がいるぞら?」

「ギクツ!」

「あ、昨日の…。吉田くんだった?」

「おう。覚えていてくれたのか。」

「実は、マルは人の名前覚えるの得意中の得意ぞら!」

「おお! それはすごいな!…。と、ところでさ来週の土曜日とかつて空いてたりするか?」

「来週ずらか? 多分あいてるとおもうぞら。何かあるぞら?」

「ちよつとほしい本があつてな、付き合つてほしいんだ。」

「そんなことなら、渡辺先輩に頼めばいいと思うぞらが…。」

「曜はあんまり本に詳しくないんだよ。だから図書委員の花丸ちゃんに来てほしいんだ。」

「ふーん…。」

「なんだよ、その目は…。」

なぜか花丸ちゃんが俺の事をにらめつけてきた。

「…、変なこと考えてたりしてるぞら?」

「そんな訳ないだろ！」

ついつい鋭くツツコミをいれてしまった。

とまあ、こんな感じでなんやかんや仲良くなった。

今俺は、我が家（仮）の十千万に戻ってきた。すると、なぜか曜と千歌がいた。

「おっ！ゆうくんおかえり！」

「あっ！おかえりー！」

「おう、曜と千歌ただいま。ところでなんで曜がここにいるんだ？」

「いたら悪い？」

「いえ！大歓迎です！」

「ところで花丸ちゃんに話は、できたの？」

「うん、一応ね。来週の土曜日一緒に本屋にいつて朝読む本と家で読む用の本を選んでもらうつもりだよ。」

「おー！いい感じだね！」

「おう！今のところはな。しかし、問題が一つある。」

「なにになにー、問題って。」

「食べ物ならみかんを…」

「千歌は黙ってる。」

「はーい…。」

「本題にもどすぞ。その問題というのは…。」

「ゴクリ…。」

「着ていく服がない!!」

「…。え？」

「二人ともご存じないと思うが、俺は恋愛経験ゼロだ。」

「知ってたけど、それで？」

「曜?!ひどくねえか?!ゴホン、話を続けるとだな、デートにどんな服を着ていけばいいかわからないんだ。」

「そんなことなら曜におまかせー！」

「まじか曜！助かるぜ！」

「その代わり、今度はわたしと…。その…。」

「どうしたんだ曜?」

「いや!なんでもない!」

「そ、そうか?じゃあとりあえず俺の服選びを手伝ってくれ!よろしくな!」

「…うん!まかせて!」

それから曜と色々計画を立てた。

「そういえば、最近千歌がしゃべっていない気がするんだが…。」

「た、たしかに…。」

「ま、まさか…。」

「zzz。スピー…、えへへみかん…。」

「あっ(察し)」

「てっ?!曜もうこんな時間だぞ!」

「うわっ!しまった!!どうしよう、終バスおわっちゃてるし…、門限もうすぐだよ…。」

「しかも、美渡姉も志満姉も今はいないぞ!買い出しとかだとおもうが、何分で戻るかわからん。」

「ど、どうしよう…。あ、雨も降ってきた!」

「うそだろ…。どうすれば…。」

！
考える。なにか、なにか方法があるはず…。 あっ!これならいける

「曜、いくぞ!」

「え?!外は雨だよ?!」

「大丈夫だ!まかせとけって!」

「ど、どうするつもり?」

とりあえず曜にかっぱを着せ、おどおどと戸惑う曜の手を引いて俺は駐輪場に向かった。

外に出てわかったことだが、風がかなり強く降っていた。

「方法ってまさかこれ?」

「おう!二人乗りで行くから曜は落ちないようにつかまっとけよ!」

「う、うん!でも、うちまでけっこうあるよ!」

「大丈夫だ!あと門限まで何分だ?」

「あと30分くらい!」

「おーけ!雨だからペースが少し落ちるがたぶん間に合う!」

そして、おれは全速力でこぎ始めた。

「な、なんとか間に合ったな。」

「うん!本当にありがとう!」

「制服濡れたりしてないか?」

「ちよ、ちよつとそんなにジロジロ見られたらなんだかはずかしいよ
!////」

「ご、ごめん!」

風が強く吹いていたせいか、曜の髪の毛はかなり濡れていた。

そのせいか、曜がいつもより色っぽくみえた。

しばらくボーとしたのちなんとか、我に返ってきて思った。

十千万にいた時よりもかなり雨が強くなってる…!

「ゆうくん、いまママから聞いたんだけど防風 波浪警報出てるんだって。だから今日はうちに泊まっていった方がいいと思うんだけどどうする?」

「ああ、今回はお言葉に甘えさせてもらおうよ。」

「やった!」

「お邪魔します。すみませんこんなビチョビチョで…。」

「いいの、いいの!曜をわざわざこんな雨の中、自転車で送り届けてくれるなんて素敵だわ!」

「僕には、勿体無いお言葉ですよ。お母さん。」

「あら、将来は曜のお婿さんかしら。」

曜のお母さんはニヤニヤしながら曜を見ていた。曜は遠くからでもわかるくらい顔が赤かった。

夕食、入浴を済ませた後俺は曜の部屋で曜と雑談していた。

そして…

「さて、そろそろ寝るか。俺はどこで寝ればいいんだ？」

「わたしと一緒に「それはダメ。」

「なんでよ！」

「当たり前だろ。俺は床で寝てるから、曜は何時も通りねてくれ。」

「むー。」

(やばい、頬膨らませてすねる曜がかわいすぎる…)

「あー、わかった。ベットで寝るから、その顔やめてくれ。かわいすぎて鼻血でそうだ。」

「っー／／／／」

(あー、かわいい、かわいすぎる。襲わないか心配だよ…)

「曜、電気消すよ。」

「う、うん。」

いつも元気いっぱいの子曜からは考えられないほど静かで大人しかった。

そつとなでてやると、顔が赤くなり顔を隠すように反対側をむいてしまった。

(ああ、かわいすぎる。)

そんな幸せな時間を過ごしているといつの間にか眠ってしまった。いた。

—————

朝目を覚ますと手に何やら布団ではない何かの感触がした。

「ん？なんだこれ…。」

状況を確認すると俺が曜にあすなろ抱きをしている状態である。つまり、この手にあったている感触は…。

そして、慌てて手を放した。

あ、危ない。曜がもし起きていたら警察に捕まるところだった…。

「ゆ、ゆうくん？／／」

「あつ、い、いまのは違うくて…。」

「もうちよっと触ってもよかったのに…」ボソツ
「えっ？」

「何でもない！／／朝ご飯食べよ！」

「お、おう！」

さつきなんて言ったんだ？声が小さすぎてまったく聞こえなかった…。多分、気のせいだね。うん。そういうことにしよう。

「あ、おはよう！」

「おはようございます！」

「おはヨーソロ！」

「昨日はよく眠れた？」

「はい！ベットが柔らかくて気持ちよかったです！」

「曜が柔らかかったんじゃないか？」

「え？それってどう言うことですか？」

「だって、朝起こそうと思って曜の部屋に行ったらゆう君が曜に抱きついて寝てたから、もしかしたらうってね！」

「ち、違いますよ！たしかに柔らかかったゲフンゲフン」

あ、あぶない。言いそうになった。というかお母さんに言わそうとしてんだよ！曜の目がめちゃくちゃこわいし！

と、とにかく逃げよう！

「あ、あー、ちよ、ちよっとトイレ!!」

「そっちは玄関よー。」

「あー！間違えちゃった！あはははは!!」

その後、なんやかんや朝ごはんが始まった。

朝食後

「お母さんほんまにご飯美味しかったです！ありがとうございます！」

「もうゆう君ったらお上手ね！なんなら、曜と家族になったらいいのに…。」

「それは曜がいやがりますよ。」

「そんなことないわよね、曜！」

なぜか曜のお母さんはニヤニヤしながら曜の方を見る。

「も、もう!!ママー！」

「あら、うれしくないの?」

「そ、そらうれしいけど…」ボソッ

「曜が困ってますよお母さん!それじゃあ、そろそろ十千万に戻りますねー!昨日は泊めていただき、ありがとうございます!」

「はい!また来てね〜!」

「ゆうくん!また明日ね!」

「また来ます!」

そう挨拶をして自転車にまたがろうとしたとき、あることに気づいた。

「あ、あれ?」

「ん?どうしたのゆうくん」

「じ、自転車が無くなってるううー!!」

「ええー!!!じゃ、じゃあ帰れないじゃん!」

「まあ、歩いて帰れば…!かなり距離あるよ?!」

「でも、俺が初めて沼津に来た時歩いて十千万までいったよ?」

「あ、そういえば、そうだったね。」

「じゃあ、バスに乗って大人しく帰るわー。」

「うん!気を付けてね!」

「ああ、ありがとう!」

そうして一日ぶりに十千万に戻ったのであった。

その後、理由を千歌、美渡姉、志満姉に話した。

何故か千歌はしばらく機嫌が悪かった。

—————デート当日—————

沼津駅前

「ちよつとはやく着きすぎたか。」

あの後、曜にデート用の服を選んでもらい、装備は万全である。

現在の時間は9時半。約束の時間10時である。

「お待たせずら!」

「いや待ってないよ。てか、来るの早すぎじゃねえか?!」
「実は乗るバス間違えちゃって早く着きすぎただけずら。」
「なるほどな、じゃあとりあえず本屋にいこつか!」
「うん!」

――道中――

「雨のあとだから、水たまりがちらほらみえるな。」
「そうずらね、踏まないように気をつけないと」
（ん?なんかいい音した車が…。シルビアs14か…。待てよ?このままじゃ、水たまりがはねて花丸ちゃんに…）

「危ない!」

「ずら?」

パシヤツ!

「ふう…。花丸ちゃん大丈夫か?」

「まるは大丈夫ずらが…。はっ!?ゆうくんびしよびしよずら!」

「あはは!このくらい大丈夫だよ!さ、いこつか!」

「なんで守ってくれたずら?」

「そら、女の子が目の前で濡らされそうになってんだから、助けるのは普通だろ」

「み、未来ずらあ」

「未来?」

――本屋――

「うーん、それがいいかなあ…」

「そうやってやみくもに探すのは、あんまりお勧めしないずら。」

「じゃあ、どうすれば…」

「まずは、読みたい本のカテゴリーを選ばずら!」

「読みたい本…か…。」

「何かないずらか?」

「うーん…、あつ!車!」

「車?!」

「おう！おれ実は、車が好きなんだ！そういう本はないか？」

「あ、あるにはあると思うすら、ちよつとまってね。」

「おう！」

(す、すごいあつい視線すら、なんだか緊張してきた…)

「「ありがとうございますー」」

「いやあー、いい買い物できたよ！ありがとな！」

「ど、どういたしまして、」

「ん？どうしたんだ？」

「な、何でもないすら！」

「？」

(さっきまでなんにも考えてなかつてすらが、これつてもしかして…
「デート」ってやつじゃあ…。い、今はあんまり考えないようにするぞ
ら…)

「おーい、花丸ちゃん？」

「はっ?!な、なんすら？」

「バスいっちやうよ？」

「の、のるすら！」

「……バス内……」

「ところで今はどこに向かつてるすら？」

「ん？ちよつとそこまで」

「そこまで？」

「まあまあ、付いてきなつて」

「う、うん」

「……スターバックス……」

「こ、ここはなんすら……！こんなオシャレな施設見たことない
すら……！」

「未だすら……!!」

「スターバックスっていう喫茶店みたいな感じのところだよ、こんな

「ところ来るのは初めて?」

「は、はじめてすら…!み、未来すらー!!」

「お、おい、店の中では静かに頼むよ…」

「—————」

「このジュース美味しいすらあー」

「(ジュースではないんだけどな…)そこまで満足してもらえとは…。なんだかこっちまで嬉しくなってきたよ」

「♪」

「こんなに上機嫌の間にもう一回聞く作戦だったが、中々聞きづらいな…。でも、ここで聞かなかつたらいつきけばいいいてんだ!勇気を振り絞れ!雄飛だけに!」

「な、なあ、花丸ちゃん」

「なんざらく♪」

「この前はすまなかつた!」

「何のことすら?!」

「スクールアイドル部のことだ。」

それを言うと花丸は凍り付くように動きを止めた。

「…、そのことすらか。おらも家に帰ってから色々考えてみたすら。そうしたら、意外とすぐに答えはつせたすら。」

「…。」

「まる、やっぱり興味あるすら!」

「そうか…。えっ?いまなんて…。」

「要するに入るってことすら!ただし、じょうけ:「よっしやあ!」話を最後まで聞くすら!」

「ごほん、まるにはルビイちゃんていう大切な友達がいるすら」

「ふむふむ、その子に何かあるのか?」

「実はその子はすごくスクールアイドルが好きで、いつかやってみたってよくいったすら」

「じゃあ、なんでその子はスクールアイドルのビラ配ってた時にこなつたんだらうな。俺が見たわけじゃないけど、千歌たちがそう

「いっていでぞ。」

「ルビイちゃんは人並み外れた人見知りなんぞら。そのビラ配りをずつと陰で熱心にみていたぞら。」

「だから、ルビーちゃんもスクールアイドル部に入れてあげてほしいぞら！それがマルからの条件ぞら！」

「なるほど…。」

「だ、だめぞら？」

「そんな訳ないだろ、この俺にまかせておけ！」

「頼りになるぞら！」

「ああ、必ずルビイちゃんを連れてくるからな！」 ナデナデ

「…／／。」

「んじや、帰ろつか！」

「う、うん！」

「————沼津駅前————」

「花丸ちゃん、今日は楽しかった！ありがとな！」

「おらも楽しかったぞら！」

「それはよかった！それじゃあ、また学校でな！」

「ゆ、ゆうくん！」

「ん？どうした？忘れ物か？」

「そ、そうじゃなくて…。」

「？」

「ま、またこうして出かけたりしてくれますか？」

「(なぜ敬語なんだ?) ああ！もちろんだ！」

「ありがとうぞら！」

「(このヒトになら本当の自分を見せてもいいんだ、なんだかうれしいぞら♪)」

「あつ！しまった千歌に怒られる！それじゃあ、またな！」

「う、うん！ばいばいぞら！」

「————十千万————」

「ゆうくんおそい！」

十千万に到着するとすでに高海家は勢揃いしていた。

「あー、すまんすまん」

美渡姉「じゃあ、ご飯にするぞ！」

千歌&雄飛「はい！」

…食後 千歌の部屋

「花丸ちゃんとはうまくいったの？」

「おう、ただ条件つきだな。」

「条件？」

「おう、ルビイちゃんっていう子も呼んでほしいって」

「ルビイちゃん…、どこかで聞いたことがあるような…」

「俺もそれは思っていてんだが思い出せなくてな。んー、なんだろうな、」

「あつ！もしかして…！」

「千歌何かわかったのか？」

「ゆうくんに渡した紙見せて！」

「紙？あーこれか？」

「そうそう！んーと…、どこかに書いたはず…あつた！ルビイちゃんっていう子は私が校門前で部員募集しているときに、美少女だったから声かけた子なんだ」

「変態のおっさんかよ…。」

「失礼な！」

「あはは！」

…後日 学校の放課後…

「さて、花丸ちゃんと千歌に言われた通りルビイちゃんを探るか…」

「ていうことで！囃手伝ってくれ！」

「い、いいけど、なんでわたし?!梨子ちゃんとか…」

「梨子はピアノの練習だ！それからルビイちゃんの容姿を知っている

のは曜だけなんだ！だから頼む！お前しかいないんだ！」

「お、お前しか：／／。う、うんわかった手伝うよ／／／」

「ありがとう！曜まじ天使！優しくてかわいいとか最高かよ！」

「もう！／／気安くそういうこと言わない！／／／」

「いたっ！そこまですることねえだろ！お仕置にコチヨコチヨの刑だ
！」

「う、うわっ！や、やめて！／／くすぐり弱いんだって！あ、あははは
は！」

「おりやおりや！」

「あはははははははははははははは！」

「おやめなさい！！」

「びくっ！」

上を見上げると綺麗な黒い髪の毛が印象的な美人さんがたついで、その後ろに隠れるようにして赤い髪の毛の美少女がいた。

「これはそういうことですか？」

「た、ただのじゃれあいというか……。な、なあ曜」

「う、うん！決まっていかがわしい行為なんかではありません！」

「な、なあ曜。この人どういう立場の人なんだ？（小声）」

「この人は生徒会長で：（小声）」

「だまらしゃーい！」

「ひいっ！」

「今すぐ生徒会室に来なさい！」

——生徒会室——

「あなたたちがあそこであのような行為をすることはうらやま……。ゲフ
ンゲフン、風紀が乱れますわ！」

「いまうらやましいって……」

「うるさい！」

「はい！申し訳ありませんでした！」

「カップルでいちやいちやしたくなるのはわかりますが、そういうことは家またはプライベートでおねがいますわ!」

その言葉を聞いたとたん曜の顔がリングゴのようになくなった。

「か、カップル:」お言葉を返すようですが、ぼくらはカップルではありませんよ」

「あら? そうでしたの?」

「はい、ぼくらはただの友達です」

「そうですか:。ならば、なお更いけませんわ!! お説教第二ラウンドに参りますわよ!」

「ええ~!!」

その後さらにこっぴどく叱られたのちに反省文を書かされた。

——廊下——

「はあ:」

「ゆうくんがあそこでカップルってこと否定しなければここまでにはならなかったのに!」

「しようがないだろ! 嘘ついてもしようがないんだから。」

「わたしはカップルでよかったのにな:。// (ボソツ)」

「ん? なんかいった?」

「もう! ゆうくん鈍感すぎ!」

「えっ?」(俺は、曜とカップルがいいなあ。まあ曜がそんな気持ちでおれを見てくれるわけないか)

「ほら、ルビィちゃん探しにいこ!」

「そ、そうだな!」

「なあ、曜」

「なに?」

「ルビィちゃんって子さ、髪の毛赤色?」

「どうしてそんなこと聞くの? 顔までは覚えてないけど、たしか赤だったような:」

「まじか:」

「え？そ、どうしたのいきなり…」

「もし、俺が見たのがルビィちゃんなら今日の怒られてたのが見られていた可能性がある…。」

「えっ、てことは…」

「第一印象最悪じゃん…」

デート?!

…。

「ど、どどどどうしよう、ゆうくん!」

「お、おお落ち着くんだ曜!」

「と、とりあえず、深呼吸を…」

「スウー…ハアー…、スウー…ハアー…。」

「落ち付けたな。」

「うん。」

そうして、二人は黙ってバス停に行った。

——バス内——

「突然だけどさ曜、明日休日だろ?」

「うん、そうだね」

「…。そ、その…／明日…い、一緒にどこか行かないか?／／」

「えっ?!／／／い、いまなんて?／／」

「だ、だから、で、でかけないか?／／」

「そ、それって…／／／」

「そ、そうだ!それでさ!ルビーちゃんを説得する作戦を俺と一緒に立ててくれないか?／／」

「う、うん!／／と、というか説得ってなんの?」

「ま、まあ、いろいろ…」

「…／／／」

「と、とりあえず、帰ろっか!」

「そ、そうだね!」

——一千万——

「めちやめちや緊張した…。どさくさに紛れて曜をデートに誘う作戦ならそこまで緊張しないと思ったんだが…、大間違いだな」

「曜ちゃんとデートするの?」

「ひっ!なんだよ、志満姉かよ…、あーびつくりしたあ」

「あら?私に聞かれるのは大丈夫なの?」

「まあ、千歌に伝わらなければ…」

「ちかの事よんだ？」

「うわあっ!?!」

「ど、どうしたのゆうくん？」

「な、なんにもない!じゃあ、おれねるから!」

「そっちはトイレですよー」

「あ、またやっちゃった」ドタドタ

「志満姉、何の話してたの？」

「ないしょ♪」

「えー!おしえてよー!」

「そのうちわかるわよ!おやすみ〜」

「お、おやすみー」

――雄飛の部屋――

「あ、あぶね…、千歌に聞かれるところだった…。流石に曜の幼馴染に知られるのは流石にまずいよな…」

「寝よう…」

――翌日――

「ど、どうしよう…、曜とのデートのワクワクと千歌にばれそうになったハラハラが残ってねれなかった…。幸い朝起きてよかった…。」

いつからだったかな…、曜のこと好きになったの。生徒会長に怒られたときに「カップル」って言われたときなんだかうれしかった。あの時は必死になって真顔で耐えてたけど内心はめっちゃうれしかった。

いや…、実はもつと前から好きだったんだろうな。ずっと自分の気持ち信じてなかったけど、やっぱり「恋」だったんだな。でも…、俺にはむりかもな…。

とりあえず今日のデート成功させるぞ。

「ゆうくん!」

「お、曜」

え、まって、めちゃくちやかわいい。(イメージ劇場版の私服姿)

「そ、そのなんだ…／＼。いつもより、か、かわいいな。／＼
「か、かわいい？／＼／＼あ、ありがと…／＼」
「…。」

「じゃあ、いこっか！」
「う、うん！」

——伊豆・三津シーパラダイス——

「曜来たことある？」

「うん！よくくるよ！」

「まずい…さつそくやらかした…。俺ここはじめて中の初めてなんだけど…。今ある魚知識をすべて…ダメだ…そんな知識皆無だ！」

「ゆうくん？」

「!？」

「どうしたの？難しい顔して…」

「い、いや、なんにもない。ただ、来たことあるとこだったら…その、つまらないかなってね」

「そんなことないよ！だつてゆうくんとのデートできてるんだもん／＼つままないわけないじゃん／＼」

「そ、そうか！ありがとな／＼」

「いつもみたいに自信持ちなよ！そっちの方がゆうくんらしくていいとおもうー！」

「っ！…そうか！ありがとな！」

「じゃあいこー！」

「ああ」

「そ、それとき…／＼」

「ん？どうした？」

「せ、せつかくだし手…繋がらない？／＼」
「っ…！」ドキッ!!

「ぜ、ぜび…／＼」ニギッ

「ゆうくん、手汗すごいね／＼」

「あ、ごめん！」

「大丈夫！もしかして、緊張してるの？」ニヤニヤ

「そ、そろそろだろ、曜みたいなの可愛いなこと手をつなげたんだから…」
／

「そ、そっか／」

（からかえたと思ったのにこっちまで恥ずかしくなってきちやった／
／）

——水槽前——

「この魚、見たことないな。」

「ゆうくんのいたところにはいなかったの？」

「うん、たぶん…。あ：グーグルで調べたらいたわ」

「知らなかったただけってことだよ？よかったー」

「なんで安心するんだ？」

「だってこれただの「ミズクラゲ」だよ」

「そ、そっかー！うん、知ってたよ！」

「ホントに？」

「知りませんでした。ごめんなさい。」

「嘘までつくことないのに…」

「男の意地ってやつだよ」

「そういうもんか」

「そういうもんさ」

——昼食後——

「美味しかったね！」

「ああ！値段ははったがうまかったな！」

「だね！…あれ？」

「どうした？」

「あれ、生徒会長じゃない？」

「あ、ほんとだ」

「なんか焦ってない？」

「たしかに…。聞いてみるか？」

「うん、行ってみよう！」

…

「生徒会長？」

「あ、あなた達は?!」

「なんだか焦ってるように見えたけど、何かありましたか？」

「よかったら、私たちが手伝いますよ！」

「る、」

「る?。」

「ルビイがどこかにいってしまったのですわ!!」

「ルビー?」

「私の妹ですよ!赤い髪の毛の!」

「赤い髪の毛?。?ルビイ?。」

「よ、曜…。」

「な、なあに?」

「このルビイって、千歌がスクールアイドル部にいたいって言うてるんじゃないか?」

「そ、その可能性は大いにあるね…。」

「二人とも!!探してください早く探してください!!」

「は、はい!!。」

「曜、ここは手分けして探そう。俺はひと気が少ないルートの方を探す。万が一のことがあるからな。曜は、人の多いところから探してくれ。」

「え?でも、ゆうくん一人で大丈夫?」

「ああ、ここは男の俺にまかせとけ。曜も気を付けてな」

「う、うん!」

危機

「どこからさがそうか…。そんなに人目が見つからない場所…。ねえ。」
「バックヤード…。とか？いやいや、さすがにないよね。裏道とか細い通路に行ってみよう。」

——ある通路——

「わかってたけど、いないよね。どこに行つたんだろう。」
もしかして、もうここにはいない？外に出たとか？一応曜に連絡だけ入れて外を探そう。
連絡を入れると「私も行く」と言い出したが、万が一のことがあるため「生徒会長と一緒にいてくれ」と言っておいた。

——とある路地——

「*／・；；@？・ゝ」

（ん？なんか聞こえる。話し声か？まさか…）

「お嬢ちゃんこの先にいいところあるからいこうぜ！」

「あ、いや…。そ、そのお、ルビィ水族館に連れがいて…」

（連れ…。お姉さんのことだな、多分。それから特徴となる赤い髪の毛…。おそらくあれがルビィちゃんだな。でも、どうやって助ければ…）

「そんなのほつといていこうぜ！」

「え…。いや…。でもお…」

「ちっ！もう面倒くさい！来い！」

「ぴぎい！」

（まずいこのままでは…。なにか、ないのか…。自然に…。極力自然に…。あっ！）

「おーい！こんなところにいたのかルビィ！」

「えっ？」

「はあ!?!」

「ああー! ほんとすいません! うちの子が迷惑お掛けて…」

「お、おまえはなにもんだ!」

「僕は、ルビイの、この子の兄です。さあ、大人しく返してください」
「ほう…。そういうことなら…つて返すとも?」

「ですよねー。じゃあ、警察に…『殺すぞ』」

「そんなことをしてこいつがタダで済むと思うか?」シャキン

(な、ナイフ?! まずい…変に刺激したらルビイちゃんが…)

「た、たすけてえ…」

「…っ!」(ど、どうすれば…どうすればいいんだ…しょうがないここは…)

「どうした? 恐怖で怖気づいたか?」

「あ、パトカーだ」

「なにい?!」

(いまだ!)

この瞬間に雄飛は拉致犯に急接近し、こちらを振り返る前に何の理由もなくして鍛えた筋力を使い、一発顔を殴った。

「ぐはあっ!」

拉致犯はルビイから手を放した。その瞬間を雄飛は見逃さなかった。態勢が崩れたルビイを素早くキャッチ(お姫様抱っこ)して拉致犯から距離をとった。

「お、おまえええ! 絶対にぶっ殺してやる!」

拉致犯は態勢を立直し、殺意にの目をこちらに向けながら、猛スピードで走ってきた。

(くっ! まずい! 抱えてる状態じゃ、身動きが取れない…!)

グサツ!!

「ぐうっ!」

雄飛は身動きが取れず腹にナイフが突き刺さった。白かったシャ

ツが見る見るうちに赤く染まった。そして、その場に倒れこんだ。

それと同時に胃をそこからナイフでぐちゃぐちゃにかき混ぜられるような痛みがした。

「あ、や、やべえ、ほ、ホントにやっちゃった…！まずいまずいまずい！！」

(ヤツは完全にパニック状態になっている。逃げるなら今がチャンスだが、刺さったナイフが痛すぎて身動きが全く取れない…。やばい…本気で死にそうだ…。やばい…意識が…。)

「る、ルビィちゃ…ん…。に、逃げろ…。」

薄れゆく意識の中、視覚には何が起こったのか理解が追い付かなく、座り込んだルビィ。嗅覚には鉄みたいな匂い…。聴覚には遠くからサイレンの音だけが聞こえていた。

死

へしばらく茶番にお付き合ってください。『吉田雄飛 最後の心の叫び』
です」

あれ…、おれしんだのかな…。

まあ、さすがにあそこまで派手に刺さったら死ぬよな、普通。

…。

つまらない人生だったなあ。

まだ一度もキスしたことないし、手もつないだこともない。

でも、いい友達たくさんできたし両親もいい人だったから色々なことを学ばせてもらったなあ。そんな両親が好きで、いつも優しく接してくれる友達が大好きだった。

でも、両親の死をきっかけに俺は兵庫（実家）には、いられなくなつた。

別の私立高校に通い始めたものなにかが引つかかり、警察官に言われたとおりに沼津に行ってみることにした。

それからは、内浦で生活することになった。

いきなり一人暮らしだったため、不安、緊張で胸がいつぱいであった。でも、こうするしかなかった。

親戚に負担をかけず、自分の知り合いと会うこともない、

そして、自然が豊かでしっかり自分のことを見直せる場所…沼津。

新しい環境でどうやったらうまくなじめるか、食事はなど。色々考えながら電車で揺られているとき、

一人の女の子と出会った。

渡辺曜である。あの子は見た目も性格もどストライク、毎日明るくて、周りにも気が使えるが、少し自分の気持ちを隠してしまうような癖があり、見ていると心配になることだってあった。

会ってそこまで時間はたっていないが、そんな彼女を知っていくうちにどんどん好きになった。

言葉では、正直伝えきれない。ヘタレかもしれないが、そんな気持ちを彼女にわかって欲しいと思っている。

まあ、伝えるわけがないよな。

しつかり言葉で伝えなきゃ…。でも、死んでしまった今ではそんな願いは届かない…。

だからこの夢のような場で伝えよう…。

好きだ、大好きだ。彼女になってほしいとおもったし、その先もずっと一緒にいたいと思った。結婚だっと思っていたし、大好きな車で一緒にドライブもしたい、色んな景色をいっしょに見て、感じて、共有したいとおもった。今までありがとう…「ゆ……………き……………お願い……………」

こ、この声は曜?!なんで曜の声が聞こえてくるんだ?!

うわあ!!な、!!なんだこの光は?!俺はいつたいたい…どうなるん

だああああああ

!!!!!!

「これでもう大丈夫そうです。一時は出血がひどく、どうなるかと思いましたがよかったです。」

「本当にありがとうございます！ゆうくん…、本当によかった…。」

回想

雄飛からの連絡のあと引き続きルビィちゃん探しを手伝っていた。サイレンの音が聞こえ、雄飛のことが心配になった曜は生徒会長ダイヤさんと共に雄飛に向かったとされる路地に向かった。

そこには、たくさんの警察官、救急隊員の方が誰かを病院に搬送しようとしていた。

何があつたのかと周りを見渡すと、

大量の血がありその前に絶望しきつた顔で座り込んでいるダイヤさんの妹と思われるルビィちゃんがいた。

「ルビィー！大丈夫ですか?!ケガは?!」

「る、ルビィは大丈夫…、でも、お、お兄さんがあ…」

その瞬間、曜は背筋が凍り付くような感覚を覚えた。

「ね、ねえ、ルビィちゃん、そ、その人何色の服着てた?」

「…。し、白…」

「っ!!」

わたしは救急車のところまで全力で走った。

「のしてください!」

「無関係者は降りてください!」

「わたしはこの人のこ、恋人です!!」

「!わかりました。」

「ありがとうございます—」

——回想——終——

そして、今に至る。

医者と言う通り、雄飛は一命をとりとめたのであった。

知らない天井

目を開けると知らない天井が目に入った。

周りには機械が並び、口元には人工呼吸器がついていた。

それらの状況から自分は病院にいるのだと察した。

時刻を見ると午前6時だった。

そして、体を起こして見ると自分の手を強く握る彼女の姿があった。

「よ、曜？」

「ゆ、ゆうくん？」

「何があっ「無事でよかった!!」

そう言っ曜は俺のことを強く抱きしめた。

「おいおい、いきなりされたらびっくりするだろ」

「だ、だって、本当に死んじゃったらどうしようって…」

「大丈夫だよ、これくらいなんてことないよ。」

「そっか…。よかった…。本当によかった…」

「そんなに心配してくれてたのか…。ありがとな」

そう言っ俺は曜を抱きしめ返し、頭を撫でた。

そのあと曜は安心したのか、そのまま寝てしまった。

その後、見舞いに来た志満姉と千歌にその光景を見られてしまったが、悪い気分には一切ならなかった。いっそのままずっとすごすことができればいいのになと思っていた。さすがに退院はしたいと思うが…

次の日、病室に医師がやってきた。

「具合はどうかな？」

「今のところ何の問題もないです」

「それはよかった…。実は運び込まれてきた時の君は、かなり危ない状態だね。正直後遺症なしで助けられるかどうか不安だったんだよ。まあ、とりあえずは安心って感じだね。」

「はい、おかげさまで。本当にありがとうございました」

「君にはしばらく学校を休んでもらうことにするよ。」

「大体どれくらいの期間ですか?」

「んー、早くて2週間かな」

「もう少し早めることはできませんか?」

「そうだねえ、1週間は治療と様子見で、もう1週間はリハビリの予定だから激しい運動をしないって約束できるなら帰ってもいいよ」

「本当ですか?!ありがとうございます!」

「ゆつくりしていけばいいのに。なぜそこまで急ぐのかな?」

「部員集めをしないといけないんです」

「部員集め?」

「はい、実は新しく部活を作ろうと精いっぱい頑張っている友達がいるんです。そいつの手伝いをしたいと思って…」

「なるほどね。わかった。そういうことなら1種類の治療で出来る限り治そうと思う。だから少しだけスケジュールがきつくなるかもしれないけど大丈夫かな?」

「はい、もちろんです!お手数をかけますが、よろしくお願いします。」

「あ、ここに車椅子置いておくからそこか行くときは使つてね」

「ありがとうございます」

そう言い残すと医師は病室から出つていった。

曜と千歌と梨子は学校帰りに毎日会いに来たくれた。

こんなにかわいい子たちに囲まれて送る病院生活はなかなかいいものだった。

そんなある日、生徒会長が病室に訪れた。

病室に入る否や、

「申し訳ありません!!」

「えええ?!いい、いきなり土下座しないで下さい!!顔を上げて!」

「いえ、そういうわけにはいきません。うちの妹を助けたせいでそのようなお怪我を…」

「このくらい別にどうってことないですよ!と、とりあえず頭をあげ

て！」

そういうと生徒会長はようやく顔を上げた。

「そ、そうですか…。しかし…「大丈夫だったら大丈夫なの！」

「ゴホン、それで？今日来た要件は？そのことだけを言いに来たわけじゃないっばいけど。」

「そうなんです。一応あの事件の犯人の末路をご報告しにまいりました。」

「末路って…。警察に捕まったんじゃないの？」

「はい、しっかりと確保されて現在は拘留所の中におられます。」

「そっか。捕まってよかったよかった。それで、ルビィちゃんは どうしてる？」

「今呼びますわ。ルビィー、入っておいで」

「し、失礼します。こ、このたびは本当にあ、ありがとうございます」
「気にしなくていいよ。無事で何よりだ。」

そう言つてルビィちゃんの頭を撫でてやった。

少しびくつとしてそのあとじっとしているのが、小動物のようかわいかった。

「すこしの間、わたくしは席をはずしますわね。」

「どこか行くんですか？」

「いいえ、少しお飲み物お買いに」

そういうと少し速足で病室を去っていった。

ルビィーちゃんと二人きりになった俺はなんだか気まづくなっていた。

「あ、あのさ、ルビィちゃん！」

「は、はい!!」

「突然なんだけど、スクールアイドル部に入らない？」

「る、ルビィ実はずっと前からスクールアイドルやりたいつて思つて…。」

(花丸ちゃんから聞いてた通りだな)

「じゃあ、一緒に…」「え、ごめんなさい。」

「え？」

「る、ルビィ、人前に出るのがすごく苦手だからきつとみんなに迷惑をかけちゃう…。だから「大丈夫だよ」

「誰だって、人前に出て何かをするときは緊張すんだよ。最初からうまくできる人なんていないんだよ。」

「で、でも、それができたとしても、ダンスとか、歌とかは…」

「それも心配するな。」

「なんだってそうだよ。さっき言った事もそうだけど、結局は自分がやりたいかどうかだよ。」

「そ、そうかなあ…。る、ルビィにもできるかな…」

「できるよ。だって、スクールアイドル好きなんでしょ？」

「…」コクリ

「だったら大丈夫！なんかあったときは俺がサポートしてやるよ！」

「…支えがあれば…ルビィにもできるかも…」

「うん！できるよ！もっと自信もっていいんだよ！」

「う、うゆ！こ、これからよろしくお願いします！」

「こちらこそよろしくね、ルビィちゃん！」

———ドアの向こう———

「成長しましたね…。ルビィ…。」

そう言い、一人で涙を流すダイヤであった。

お刺身はいかがかなん？

…

ルビイちゃんがスクールアイドル部に入ったことを千歌に知らせるためおれは電話をかけていた。

☒？ルルルルル

「もしもし？」

「おはよう。千歌」

「ゆうくんか！おはよう！急にどうしたの？」

「ちよつといいお知らせがあつてだな」

「お知らせ？なにになに？」

「ルビイちゃんがスクールアイドル部に入るってさ！」

「え？る、ルビイちゃんが？」

「うん」

「一番可能性低いと思つてたルビイちゃんが…」

「だから来週からよろしくね！」

「うん！任せて！」

「要件はそれだけだから。じゃあね」

「うん！ばいばい！」

ふう、近況報告もおわつたし…

フラツ

「っ?!」

不意に頭がボーとするような感覚を覚え、視界が急に暗くなった。俺は近くにあつた手すりにしがみついた。

「…。なんか入院し始めてからちよつと動くだけで眠くなるようになってしまったな。まあ、多分しばらく寝て起きての生活だったからしょうがないか。」

――数日後――

コンコン

「ん？どうぞー」

ドアが開くとそこにはなぜかクーラーボックスを抱えたポニーテールの女の子がいた。

「え、えつと…、部屋間違えてませんか？」

「いやここであつてるよ？」

「…。」

ダメだ状況が読み込めない。え、なんで知らない人がクーラーボックスもつて俺の部屋にいるんだ？

もしかして曜の知り合い？なのか？

「はい、これ」

ポニーテールの女の子は持ってたクーラーボックスをこちらに差し出した。

「あ、ありがとうございます？」

「どういたしまして！」

「え、えつと…、聞きそびれましたが、ど、どちら様ですか？」

「え？千歌から何も聞いてない？」

「特に何も…」

「はあ…、全く千歌ったら…」

どうやら千歌とは知り合いらしい。

「私は松浦果南。曜と千歌の幼馴染だよ！よろしくね！」

「あ、は、はい。よろしくお願ひします！」

「雄飛はお魚好き？」

い、いきなり呼び捨て?!ふ、フレンドリーだなあ

「はい、知識はほとんどありませんが苦手ではないですよ！」

「そっか！じゃあよかった！」

「え？なにが？」

戸惑る俺に対して松浦さんはニヤニヤしながら近寄ってきて自分の持ってきていたクーラーボックスをあけてみせてくれた

「じゃーん！」

「うおお！す、すげえ!!」

そこには大量の魚が入っていた

雄飛は魚の知識が皆無のためどれが高くてうまいのか一切わからなかったが、どれも新鮮でおいしそうに見えた。

「これどうしたんですか？もらった割には新鮮すぎるような気がするし…。」

「これ私がさつきとつてきたやつ」

「え？さつき？」

「うん」

「さすがに言葉が出ない…。でもなぜ曜や千歌ではなく、初対面の俺なんだ？」

「…。これを見せるためにわざわざここに？」

「え？そうだけど？」

「あ、そうなんですな」

「てつきり何かしにきたのかと思ったが…これだけ…？」

「それとき、よかったらこれ食べてみてくれない？」

「な、生で？」

「お刺身で！」

「是非おねがいます!!」

即答だった。

なぜならこの男、刺身を食べた経験がほとんどないのであった。ちなみに食べた経験があるのは、は焼き魚である。

こつちで千歌たちと十千万でお手伝いをしているときに見たことはあつたが、食べたことはなかった。

「はい！召し上がれ！」

「いただきます!!」

お腹いっぱいになった後、雄飛は思った。

病院で刺身っていいのかな…。と。

居場所

あの後、看護師に食べているところを見つかり松浦さんと怒られました。

——数日後——

AM 7時00分

カーテンの間からまぶしい日差しが差し込んできた。
目をこすりながら勢いよくカーテンを開けた。

「今日で退院だああ!!」

大声を出しすぎたせいで、廊下いた看護師にいやな目見られたため
急いで布団の中にかくれた。

「クッククク! ついにこの時が来た! これでやっと部員集めを再開
することができる!!」

「おはよう〜」

この声は!

「志満姉!!」

「うふふ、あさから元気ね」

「そろそそですよ! やつとここからでられるんだから!」

「あんまり大きな声出しちゃだめよ」

志満姉の怒り方は穏やかだが、なにか恐怖を感じる。

「あ、ごめんなさい。」

「そういえば、千歌は?」

「あら? 一緒に来てほしかったの?」

「いや、そういうのじゃなくて!」

「ふふ、今日は学校よ〜」

「あ、そっか。今日金曜日だった。」

「もう、雄飛君つたら〜」

そんなこんなで話をしているとドアがノックされた。

「おはようございます、吉田さん。今日で退院ですね」

「はい！1週間ありがとうございます」

「それでは最終検査がありますので移動しましょう。高海さんはこちらにおかけになってお待ちください。」

「はい」

——検査後——

「さつきも言った通り本来なら2週間の入院期間を1週間にしたから体はあんまり動かさないようにね。」

「傷が開いちやうから。」

「わかってます！ありがとうございます！」

…

「志満姉、おまたせしました！」

「じゃあいこっか」

「うん」

——車内——

「入院生活どうだった？」

「めっちゃ暇でした。」

「あら？そうなの？会いに行ったときはあんなに楽しそうにしてるのに」

「そ、それはみんなと会えてうれしかったからだよ…」／／／

「ふふ、雄飛君もかわいいところあるのね」

「い、言わないでくださいよ、特に同級生組には」

「わかってるわよ。」ニヤニヤ

あ、これ絶対言われるやつだ…。

「さあ、ついたわよ」

「ありがとう、志満姉」

「どういたしましたして、車置いてくるから先に中に入ってて」

そう言っってカギを渡された。

ガラガラガラ

なんだか実家に帰って来たような気分だった。

ドアを開けた瞬間にそう感じた。

きずくと頬にあたたかい何かが流れた。

手をやるとそれがなんなのかすぐにわかった。

「…。涙だ…。」

自分がなぜ泣いているのか全く分からなかった。

でも心当たりはあった。

「きつと寂しかったんだろうな…。」

「あら？まだ玄関にいたの？」

「?!」

振り返ると志満姉がいた。

「どうしたの？」

「な、なんでもないですよ！それじゃあ、おれは部屋に…。」雄飛君

「な、何ですか？」

「私たちも寂しかったのよ、雄飛君がいなくて」

「そうだったんですか…。」

「ずつと言ってなかったけど、事件のあった日、曜ちゃんからいきなり電話があつてゆうくんが刺された聞いた時は本気で心配したの。死んじゃったらどうしようって病院に向かう途中の車の中でずっとそんなことを考えてた。」

「…。そんなに心配してくれてたんですね…。居候のおれに…。」

「雄飛君はもう居候なんかじゃないわよ。」

「え?」

「私たち高海家の大切な家族よ。だからもう堅苦しい敬語はやめて。わがまま言いたいときは言つて。泣きたいときは隠さずに言つて。わかった?」

「…。あ、あり…。が…。とう。志満姉。」

また目から涙があふれ出した。

そんな俺を志満姉はそつと抱きしめてくれた。

久しぶりだった。いつぶりだろう。こんな気持ち。

心の底からじわじわと湧き出た何かによってあたたかくなるような感じ……。わかった。昔の両親だ……。

父さん、母さんやつと見つけたよ。俺の居場所。

開きっぱなしの扉の向こうに見えている夕日がこれまで以上にまぶしく、暖かく感じた。

朝

「志満姉、ほんとにありがとう」

「うふふ、どういたしまして。雄飛♡」ウインク

「…。なんかむずむずするなあ」

「はじめはそんなもんよ。特に呼び方なんて」

「それもそうだね」

ガラガラガララー！

「たっだいまー!!」

「あ、千歌（ちゃん）おかえり」

「あ、うん。ただいま！ゆうくんもおかえり！」

「おう！ただいま！」

「思ったんだけどさ」

「？」

「なんで志満ねえとゆうくん抱き合ってるの？」

「あっ…」

「もしかして、そういう？…」ジトー

「ち、ちがう！これは色々あつたんだ!!な！志満姉！」

「そ、そうよ！色々あつたのよ!!」

「ふーん」ツーン

「ゆうくん。」

「は、はい…。なんでございましょう…。」

「後で私の部屋に来て。」

「はい…。」

——千歌の部屋——

「…。」セイザ

「…。」ウデグミ

「ゆうくん」

「はい…」

「ちかが何で怒ってるかわかる？」

「え、えつと…、千歌さんのお姉さんと抱きしめあったからでしょうか…」

「それもあります」

「つてことは他にもあるつてこと?!」

「…。」

なんかあつたつけ…、まじで思い出せない…

「はあ、しょうがないからおしえてあげるよ」

「…」

「それはね、…。」

「…」ゴクリ

「ゆうくんがちかをたよらなかつたこと!!」

「…。え?」

「志満姉の前では自分の本音言うくせに、ちかの前になつたら下手な笑顔で何でもないの一転ばり。それに怒ってるの!!」

「そ、そつか…、ごめんな千歌。」

「わかればいいのだ!」ニコ

「それと…」

千歌がいきなり立ち上がって俺の耳元で…

「ちかにとつてもゆうくんは高海家の大事な家族なんだからね」ボソツ

「っ?!ありがとう」／＼

「じゃあ、しいたけの散歩いってくるー!!」

「い、いってらっしゃい」

——翌日——

ピピピピピピピピ!!

「ん…、あさあ?」

「おはよう、雄飛」

「んう…、ああ、志満お姉ちゃん?」

「し、しまおねえちゃん?!」／＼

「え?お姉ちゃんじゃないの?」ウルツ

「そ、そうよ！おねえちゃんだよ」／／／
「えへへ」

そして雄飛は志満の膝の上に移動する。

「っ?!」／／／／／

「∴。」ムニヤムニヤ

「∴。」ナデナデ

「∴。」ニヘラ

「∴。」／／／

「∴。」スンスン

「お姉ちゃん、いい匂い∴」

「っ?!いい、いつもと変わらないわよお∴」／／／

か、か、かわいい!!!／／／／／

ガラ

「おーい、志満姉。雄飛は起きた∴か？」

「これどういう状況？」

「あ、美渡お姉ちゃん♪」

「み、美渡お姉ちゃん?!」／／／

「ど、どういうことだ?!あのクールで元気な雄飛はどこに行ったんだ?!」

「あら？美渡ちゃんそんな目で雄飛のこと見てたのね」ニヤニヤ

「そ、そんなこと今はどうでもいいだろ!!というか、志満姉その呼び方∴」

「うふふ、色々あったのよ」

「まあ、それはおいおい聞くとして、早く起こしてやらないとAqour'sの練習遅れるぞ?!今日に限ってばかりかは先に行っちゃったし」
「で、でも、もう少しこのままでも」ニコニコ

「弟ができたみたいでうれしいのはわかるけど、起こすぞ」私も志満姉みたいに膝枕してやりてえ

「こらー！雄飛おきろ!!」

「ハッ?!」

「おはよう〜雄飛♡」

「…?」

あれ、枕こんな之高かったけ…そしてニヤニヤしている志満姉の顔がなぜおれの真上に…。

「ッ?!」

「な、ななな、なんで志満姉の膝の上にいるんだ?!」

「あら? 覚えてないの?」

「うん…、というかこんな時間?!」

「ほら、雄飛! 制服だ!」ポイツ

「おつとつと」キャツチ

「ありがとう! 美渡姉!」

「おう!」

「いってきます!」

「いってらく!」

「いってらっしゃい! あんまり激しい運動しちゃだめよ」

「わかってるよ!」

「無理しないか心配ね…」

「大丈夫だろ、」

「そうかしら…」

「気にしなくつても大丈夫だよ」

「…。」

こんなこと思うのは縁起が悪いかも知らないけど、なぜかまた雄飛が遠くへ行ってしまう気がするわ…。

存在意味

——バス停——

「はあ、はあ…なんとか間に合った…」

Boone

「ちょうどバスが来たな」

「まってー！」

「ん？」

「あ！ゆうくん退院おめでどう！」

「おう、まだ体動かしたりできないけどね…。入院中お見舞い来てくれてありがとなー梨子」

「わ、わたしがしたくてやってたんだし気にしなくていいよ」／／

「梨子はいい嫁さんになれるな！」ニカッ

「もー！そういうこと簡単にいわない！」／／

「本当なんだけどなー…」

「…。怒るよ？」

「す、すまんすまん！」

「まあ、それは置いといて珍しいな。梨子が遅れてくるなんて。何かしてたのか？」

「え、えつと…、ちよ、ちよつと寝坊しちゃって…」メソラシ

「…」ジー

「…」アセアセ

「嘘だな」

「えっ?!」

「梨子が嘘つくとき目をそらす癖があるからな。」

「い、いや、嘘なんか…」メソラシ

「あ、やっぱり！なんか隠してるな！」

「もう！そこは食いつかなくていいの！」／／

「なんでだよー！気になるじゃんか！」

「だーめ！せめてみんなと合流するまで待ってて！」

「えー！」

そんなやり取りをしていると、バスが浦の星の近く停留所に止まった。

バスが止まった瞬間、梨子が勢いよく立ち上がり、「先に行くね!」といいのこし去っていった。

いつもなら走って追いかけるのだが、おれは現在進行形でドクターストップがかかっているためゆっくり降りた。

急な坂を上ると、校門が見えてきた。

入学してからやく2ヶ月半が立った。

あたりを見回しながらそろそろ夏だなーと思った。校門の前に立った。

するとなんだか懐かしい気がした。

退院してからはこう思うことばかりだなーっと思いつつ早足で梨子を追いかけた。

——部室——

「みんな!ごめんね!」

「もー!梨子ちゃん遅いよー!」

「もう準備はできてるよー!」ヨソロー

「メンバーが一気に増えたから吉田さん喜んでくれるかなあー」

「大丈夫だよルビィちゃん!きつと喜んでくれるぞら!」

「クツクツク!私の新しいリトルデーモンがくるのね」

「善子ちゃん、それはないぞら。」

「ヨハネよ!」

「わたしは病院にお刺身持っていったときに雄飛とあったけどまりとダイヤはあったことあるの?」

「かなん?だれがここの理事長をやっているとおもってるの?入学を認めたのはこのわたしよー!あったことがないわけないでーす!」

「わたくしも、ルビィを助けてもらったお礼をいいに病院に行きましたので顔見知りですわ。あと、学校で曜さんとの風紀が乱す行為を注意した時に…」

「ま、まって！ダイヤさん！それは言わないって約束じゃ…！」
「あ、…」

「「「「「曜（ちゃん）（さん）…。」」」」」

「い、いや！その！くすぐりあいっこしてただけで別に怪しい行為では…」

ガラガラガラ

「「「「「っ?!」」」」」 ビクッ

「あれ？なんか多くない？」

「み、みんな！はなてー！」

千歌の合図で九人はクラツカーのひもを引っ張った。

パンパン！

「「「「「雄飛、退院おめでとー!!」」」」」」

「おー！ありがとー！千歌が先に行ってたのっでもしかして、これのため？」

「うん！そうだよー！よろこばせようと思って！」

「ありがとなー！」 ナデナデ

「えへへ」

「…。」 ムウー

「曜もありがとなー！」

「フンっ！」 プイツ

「あれ？」

「お元気そうで何よりですわ、吉田さん。」

「おー、これはこれは、黒沢さん。おかげさまで元気になりました！というか、どうしてここに？」

「私たち三年生もA q o u r sに入部いたしましたの。」

「松浦さんと、まりさんも？」

「そうだよー、もともと私たちスクールアイドルやってたんだよねー」

「えっ?! そうなの?! 経験者いてくれたら安心感あるな！」

「といっても、ってかんじだけだねー」 アハハ

「じゃあ、指導役はほぼ決定だな！」

ん、までよ……。指導役が決まった。部員の数も上限には達している。千歌も満足そうだ。あれ……。

おれが居る意味なくね？

ありがとう。

あのあと部室で自己紹介をし、歓迎会が行われた。

「これから頑張ろー!!それじゃあーかんぱーい!!」

「「「「「かんぱーい!!」」」」」」

改めて見渡してみると俺と初対面の子がいた。

津島善子である。

俺が目を合わせようと遠くから見ていると彼女はこちらを見た。すると、すぐにそっぽを向いてしまった。恥ずかしがり屋なのだろうか?とりあえずあいさつしてみよう。あいさつはやっぱり大事だからね。

「君が津島善子ちゃんだよね?」

「は、う、は、はい…。」

「千歌からきいてるかも知れないけど一応スクールアイドル部の吉田雄飛だよ。よろしくね!」

「よ、よろしく。」

やっぱり恥ずかしがり屋なのかな?さつき、花丸ちゃんとかとかと話してるときはもっと活発な子だとおもってたんだけど…。

「クッククク!」

「え…?よ、善子ちゃん?」

「ようこそ!我がリトルデーモンの惨禍へ!!」

な、な、な、なんだ?!り、リトルデーモン?!小悪魔ってことか?!

「り、リトルデーモン?」

「そうよ。あなたは私のリトルデーモン。たった今あなたと契約した。墮天使ヨハネよ。」

「だ、墮天使…。」

あー、なるほど、大体察した。

つまりこういうふうすればいいんだな。

「ヨハネ様。歓迎していただきありがとうございます。」

「ふふつ。これからあなたは私をそう呼ぶといいわ!」

「はい。名前を呼ばしていただけのだけで光栄です。ヨハネ様。」

「今日は下がったいいわよ、リトルデーモンユウよ！」

「ありがとうございます！」

うん、予想通りだ。中々特徴のある子だけどこういうのもいいよね。個性があつて十人十色って感じ。

「ゆうー！」

「あ、松浦さん」

「もー、そんな堅苦しい言い方やめてよ。」

「ならどうやって呼べば…。」

「果南でいいよ、あと敬語もなしで。」

「か、かなん、こ、これでいい？」

「うん！オツケーだよ♪」

「改めてこれからよろしく！ゆうー！」

「うん、こちらこそよろしく！」

残るは…。

「Hi！ゆうー！」

「お？これこれは理事長。」

「そんな呼び方はノー！ワタシの名前でよんでくださいーい！」

「ま、まりさん…。これでいい？」

「ノー！それじゃあ、硬度10のダイヤと変わらないわー！」

「だ、だれが硬度10ですって?!」

「だつて事実でしょう？」

「ぐぬぬぬ…」

「わかつたよ、じゃあ、まりこれからよろしく。」

「よろしくお願いしマース！」

こうしてみんなの名前をしたの名前で気軽に呼ぶことになった。女の子の名前で呼ぶとか、なんか変な感じ…。

でも、仲良くなれたみたいでおれも嬉しい！

そのあとはみんなとワイワイやって歓迎会は幕を閉じた。

——帰りのバス——

おれは歓迎会中から現在にいたるまであることを考え続けている。それは、これからの俺の役割だ。

前回を見ていただくとわかる通り、三年生はスクールアイドル経験者。つまり、ダンスの指導などはおそらく三年生がするのだろう。

一応おれはスクールアイドル部のマネージャーという立場にある。部員集めでは活躍できたもののここからの練習は三年生に任せるところになる。

じゃあ、おれは…必要ではなくなる…のか…。
そう思いながら窓越しに見えるきれいな夕陽を眺めていた。

「ゆうくん？」

「ん？どした、曜」

「なんか元気ないね。」

「…。そう見える？」

「うん。なんかあつたの？」

「あー、やっぱりわかっちゃうかー…。」

「私で良ければ聞くよ？」

「ありがとう。実は…。」

——港——

「なるほど、そういうことですか。」

「そうそう、これからどーなるんだろーって思ってたさ。」

「私は…これからもいつしよにいて欲しいな…」ボソツ

「え？今なんて…」

「…。」ギユツ

「?!よ、曜さん？な、なににして…」／／／

「ゆうくん、これからもいつしよにいてよ…。私だけじゃない、みんなもきつとそう。これからも一緒にやっついていこうよ！人数が減つていい気持ちになる子なんていないよ。A q o u r sはゆうくんがいてこそだよ。」

「…。」

やばい、泣きそう。

「ありがとう。曜」ギユツ

「うん！ゆうくんの相談にのれてよかったよ。」

「ていうか、私たち…、今すごい状態だね。」

「ご、ごめん！い、いま離れ…ガシツ」

「もうちよつとこのままがいい…。だめ？」／／

そんなセリフ+上目遣いはずるいだろおお!!

「わ、わかった。」／／／

「なあ、曜。」

「なに？」

「ありがとな。これからもよろしく。」

目撃情報によると2人は日が暮れるまでその状態だったという。

Aqoursのリーダー

あれから数日後、俺はマネージャーとして練習を一生懸命サポートした。

そしてある日…。

「ゆうさん。少しお時間よろしくて?」

ちなみにダイヤさんとはここ数日の間に生徒会の仕事の手伝いをして苗字呼びではなく、「ゆうさん」「ダイヤさん」と下の名前で呼び合う仲になった。

「どうしたんですか?」

「今後のAqoursのリーダーをゆうさんにしようかと思っているのですが、」

「あー、なるほど。わかり…え?」

「ですから、今後のAqoursのリーダーはゆうさんが…」

「ええええ!!??」

「お、おれがですか?!」

「はい、あなたが、です。」ニコ

「俺なんかにとまりますかね…、」

「大丈夫ですよ、ここ数日間あなたをマネージャーとして、一人の生徒として見てきましたわ。」

「え…、見てたんですか?!」

「ええ。しっかり見さしていただきましたわ。」

「そ、その…、どうでしたか？」

「正直初めて出会った時は、ただの見せつけてくるだけのリア充かと思っていました…」

「り、リア充…」

多分、曜を廊下でくすぐったときのことだよな…。

残念ながらリア充じゃないんだけど…。

「ルビィを助けてくださった時も、あなたは自分よりも先に人の事を考えるとてもいい人なのはわかっていました。」

「そこまで誉められると…」 テレテレ

「しかし…」

「？」

「あなたは人の心配をし過ぎなのです。まずは自分の事をしてからじゃないとより良い人にはなれませんわ。」

「だったらどうして、おれをリーダーに？」

「ここ最近のあなたの行動は周りの事をよく観察して動いているようにみえましたわ。自分の事もしつかりとして、なおかつ人の心配をできる。そんな人がリーダーにふさわしいと思いましたわ。」

「そ、そうですかね…。おれはやれることが少ないからみんなに頑張ってもらえるように自分の直感でいろいろしてるだけです。それが正しいことなのかも正直よくわかってませんし…」

「それで十分ですわ。一番大事なことはメンバーのことをきずかう気持ちなのですよ。あなたは自身が思っている以上に周囲が見えているのですよ。あなたこそ、リーダーにふさわしい。」

まさかダイヤさんが自分に対してそんなことを思っていたただなんて…。

「ということで、頼まれてくれますか？練習のメニューの組み方などはそちらにお任せします。」

「でも、みんなはなんて…」

「もちろん、皆さん大賛成でしたわ！」

「な、なるほど…。」

ダイヤさんそして、みんながおれのことを信頼してくれてたんだな。…よし！

「ありがとうございます！精一杯やらせていただきます！」

「ふふ、期待していますわよ。」

―――教室（休憩時間）―――

「とは言ったものの…」

「練習メニューって何を考えればいいんだ?!

「ちよ、ちよつとゆうくん?」コソコソ

「ん?どうしたんだ梨子?」

「みんな見てるよ…」

言われてから周りを見渡してみるとさつきまでにぎやかに話をしていたクラスの全員が話をやめ、心配そうな顔をしてこっちを見ていた。

すると曜と千歌が寄ってきた。

「ど、どうしたの?ゆうくん」

「みかん食べる？」

「千歌ちゃん、みかんはおいときなよ…。そんなことより本当にどうしたの？」

「実は…」

「「えー?!」「」」

「あのダイヤさんに?!」

「うん」

「生徒会長のダイヤさんに?!」

「うん」

「硬度10のダイヤさんに?!」

「う…いや、うんじゃねえ!!千歌、それは流石に怒られるぞ」

「えへへ…」

「千歌さん」ニコニコ

ふとみると、千歌の後ろにダイヤさんがいた。

「ゆうさんの様子を見に伺いにきたら…あらあら」ニコニコ

「…。」ヒヤアセダラダラ

「ちよつとこちらへ…」ニコニコ

「はい…」トボトボ

「無事を祈ります」敬礼

「ゆうくんをA q o u r sのリーダーにするって話を持ち出したのは実はダイヤさんだったんだね…。」

「曜？それってどういうこと？」

「前に部室で果南ちゃんが、「ゆうをリーダーにしたいんだけどいいかな？」って聞いてきたから…。てつきり果南ちゃんがそうしたかったからって思ってたんだけど。」

「あ、私はまりちゃんから聞いたわよ？」

「なるほど。でも、なんで自分で言わないんだ？」

「恥ずかしかっただと思っうよ。」

「…。恥ずかしかった？」

「多分ね…」アハハ

「まあ、いいや。話をもどそうか！」

「だね。たしか、練習メニューを考えるんだったよね！」

「ああ。俺的にはもう少しランニングの時間を増やした方がいいかなって思うんだけど…。どう？」

「たしかにそうね。正直体力がたりなくてれんしゅうが止まっちゃうときもあるし…」

「私がいいと思うよ！」

「曜と梨子は賛成ってことでいいか？」

「うん（！）」

「よし、せっかくだしほかのメンバーに聞くのもいいかな。そうした方がいい練習メニューができそうだし…」

「私たちもついて行こうか？」

「んー、でも曜は委員会で梨子は日直の仕事あるんじゃない？」

「あ…」

「だから一人で行くことにするよ。ありがとな！」

「とりあえず、一年生のほうにいつてみるか。」

そうして俺は教室を後にした。

challenge!!

「一年生教室前廊下……」

「とりあえず話を聞きに行こうか、

というかこの感じ前にもあつたような気がする…、

「リトルデーモンユウよ!」

「うわ?!」

「そんなに驚くことないでしょう…」

「ご、ごめんな、ちよつと考え事してて…」

「もしかしてリーダーになったからとか?」

「すごいな、まさしくその通りだ」

「…。よかつたら話聞いてあげてもいいわよ」

「まあ、今からその話をするためにここに来たんだけどな。」

「なによ! 変に気を使ったじゃない!」

「すまんすまん、それにしても善子は優しいな。」

「ふん、あたりまえでしょ! 人が困ってたら助ける。普通の事よ!」

「ありがとな、それで話を戻すと…」

「なるほどね…、それでここに…」

「そうそう。なんかいい練習ないか?」

「何でもいいわよ、私は決められたことをやる。しいて言うなら、リトルデーモンの儀式を…」

「よし。じゃあ、この調子でどんどん聞いていこう!」

「ちよつと! 無視するのはやめなさいよ!!」

その後、なんやかんやで練習メニューが完成した。
ダンスはまだ曲が決まっていなかったため基礎となるステップを練習している。

「ワン、ツー、スリー、フォー、」

「はい！休憩!!」

「「「「「はい」「」」「」」「」」「」」」

「なんだかゆうくんリーダーっぽくなってきたね」

「なんだよ、曜。その言い方だとこれまで違うかったみたいじゃないか、なんやかんやーか月はずつとしているというのに…」

「ほ、ほめてるんだよ!」

「そうなのか・てつきりバカにされたのかと…」

「そんなわけではないじゃん!」／／

リーダーしてるゆうくんがかっこよすぎるなんて恥ずかしくて言えるわけじゃないじゃん…／／／／

「曜?」

「な、なに?!」／／／／

「なんか顔赤いぞ、ちよつと休憩するか?」

「だ、大丈夫だよ!」

「そうか?しんどくなったらすぐに言えよ?」

「うん!」

…その後、練習は続き…

「はい!お疲れさん!今日はここまで!この後、着替えてから部室に集合してくれ」

「なにかあるの?」

「…馬鹿千歌」

「ひどい！」

「ラブライブだよ！ラブライブ！もう予選が近いんだよ！」

「あつ…」

「ゴホン、まあ、その話するから早く着替えてくれ」

「はい」

部室

「では、ダイヤさん。説明をよろしく。」

「はあ?!ここはリーダーであるあなたがすべきではないのですか?!」

「い、いやあ、俺、ラブライブに対する知識があんまりないからさ…」

「ゆ、ゆうくん、その言い方は…」コソコソ

「え?どうした梨子、なんかまずかったか?」コソコソ

「しouxがあるませんわね…、それではまず基礎から…」

~~~~~(あつ、察し…)~~~~~

その後、1時間説明は続いた。

今回の作詞は千歌が担当し、作曲はもちろん梨子に決まり、衣装の担当はルビィと曜となった。

「ゆうくんがあんなこと言うからだよ、」

「わ、悪かったって」

「もー、まりちゃんがいってくれたからよかったもののいなかったら私たち歩いて帰ることになってたからね」

「すみません…」

「私が言うのが遅かったわ…」

「ほんとに、すみません」

その後、二年生チームに責められる雄飛であった。

――夜 十千万 千歌の部屋――

「んー…」

「やっぱ難しいか？作詞」

「うん、μ's やっぱりすごいなあー」

「楽器はやったことあるけど、作詞はしたことないからアドバイスのしようがないんだよなあ…」

「ゆうくん…いいアイデアない？」

「んー…」

「あつ、」

「何かおもいついたの?!」ガタツ

「落ち着け」ペシツ

「はい…」

「やっぱりアイドルなんだからラブソングなんじゃないのか？」

「ラブソング！それだよ！それ！」

「だろ！やっぱり名案だろ！」

「え？名案ってなあに？」

「まあ、それは置いといて…」

「とりあえず、これで書けそうか？」

「やってみる！」

15分後

「うーん…」

「はやっ?!」

「だって恋愛経験ないんだもん…」

「あー、なるほどねえ」

「あつ、だつたらさ、ラブライブを目指す意気込み的なものを歌詞にしたらどう？」

「いきごみ？」

「そう、千歌はなんでラブライブに出たいとおもったの？」

「輝きたかったから、それからラブライブ！が大好きだから！」

「それから？」

「えつと、普通怪獣ちかっちーから（変わりたかっただから）」

普通怪獣ちかっちーつてなんだよ…まあいいや

「それをもっ…」わかった!!」

「思い付いたよ！それだったら書けるかも！」

「お！それはよかった！」

「明日までに絶対完成させてみせる！」

「ああ、今晚は付き合っつてやるよ」

「やったー!!」

ー朝ー

千歌の部屋は二人の寝息と鳥の鳴き声が響いていた。

テーブルには端に集められた消し屑と、B4の紙が数枚散らばっていた。

朝日が窓から入ってきてその紙のうちの一枚を照らしていた。

千歌の初めて作詞し、本気で挑戦することを決意するきっかけとなった曲名があった…。

「ダイスキだったらダイジョウブ！」

## 変な曜ちゃん

あれからAqoursはさらに厳しい練習を毎日毎日助け合いながら実行し、ついにラブライブ地区予選前前日を迎えるのだった。

—— 渡辺家 ——

「雨だね…」

「ああ…、そうだな…」

今日の曜はなんだか変だ。

いきなり家に呼び出されて部屋に案内されたんだが、明らかにテンションが低い。

「いよいよ明日だね…」

「…」

「…」

「…やっぱり、緊張するか？」

「そらそうだよ…。失敗しちゃうたらどうしようって…」

「そうか…」

「きつと大丈夫さ」

「どうして言い切れるの？」

「練習見てたらわかるよ、あれだけやったんだぜ？行けるさ。きつと」と、言葉をかけるものあまり効果はなさそうだ。

「そうなのかな…、やっぱり心配だよお…」 グデー

「曜ってそんなに心配症だったのか？」

「うん…、家にいるときとかは特に…」 グデー

「…、どうやったら心配じゃなくなるんだ？」

「え？」

「俺はAqoursのリーダーだ。でも、ステージに出ることは許されない。俺にできることがあるならなんだってしたいんだよ。」

「ゆうくん？」

「なんだ？」

「ゆうくんも緊張してるの？」

「…。あたり前だろ。もっと早く効率のいい練習しとけばよかったんじゃないか、とか…。まあ過去ばっかり悔やんでもしょうがないけどな」

「なんだか今日の私たちネガティブだね。」

「雨も降ってるからな、自然とネガティブになるんじゃないか？」

「じゃあさ、お互いがポジティブになるようなことしようよ！」

「いいね、例えば？」

自分で提案しときながら顔を赤くする曜。

「た、例えばハグとか…」

「ハグか」

「だ、ダメ？」

「何でもするって言っただろ、ほら、おいで」

ゆうくんが手を広げて私を待ってる…なんだかすっごく変な気持ち

ち…

「お、お邪魔します」

「お、おう」

いざ、やってみるとけっこう緊張する…。さっきまで必死に冷静でいようとしてたけどこれはだめだ…。

「…」

「…」

「あ、あったかいね」

「そうだな」

「ゆうくんの心臓…すごく早いよ？」

「あ、当たり前だろ…、よ、曜が近くに來たらさ…」

「ね、ねえ…」

「なんだ？」

「今日は泊まっていてよ。」

「え？そ、そのいいのか？」

「うん」／＼

「じゃ、じゃあ一度帰って着替えとつてくるよ」

「大丈夫！服は貸してあげるから！」

「そっか、ありが…ん？」

「いやいや、だ、ダメでしょ！女の子が男に服かしちゃ！別に非常事じゃないから取りに帰るよ！」

「だ、だめ！絶対帰らしてあげない！」

「いったい今日はどうしたんだよ、曜…」

「…なんでだろうね、緊張しておかしくなっちゃってるのかな…私…」  
「曜…」

「わかった。そこまで言うなら…」

「やった！」

「お、おい！さっきまでの雰囲気返せよ！」

「あはは！」

——夜——

「よ、曜さん？」

「なあに？」

「ぼ、ぼくの布団はどこでしょうか？」

「え？いるの？」

そういえば、この展開前にもあったような…

「いるよ！異性と寝ることに抵抗ないのかよ…」

「ないよ。だってゆうくんだし…」

「な、なんかテレるよ…」

「あはは！」

曜は呑気に笑っているが俺は少し焦っている。だって好きな人となんて寝れるわけないだろ!!

「冗談はここまでにしてぼくの布団は？」

「ハハハ」

曜が自分のベッドを指差している。

「いやいや、なんでだよ」

「なんでって、なんで？」

「え…？」

「え？」

「よ、曜、そういうのは好きな人とすべきなんじゃ…？」

「…。」

「曜？」

「まだ気づいてないの？」

「え？」

「…」 チュツ

「?!」 // //

「よ、曜?! いったいなにを!」 // // //

「これでもまだ気づかない？」 // // // //

「い、いやでも気づかされたよ」 // // // //

「そ、その…いやだった？」

「そんなわけないだろ」 ギュツ

「ふわあっ！」

「そんなビックリすることないだろ、さつきもつとすごいこととしてきたくせに」 ツンツン

「う、うるさいよー！」

「かわいい」 ナデナデ

「ふえ?!」 // // //

「もうやめてよ！」 // //

「はい」 パツ

「え？」 ションボリ

「本当の気持ち言ってくれないとわかんないなあー」 チラツ      チラツ  
「むうー！」

「わかんないなあー」

「も、もつと…」 ボソボソ

「んー？聞こえないー」

「なでなでしてください…」 // // //

「よく言えました！可愛すぎるだろー！」ナデナデ  
「言いながらなでするのは反則だよー！」／／／

そのあと、二人はイチャイチャし過ぎて疲れて寝落ちしましたと  
す。

筆者「うらやましい…」ボソッ



## 気持ち

チュンチュンチュン

鳥の鳴き声が聞こえてくる。おそろく朝になったのだろう。昨日のハグ当たりから記憶がないぞ…。なにしてたっただけ…。そ、そうだ…。曜とキスしたのか。あれ、夢だっけ。あー、まだ頭がぼんやりするぞ。夢じゃなかったらいいのになあ…。

とりあえず今の現状を確認しようと思い出まぶたを開けると、

「…」スウースウー

曜が俺の上ののって寝てるんだが、これはどういう状況なんだ？

あー、女の子特有の甘い匂いがする…。

そして、腹の辺りに大きなクツションが二つ…。

や、柔らかい…。

あー、幸せ

って！いい、いかんいかん！と、とりあえず曜を起こさなきゃ。

「曜、おはよう」

「…」スウースウー

「よーうー」ホツペムギュー

「んー…」スウ

「早く起きてくれないとハグできないなー」

「?!」ガバツ

「お、起きるのはや?!」

「…」スウ

え？…もしかして、条件反射？…すぐくない？ハグってワードの力すごくね？

「おい、曜。いい加減起きろよ」ユサユサ

「ふあー、ゆうくん…おはよ」ゴシゴシ

「ああ、おはよ」

「ゆうくん」

「な、なんだ？」

「なんか硬いの当たってるんだけど…もしかして…」

「せ、生理現象だから、しょうがないよ」

「そ、それと、早く上から離れてくれ」

「えー、やだ」

「どいてくれないとハグしないよ？」

「ど、どくであります！」アセアセ

「うむ、それで良い。」

「…」ワクワク

「…」

「あ、あれ？」

「ん？どうした？」シレッツ

「は、ハグは？」

「え？」

「むうー」ムスツ

「そんなに拗ねないの、ほらおいで」

「えへへく」ギユツ

「おはよう、曜」ギユツ

「おはよ！ゆうくん」

グウー

「は、腹減ったな」

「そうだね！ご飯にしようか！」

「ああ！」

——リビング——

「ところで、ご飯あるのか？」

「うん、多分お母さんが作ってくれてると思うよ。」

「曜のお母さんの料理おいしいから楽しみだな！」

「私のは不満なの？」ムスツ

「そんなわけないだろ、曜が作る料理が一番好きだよ！」

「えへへ」

「かわいいやつめ」ワシワシ  
「も、もう！せつかくさつきセットしたのにー！」  
「俺は悪くない。かわいい曜ちゃんが悪いのだ。」  
「そ、そういうの反則だよお…」／／／  
「さて、そろそろ朝ごはんたべようか。」  
「そうだね！」

「」ちそうさまでしたー！」

「さて、そろそろ行こうか、」

「え？どこに？」

「なに寝ぼけたこといってんだよ、今日は明日うまくいきますようにって神様をお願いしにいくんだろ？」

「あ、そうだったね！行こっか！」

「おう！」

「ね、ねえ、手つないじゃだめ？」ウワメツカイ

「い、いいに決まってるだろ。その代わりみんなと合流するまでの間だからな！」／／／

「うん！」

——バス内——

「ねえ…」

「ん？」

「き、昨日のさ、…／／／」

「何かあったっけ？」

「もう！／／／」

「私、告白したでしょ！／／／」

あれ？やっぱり夢じゃなかったのか、う、うれしすぎる！

「夢じゃ、なかったのか？」

「な、なにいつてんの？夢なんかじゃないよ？なんならもう一回証明してあげよっか？」

「えっ…」

チユツ

「／／／」

「バスのなかではハードル高いぞ：／／」

「そ、そうだね／／つい勢いで：／／」

「それでお返事もらいたいのですが…?」

「全部おわったら俺から改めて言わしてくれ、そっちからこられて成  
立しちまったらなんかカツコつかないし…」

「私が先に言った時点でゆうくん負けてない?」

「やめろ、マジレスしないでくれ…」

「あははー!」

俺たちはまだ知らない。幸せと笑っていられる時間はあまりない  
ということを…。

願い

あの後、バス停から船を乗りつぎ、アニメでお馴染みの淡島神社にきた。

「全員そろったか？」

「まだ、善子ちゃんが来てないよ！」

「あれ？ルビイちゃん一緒にくる約束してなかったか？」

「してたのはしてただけ、なんか寝坊したから先行ってって言われちゃって…」

「なるほどな、様子見に行った方がいいかな…」

「もうちよつと待って来なかったらみんなで行こうよ、ゆうくん。」

「そうだな、梨子の言うとおりでな。もうちよつと待つか」

——15分後——

「なんだか心配になってきたんだけど…」

「そうだね…」

「ちよつと電話してみるすら。」

「ああ、頼んだ」

「くい、いま向かってるの！もうちよつとまって!!」

ちよ、ちよつとあぶないってばー！>プチッ

「きれちゃったすら。」

「なんか、受話器からエンジンと風のおと聞こえなかった？」

「もしかしてバイク？」

「善子の父ちゃんか？」

「さあ…」

ブーン！キィキィー！

「ありがとね！」

???'「ああ、じゃあな。」

「はーい！」

ブーン！

「ヨハネ、この地に―墮天!!」

「遅れてきたことを謝るすら」

「ごめんなさい…」

素早くツツコミを入れられ少ししよんぼりする善子。

「まあ、何事もなくてよかったよ。それよりさっきの人誰なんだ？善子ちゃんの父ちゃんか？」

「ち、ちがうわよ、ただの知り合いよ。」

「その割には結構親しげだったずら。」

「少し話が合っただけで…じゃなくて、早くいくわよ！」

「ゆうくん」コソコソ

「どうした、曜」コソコソ

「もしかして、善子ちゃんの彼氏だったり…」

「な、なに?!」

「ちよつとそこの二人、早く行きますわよ！」

「はーい」

――神社――

十人で横にならびに同時に会釈をし、手をたたく。

静かな神社に音がびびく。

そして、また静かになり、鳥の鳴き声が聞こえてくる。

俺はこと時間がとても幸せな時間を感じた。

みんなと努力し、結果をだす。まだ、結果はでてないけど感覚でわかる。

このメンバーとならやれる！

「よーし！この後は私の家でお泊まりなのだ！」  
「「「「「「えっ?!」「「「「「「」」」」」」」」」

千歌が急にへんなことを言い始めた。

それも突然だ。

9人はその突然すぎる発言に脳が追い付かず固まる。

「え？いや、何言ってるんだ？千歌？」

「え？なんかおかしいこと言った？」

「言ってるよ！明日本番なんだぞ?!それなのに…」

「だからだよ！」

「え？」

「試合前は緊張しちゃうのは昨日の晩でよくわかったから！」

また意味の分からない発言をしうる千歌に対して

「だからその緊張をみんなで分け合おう的な感じかなん？」

「そう！さすが果南ちゃん！」

どうやらこれが幼馴染の力らしい。

「で、ゆうくんはどうするの？」

「俺は家がそこだから泊まるもなにもないよ。」

「それもそうだね！ほかのみんなは？」

「鞠莉と私は行くよー！」

「トウゲザーするわ！」

「梨子ちゃんは？」

「私は家が隣だし、もちろん行くわよ！」

「ルビイもいきたい！ね？おねえちゃ！」

「しょ、しょうがないですね。」

そういいながらテンションがいつもより高いダイヤさん。

「まるもいききたいぞら！ね！善子ちゃん！」

「ヨハネ！行くに決まってるでしょ！墮天使の…「曜はどうする？」

「聞きなさいよ!!」

安定のスルーである。さすが、最近善子の扱いに慣れてきた一回で

ある。

「うーん、特に何もなし行くよ！」ゆうくんもいるし>ボソツ

「ん？曜なんて言ったんだ？」ニヤニヤ

「え?!なんでもないよ!」／／／

「んー?顔が赤くなってるぞー」

「もう!ゆうくんのバカ!」／／／

「ごめんごめん。」

「もう!」プイッ

「拗ねないでよ、あとでミカンジュースおごってやるからさ。」

「ほんと?!」

「千歌は反応するな!」

「二「あはは!!」二」

幸せだ。ああ。こんな日がいっまでも続けばいいのに…



## 梨子とピアノコンクール

——十千万——

「さあさあ、お布団の場所を決めましょう！」

「何やかんや、一番ダイヤさんがノリノリだよね……」

「だな。」

晩御飯を食べ終わったあと、ハイテンションでダイヤさんがそんなことを言い始めた。

無事に布団の場所を決め終わり、なんとなく今から女子会を始める雰囲気になった。女子同士で話したいことも、あるだろうと思い、

「俺は自分の部屋で先に寝てるよ。」

「はーい！おやすみ！」

そう言い、俺は千歌の部屋の隣の自分の部屋に入った。

布団に入ってしばらくは隣の部屋から騒ぎ声やいろいろと聞こえてきたが、今はもう静まりかえっていた。

「…、ねれない…。」

やはり緊張と不安によりなかなかねむれなかった。

「ちよつと外に空気吸いに行くいかな。」

みんなを起こさないように静かに階段を降り、十千万の裏口にあるクロックスを履き、外に出た。

夜空をふと見ると月が目に入った。

「今日は満月かあ…。」

そう呟きながら旅館を出てすぐの自動販売機に歩を進めながら空を見上げる。

今日も静かな夜だ。

特に風もなく、波の音が微かに聞こえてくる。

周りを見渡すと、普段は多い車通りが嘘のような光景が広がる。

昼間は地元人や、地元の子供たちで賑やかな沼津も夜になると静まりかえる。

普段の賑やかな沼津も好きだが、こっちの沼津も悪くない。

自動販売機に並ぶジュースを見て、コーラを買おうとするが、カフェインで余計に寝れなくなると思い、夏なのにも関わらずあたたかいココアを買った。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

自動販売機のルーレットが回り、左端から順に数字が明らかになっていく。

結果は…

外れだった。

「ちっ、こういうときくらい当たってくれてもいいのに…。」

少し愚痴をはきみながら、浜辺までいき、ココアを開け一口飲んだ。

「…甘い。」

なんだか懐かしい気持ちになった。

「むかし、よく飲んでたなあ…。朝に母親に作ってもらったりしてたっけ。」

昔のことを思いふけていると、後ろから足音が聞こえた。

「ゆうくんも昔飲んでたんだ。」

その透き通るような声を聞き、俺はだれだか一瞬で分かった。

「おお、梨子か。眠れないのか？」

「うん、ちよつとね…。」

梨子は少し顔を曇らせ、上を向いた。

「やっぱり不安か？」

「まあ、それもあるんだけどね…。」

すると、梨子は夜空を見上げながらポツポツと話し始めた。

「私ね、小さいころからピアノが大好きだったの。それでね将来はピアノのコンクールで優勝するんだってずっと言ってたの。」

「確かに、梨子の腕前はすごいもんな。」

「ふふ、ありがとう♪でも、スクールアイドルにはあんまり必要ないかもしれないけれど…。」

「そんなことないぞ？ 梨子がピアノできるおかげでAqoursの曲ができるんだよ。」

「そんなに褒められると照れるんだけど…／＼」

「事実だよ。」

「あと、梨子は歌声がきれいだよな。」

「そ、そうかな？ 歌を歌うのはずっと苦手つだけけど…。」

褒められるのになれてないのか、ちよつと恥ずかしそうに言った。「そうだったのか、練習見てる限りでは昔からうまかったのかと思っ  
てたよ。」

「そんなことないよ。家でいっぱい練習したからね♪」  
「努力家だな。」

「千歌ちゃんにも言われたよ、よくそんなにずっと練習できるねって。」

「そうなんだ。」

「でも、なんか違うの。」

「え?」

「私ね、高校一年生のとき、ピアノコンクールに出たの。」

「ああ、曜から聞いたことあるよ。それでひけなかったって」

「:そうなの。私はそのとき諦めたつもりでいたの。それに今は、Aqoursのみんながいるし、ピアノコンクールで優勝って言うのは夢でいいかなって思ってたの。」

「:。」

「それでね、最近思ったの。私、Aqoursを理由にしてピアノから逃げてただけなんじゃないかって。」

無風だった浜辺に少し風が吹き始めた。

「ごめんねっ。明日本番なのにこんな暗い話しちゃって。」

「:。」

「風も出てきたし、そろそろ戻る:。」

気が付くと俺は梨子を抱きしめていた。

ギョッ

「え?!ちよ、ゆ、ゆうくん?!」

「Aqoursのことなら心配するな。」

「え?」

「抜けたら俺たちに迷惑がかかると思ったんだろ?」

「っ?!」

梨子は驚いた顔をした。

「その表情やつぱりか。俺達仲間だろ?自分の気持ちにを素直に伝えればいいんだよ。」

「でも:。」

「みんなには俺から説得する。というか説得する必要なんてないけどな。」

「え?」

「梨子ちゃん!」

「?!」

「ちかはその夢かなえてほしいな!」

「ち、千歌ちゃん?!で、でも、もう捨てた夢だし…。」

「夢はまたやり直せるよ!」

「よ、曜ちゃんまで…。」

「本で読んだすら!夢は思いつづけてる間はまだ夢を捨ててない証拠だって…。」

「ふんばルビィ!!」

「フッフッフ!この墮天使の力を使えば、そんな問題、一瞬でかたづけて…。」

「やめるぞら。」

「気持ち強くもつことが大丈夫ですわよ。夢をそんなに簡単に諦めてはなりません。ね?果南さん。」

「うむ。諦めないほうが良いとおもうよ。」

「私たちも応援するわよ!」

「気がつくのと全員が揃っていた。チームつていや、A q o u r s つてやっぱりすごいな。」

「ほら、説得する必要ないだろう?」

「梨子に目をやると、笑っていた。さっきまでの表情が嘘のように。」

「ふふ、そうみたいね♪ありがとう!みんなっ!…あ、」

「梨子が何かを思い出したような顔をした。」

「そして、その途端、絶望したような顔にか変わった。」

「どした?」

「す、少しというかとても言いにくいことなんだけど…。」

「え?なにになに?」

「そ、そのピアノのコンクールなんだけどね、か、開催日が明日なの。」



## A q o u r s の力

…

「ど、どうすんだ?!」

「こ、今回は諦めようかな。さすがに…」

諦めようとする梨子を必死に止める千歌。

「だめだよ! 梨子ちゃん」

「ち、千歌ちゃん…。」

「このチャンス逃したら梨子ちゃん、どんどん引きずっていく気がするもん。」

「そ、それはそうかもしれないけどやっぱりA q o u r sのほうが…」  
やはり、A q o u r sのことが気になるらしい。

地区予選のためにみんなとがんばってきた事を無駄にしたいくないようだ。

「というか、ピアノコンクールに向けての練習とかはしてたのか?」

「今回の課題は課題曲だから、その日に発表された曲を一時間だけ練習して、本番にやるって感じだから練習は特にいらさないの。」

「な、なるほど…。」

困ったものだ。梨子の夢の一步のためにもここはピアノをやらしてあげたい気持ち強い。

しかし、梨子が抜けた分は誰が埋めればいいんだ…。

そう悩んでいたその時、

「あっ!!」

千歌が大声をあげた。

「なんだよ、千歌。今、どうすればいいのか考えてんだから邪魔すんな。」

「わかった!! ちかわかったよ!!」

「何をだ?」

しょうもないことだった時ように頭を叩く準備をする。

「ちよ、まだ、なにもいってないよ!」

「一応だ。早く言ってくれ。」

「え、えと、ゆうくんが女装して梨子ちゃんの変わりに出るといのは…」

「ペシッ」

「いたっ!？」

「そんなこと出きるわけないだろっ!」

「だ、だよね〜」

「それ! いいかも!!」

「曜?!」

「女装ようのコスプレ道具あるからできるかも! しかも! ゆうくんは練習中ずつとステップ見てくれてたから一から仕込む必要もないし!」

「ちよ、ちよつとまっつけてくれ! たしかに、ダンスのステップとかほとんど頭にはいつてるけど、そんな道具を使ったとしてもおれが男というのは一瞬でばれるだろ!」

「大丈夫! ゆうくんちよつと女の子っぽいところあるから!」

「はあ?! どこだよ?!」

「睫毛長いところとか、目がきれいなところとか。肌がきれいなところとか!」

曜がそんなことを言ったせいでおれは9人に体の隅々を見つめられる。

「や、やめろ。なんか恥ずかしいからこっちみるな。」

「いける!!」

「果南?!」

「ゆう! これはいけるよ!」

「というここと、実行!」

「はあっ?! お前ら! 俺の意見を…」

「拒否します。」

「だ、だれか、助けてくれえー!!!」



…

## 会場

「

「おー！すごい！」

「本物の女の子みたいずら！」

「

「ほら！ゆうくん！鏡みてよ！女の子でしょ！」

嬉しげに鏡を見せてくる曜。

「あ、うゆ。そうですね。」

「なんか、ルビイがまざってるわね。」

「な、なあ。まじでこれでいくの？」

「なにいつてるの？当たり前じゃん！」

なんでおまえはいてもそんなに強気なんだよ…、千歌。

「というか、これって不正じゃないのか？」

「先ほど聞いて参りましたが、人数さえあえば、大丈夫だそうです。」

「だ、ダイヤさんまで…。」

（はあ、こうなったら最後までやるしかない。覚悟を決めろ。吉田雄飛。）

「わかった。やるよ。」

「おー！」

「それでこそゆうくんだよ！」

「煽ってもなにもでないからな。」

衣装に着替えた俺を見た。

うわ、なにこれ。衣装ってすごいな。

さつきまでいつもの服だったため、気持ち悪かったが、いざ着てみるとまるで性転換したように感じた。

「みんな。お待たせ。」

カーテンを開けると全員が衣装に着替えてお互いに緊張をまぎらわせていた。特に、一年の二人…。

「こ、ここにきて緊張してきたすら…。」

「う、うゆ。」

「ポンツ

背中を軽く叩く。」

「ピギイツ?!」

「すらあ?!」

「そんなに驚くことはないだろ。」

「だ、だつてえ〜」

「大丈夫だ。安心しろ、お前らはよくがんばってきた。その努力をこのステージで披露するだけだ。簡単だろ?」

「うゆ、がんばる。がんばってみる!!」

「ああ!その勢だ!」

「なんか、女装した格好で言われてもあまり心にこないすら。」

「うるせえ!しようがないだろうが!」

ーアナウンサー

「Aqoursの皆さん。待機場所に移動してください。」

「さあ!俺達の出番だ!俺は歌えないけど、ダンスは全力でやるつもりだ!!俺の分、梨子の分もカバーするつもりで頑張ってくれ!頼んでばかりで申し訳ない!でも、普段から全力のAqoursをみていると託したくなつた!ホントにありがとう!!なにより!最高のパフォーマンスを引き出そう!」

「Aqours!!いくぞおー!!!」

全員「おー!!!」

ブー

開始の合図が流れ、目の前にあるカーテンが徐々に開いていく。俺は落ち着いていた。

さっきまで緊張していたのが嘘のように。

俺はいや、俺達は、掛け声で一つになり、一心同体となった。

こうなったA q o u r sに怖いものなんてない！

梨子。お前のためにも頑張るからな。

完全に幕が開き終わったのち、歓声が鳴り止み、音楽が流れ始めた。

そして、千歌と曜と果南の声が会場に響き渡った。

その瞬間から審査員の顔が、真剣な顔から驚いたような表情に変わった。

俺は頭の中でこれまで見てきた動きを思い出しながら完璧に再現した。

ダンスが終わり、壮大な拍手が届けられた。

額には汗が滝のように出てきた。

普段は嫌だが、今は思わなかった。

最高のパフォーマンスができたからである。

それは、俺だけじゃない。みんなもだ。

さらに、審査員の顔は驚きの表情から、素晴らしいと言わんばかりの笑顔に変わっていた。

審査員だけじゃない。会場にいるすべての人が笑顔になった。そして、俺は、俺たちは同時に胸を張って思った。

これが「A q o u r s の力」だと。

## 結果発表

無事に地区予選を終え、一息ついていたがそれもつかの間。

三日後に結果発表があるのだ。

その期間中はまるでテスト期間のような緊張感があり、居心地が良  
いという状況にはほど遠かった。

たしかに、俺達は全力を出しきり最高のパフォーマンスを披露でき  
た。が、他のスクールアイドルもそれは同じだ。

ちなみに、梨子のピアノコンクールは上手くいき、入賞したそうだ。

あとは、俺達だけだ。

俺達が勝てれば、完全勝利だ!!

そして、その最悪の三日間はすぐに終わり結果発表の日となった。

カチツカチツ

結果の発表は部室にあるパソコンのメールフォルダーに届くこと  
になっている。

俺は部室にあるパソコン（知識の海）を恐る恐る起動させた。

Aqoursのみんなは俺の後ろで緊張で魂が抜けそうな顔をし  
ながらパソコンを見つめている。一人を除いて。

「♪」

そう。やつだ。バカちかである。

曜、ボソツ

どうしたの？ボソツ

あいつ、なんであんなに呑気なんだ？ボソツ

さ、さあ？ボソツ

も、もしかして、忘れてるんじゃないかねえのか？ボソツ  
聞いてみよつかボソツ

「ね、ねえ、千歌ちゃん。」

「ん？なあに？よおーちゃん？」

「今日ってなんの日か覚えてるの？」

「ラブライブ！の地区予選の結果発表の日でしょ？」

「お、おぼえてたのか？てつきり緊張の素振りを見せないから忘れてるのかと思っただけど？」

「そんなことないよ!!そこまでバカちかじゃないよ!!」ムスツ  
そんなやり取りをしていると、

「あっ！」

「どうした？ルビィちゃん？」

「結果がきました!!」

「ま、まじか。ファイルを開いてくれ。」

「は、はい。」

部室に緊迫した空気が流れ、額に冷や汗が流れる。

ピロン

「わっ!!」

「ど、どうだ？」

「三位で、通りました!!」

ルビィがそう言った途端、これまで霧がかっていた山の霧が一気に  
晴れるように、喜びが爆発した。

「いよっしやあああ!!!」

俺達は手を取り合って喜んだ。

「うまいな。この刺身！」ムシヤムシヤ

「それは、マグロだよー！」  
「ゆうくん、相変わらず魚わからないんだね…。」  
「かなんが地区予選を突破したお祝いで刺身を持ってきてくれた。それを、みんなで食べながら次の曲の話や、世間話や色々していた。ちなみに、おれは魚知識が皆無のためにながなんだかわからない。だが、すべて美味しい。あ、でも、昔よりわかるようになったんだよ？例えば？うーんそうだな。タコって魚をおぼえたよ。」

「なんやかんやわいわいやったあとオフ会は特に何もなくて終わった。明日から休日に入るためそれぞれ遊ぶ約束を、たてたりしている。」

「ゆうくん！」

「ん？どした？」

「土曜日さ、一緒にお出かけしない？」

「あー、ごめん、曜。明日から2日間用事があるんだ。」

「え？2日間も？」

「ああ、ちよつと里帰りにな。」

「そういえば、ゆうくんの実家って兵庫県だっけ？」

「ああ、両親の墓があるんだ。」

「私も行きたいなー！」

「いってもおもんないぞ？」

「そ、そんなことないもん！」

「今回はちよつと無理だけど、また連れていってあげるよ。あと、来週の土曜は一緒にどっかいこうぜ！」

「むう、わかった！土曜日楽しみにしててあります！」

「おう！行きたい場所とかあったら、考えといてくれ！」

「はーい！」

——十千万——

「志満ねえ。」

「あら？どうしたの雄飛。」

「ちよつとお願いがあるんだけど…」

「なにかしら？」

「今週の土曜と日曜で里帰りしたいと思うんだけど、」

「なるほど。お金かしら？それなら用事す…」そ、そうじゃなくて！」

「その、志満姉にもついでに来てほしいんだ。」

「えっ？」



里帰り　　～ in 兵庫～

ブーン

ポーンツギノシンゴウヲサセツシテクダサイ

「あ、このナビの行き先は無視していいよ。こっち行つた方が近いから。」

「こっちね、わかつたわ。それにしても雄飛詳しいわね。」

「まあ、昔はこの辺に住んでたからさ。親父とよくドライブにきたんだ。」

「そうなのね。いいわね。親父さんが優しそうな方で。」

「志満姉のお父さんどんな人？」

「え、私たちのお父さんは十千万の料理人よ？」

「えっ?!あの全然しゃべらない人がお父さん?!」

「ふふ、そうよ、あの人が私たちのお父さんよ。」

「昔からあんな感じなの?」

そこで、志満姉は少し表情を変えた。

「いや、そんなことなかったわよ。昔はよく遊んでくれてただけで、ちよつと事故に遭つちやつてね。喋れなくなつちやつたの。」

「そうだったんだ。ごめんね?雰囲気悪くさせて…。」

「ふふ、いいのよ、ここはどっちに行けばいいのかしら?」

「えーと、この六甲山つてとこに向かつて。」

「山道に入るの?」

「うん。ちよつとだけでいいから!だめ?」

「うふふ♪かわいい弟の為だもの!もちろんいいわよ!」

「やった!」

——山頂(展望デッキ)——

「ここも親父とよくドライブに来たところなんだ。」

「綺麗な場所ねー!神戸市内が一望できて!」

パシャパシャと写真をとってはしやく志満姉を見ながら俺は懐か

しい気分浸っていた。

親父：。今、なにしてんだ？俺は新しい家族ができたよ。結婚した訳じゃないけど、こんな俺を本当の家族として認めてくれる人に、人たちにあったんだ。静岡っていいところだよ。たしか、親父はずっと関西だったからわかんなかったかもしれないけどな。

親父たちが死んで、俺は自殺しようとした。

それを警察が助けてくれて、今の場所に行くことを提案してくれたんだ。

正直、最初は半信半疑だったよ。でも行ってから確信した。静岡は…、沼津はいいところだよ。ホントに。

俺は…本当に幸せものだよ。

気がつくとき、おれの頬をあたたかい何かの流れていた。

「雄飛？」

姉に泣いているのをみられるのが恥ずかしくて、涙を拭いて無理に笑顔を作った。

「お、おれは大丈夫！さあ、そろそろい…！」

俺はあたたかいものに包まれた。

そう、昔、泣いていた時、母がしてくれた。この感じ。覚えてる。

「…。」ギュー

「し、志満姉、おれは大丈夫だから。」

そう。はぐである。はぐをされると不思議な力でついつい本音を言ってしまう魔法が掛かると母が言っていた気がする。

「我慢しないでいいのよ？懐かしい気持ちになって少し寂しくなったんでしょ？」

「…。なんでわかったの？」

「私もね、お父さんの写真をアルバムとかで見るとたまになるのよ。この歳にもなっても。もちろん、妹たちには見せないようにしてるけどね。」

「志満姉も泣く時あるんだな。」

「当たり前前よ。人間だもの。何回もないで強くなつていくのよ？人間って。」

「じゃあさ、…少しだけ、泣いてもいいかな？」

「うん。おいで」

俺は志満姉に優しく撫でられながら静かに泣いた。

気づけば、展望デッキは夕焼けに照らされ明るくなっていた。

「落ち着いた？」

「うん。ホントにありがとう。志満姉。前よりちよつとだけ、強くなれた気がする！」

「ふふ♪それはよかったわ♪かわいい弟の泣き顔も堪能できたし、Win—Winね！」

「はあ?!そんなこと思ってたのかよ?!」

「うふふ♪冗談よ♪」

「じよ、冗談にみえなかつただけど…。」

「じゃあ、そろそろ目的の場所に行きましようか！」

「うん!いこう!!」

ブーン

「雄飛、ずつと思つてたんだけどなんでこんなに大きいトラックを借りたの?」

「それはね、…着いてからのお楽しみ!!」

「教えてくれないの?」

「まあ、すぐにわかるしいいじゃん。あ、そこ右。」

「はい。」

「到着!」

「ここでもいいの?」

「うん!」

トラックを止めた場所はなんの変哲もない静かな住宅地である。

「( )?」

「うん、ついてきて。」

言われた通りついていくと、少し錆びた門があった。雄飛に続いてくぐって行くと前には木でできた大きい扉があり、その前で足を止める彼の姿があった。

「ここ?来たかった場所って。」

「うん、このなかだよ。」

雄飛は木でできた取っ手に手をかけると力一杯引いた。

ググイググイ

木が腐っているのか、聞いたこともない異音が静かな住宅街に響く。

「ふう、あいた。」

「いったいなにが…。こ、これは?!」

そこには、青色のスポーツカーがあった。

「もしかして、お父さんの?」

「うん。M A Z D AのRX-7っていう車なんだ。」

「そ、そうなんだ。私、車の知識ないからわからないけど、すごい車なの?」

「まあ、たしかに性能はすごいけど、何より親父との、家族との思い出なんだ。」

「これを、もって帰るのね?」

「いや、もう捨てようと思って。」

「えっ?!捨てちゃうの?!」

「うん、そのうち燃えちやったりしても困るしね。」

「でも、思い出なんでしょ?」

「だからって旅館の駐車場とかに停めとくのも迷惑だろ?」

「別に大丈夫よ?」

「え?」

志満姉があまりにケロッと答えたため俺は自分の耳を疑った。

「ほんとうにいいの?」

「いいに決まってるじゃない!さあさあ!早くトラックに載せましょ

！」

「志満姉、なんでそんなにテンション高いの?!」

「だって、これがあれば雄飛の笑顔がさらに増えるわけでしょう?」

「ま、まあ、無いよりは…。」

「だからよ!弟の幸せはお姉ちゃんの幸せよ♪さあさあ!」

「あ、ありがとう?」

志満姉が後半テンションが上がったのは俺の喜ぶ姿がみたかったからだそう。おれって、ほんとにいい姉もったよな。

その後、持ち帰って千歌にびっくりされたのはまた別の話。

私がやるであります!!

「さて、そろそろ決めるぞ!!」

静まり返った雰囲気吹き飛ばすように俺は勢いよく立ち上がった。

「なにを?」

呑気な顔で聞き返してくる千歌。

「曲だよ!曲!次の地区本選よ!」

「あー、」

「あー、じゃねえよ!!というか、みんな浮かれすぎだろ!!先週は流石に練習休みにしたけどさ、気がぬけすぎだろ?!」

「そうですわ!!ゆうさんの言うとおりですわ!皆さん、弛んでいますわ!」

俺とダイヤさん、やる気満々だが、他のメンバーは……。

「あー……。」ムキムキパクツミカンオイシイ

「……。」ペラッ

「zzz……。」

「クツクツク!この堕天使が……」

「マリ、今度どっかいこうよ。」

「What?何かあるの?」

「ちよつときれる服無くなってきちゃってさー、」

「果南は色々大きいもんねー」チラッ

「ねえ、ちよつとどこみてんの?」

ちなみに、梨子と曜は今日、日直で遅れてくる。

「あ、そういえば千歌?」

「なあに?」

「おれの記憶が正しければ、昨日の晩歌詞は完成したって聞いたんだけど……?」

「う、うえ?!」(ま、まずい、昨日のライブ見ながら話聞いてたから適当に言っちゃってたかも……。)

「出来てるんだよな？」ゴキゴキ

(でも、言ったら絶対にお仕置きされちゃうよお!!)

「で、できてるよー…。」

「ほう、じゃあ、見せてくれ。」

「そ、それは…。」

「…。」

気まずい空気が部室に流れる。

千歌に額には汗が流れた。おそらく、冷汗だろう。

次の瞬間、千歌はジャンプして土下座した。

「ごめんなさい!」

「千歌!!お前なあ!!」グリグリグリ

「うわあああ!!ごめんなさい!!!」

「どういう曲にするかなんとなく言ってくれたらすぐにでも作るんだけどなあ…。」

「それをするのがお前の仕事だろ?」

「うう…、返す言葉がない…。」

くせ毛が垂れ下がり、体を机に投げ出す千歌。

「ね、ねえ、みんな。」

「ん、どうした曜?」

「今回の曲さ、私に書かしてくれないかな?」

全員「えっ…。」

部室に沈黙が走る。

「よ、曜は、衣装作りもあるだろう?作曲もして、衣装も作るとなる…。」

「それも全部私がやるからやらせて!」

普段は賛成か反対かでしか意見を出さない曜だが、いつもと雰囲気が違う。

「俺は、いいけど…、みんなは?」

「私はピアノで作曲するだけだから、頑張つてね、曜ちゃん♪」

「ルビイも曜さんが作曲しやすいように衣装作り手伝います!」

「ルビイちゃん、裁縫得意なの?」

「そうですわ、私たちがスクールアイドルをやっていたときは衣装作りはわたくしとルビイでしたから。」

と、胸をはっていうダイヤさん。

「わたくしもお手伝いさしていただきますわ!」

「うん!ありがと!みんな!」

全員の協力を得て、今回の作曲は曜がすることになった。

「よし、じゃあ今日から早速作詞に取り掛かってもらうけど大丈夫か?」

「うん!任せてよ!大体の構想は出来上がっているから♪」

「では、そろそろ基礎体力を復活させねばなりませんね。こちらを見てください!」

ダイヤさんがどや顔で出してきたものなにやらグラフのようなものだった。

「なんだこれ?何かのグラフか?」

「ちがいますわ!これは、練習メニューですわ!!」

ダイヤ、果南、雄飛以外「れ、練習メニュー?!」

「そうですわ!今日から地区本線までは約2週間しかありませんわ!早速今日からやっていきますわ!!その名も(ダイヤ式強化訓練プログラム)!!」

この瞬間、部室は三つの空間に分かれた。どや顔で鼻をふんすと鳴らすダイヤと、興味深そうにうなづく果南と雄飛。そして、あまりの量の体力作りメニューに啞然とするその他7名。

そして、その案は議論されることもなく実行に移された。



「し、しんどすぎるぞらあ…」グダア

「も、もうあるけないよお…」

「クツ…、ここまでか…。」

その場に倒れこむ一年生組。

その少し離れた木陰で疲れ果てた様子で座る千歌と梨子。

「こ、こんなにしんどいとは…。」

言い出したダイヤさんまでこの始末。

そして、まだまだ体力が有り余っているその他3名。

「なかなかいいじゃないか！このトレーニング！」

「うむ！全身の筋肉が鍛えられてる感じでいいよね♪」

「曜はしんどくないのか？」

「うん！水泳部で鍛えているからね！」

「さすが曜だな。」

「えへへ♪」

…かわいい。

こうして、第一回ダイヤ式強化訓練プログラムは終了した。

——十千万——

自分の部屋に戻り車の雑誌を開きながら今日の出来事を振り返った。

今日一番疑問に思ったことがある。

それはなぜ、曜がこんなことを突然言い出したのかはよくわからない…。けど、曜があれだけやる気になってたんだ。今回もいい曲になるといいな、そう思いながら俺は読んでいた雑誌を閉じ眠りにつくのであった。

——渡辺家——

「今日の練習しんどかったなあ…。でも自分から言い出したことはしつかりやらないとね！」

曜はペンをもち、紙に自分の気持ちの変化の過程をひたすら書いていく。

「よし！できた！あとは歌詞にするだけだね！」

一通りの作業が終わり、ベランダで星を眺めていた。

星がきれいだな、今度ゆうくんと一緒に見に行けたりしないかなあ。

雄飛と一緒に星を見る姿を想像し顔の温度が上がっていることに気づいた。

顔をブンブン振り、再び夜空を見上げた。

空に一筋の流れ星を見つけた。

「あっ！流れ星！願いことしなきゃ！」

流れ星が見えなくなる前に手を合わせ、近所迷惑にならない程度の声でつぶやいた。

「ゆうくんに私の思い！伝えよう！」

## 衝撃の事実

翌日の学校〔曜side〕

今日はいつもより早く家をでて学校についた。

（それは、もちろん早く梨子ちゃんに曲をつけてもらうためであります。）

（あゝ！次のライブが楽しみだなあゝ！）

教室に入ってすぐ一時限目の教科の準備をする梨子ちゃんを見つけた。

私は一目散に梨子ちゃんのもとに行き、肩をたたいた。

「おはよ！梨子ちゃん！歌詞できたよ！」

「早くない?!昨日書き始めたんだよね?!」

目を見開きながら、歌詞を読みはじめる梨子。

「これって恋の歌?」

「うん、まあ、そんなかんじ?かな」アハハ

梨子ちゃんに自分が雄飛に向けた歌詞だということを悟られないよう慎重に会話を成立させていく。

「ふーん、でもなんで?」

「な、なんでって…、なんとなく?」

急に来た質問にあわてて答えると梨子ちゃんが何かを悟ったように表情をかえた。

「ふーん。なるほど、そういうことか。」

腕を組み、なるほどと一人でうなづく梨子ちゃん。

「な、なにがなるほどのさ!」

「いや?なんでもないよ?」

「そ、そっかゝ、あはは。」

とりあえず落ち着こうと思い、カバンから水筒をとりだし一口飲ん

で口に入れた。

「強いて言うなら曜ちゃんが誰かに恋してるのかな〜って思ったぐらいだよ?」

いきなりの当てられるとは思ってなかった曜は飲んでいたお茶を吹き出しそうになったが、何とか飲み込み話を続けた。

「そ、そそ、そんなことないよ?!」／／／

「ふふっ、顔真っ赤だよ?」

「う、うううう…」／／／

(ああ…、完全に終わった…。絶対に梨子ちゃんにばれた…。)

「恥ずかしがることじゃないわよ? 私だっしてしてるし…」

「え?! 梨子ちゃんも?!」

「うん、大好きな人がいるわよ。」

「さ、さすが東京…」

「東京じゃないよ?」

「え、東京じゃないの?! じゃあ、だれ?」

「それは、ないしょ♪」

「え—! なんでよ—!」

「そういう曜ちゃんだっしておしえてくれないでしょ?」

「ま、まあ、そうだけど。」／／／

ガラガラ

扉のほうに視線を向けると、二人の姿があった。

「おっす、曜に梨子、おはよう。」

「おはっよ—! 朝から元気全開!! くらえ! ビタミンCパワー!!」

少しテンションが低く、落ち着いた吉田雄飛とそれに正反対で朝からテンションマックスの高海千歌が入ってきた。

「おはよう、ゆうくんに、千歌ちゃん。」

「おはよ—そろ! 二人とも!」

学校の準備をしながら他愛もない話をしてしているとチャイムがなり授業が始まった。

昼休みになり、いつものように二年生の四人でご飯を食べようと席についているとゆうくんがしゃべりかけてきた。ちなみに、梨子ちゃんも千歌ちゃんはお手洗いに行っている。

「曜、作詞のほうはどうだ？」

(できればまだゆうくんに伝えたくないなあ、サプライズじゃないけど聞いてくれるなら本番に聞いてほしいな。)

「ゆうくん、お願いがあるんだけど…」

「ん? どうした?」

「次の予選の本番まで練習来ないでね!」

—— {雄飛 side} ——

「次の予選の本番まで練習来ないでね!」

俺は頭の中が真っ白になった。

(え?…ここにきていきなりリーダー失格?)

雄飛は予想外の展開に体が完全に固まってしまった。しかも、一番信頼されてるって思ってた曜から告げられたことにより、雄飛に対するダメージ量は計り知れないものとなった。

「え…、その、なんで?」

「えっと、本番まで見てほしくないからかな?」

(あれ、曜って本当に俺のこと好きなの? 俺なんか曜に嫌われるようなことしたっけ?)

「そ、そうか、わかった。そこまで言うのなら…」

「ありがと♪」

事情を聴くこともできたがあまり深く聞かないほうがいいと思い。

今日は帰ることにした。

このことはみんな知っているのだろうか。とりあえず、家に帰った千歌に聞いてみることにしよう。

——十千万——

「ただいま。」

沼津駅前を一人でふらふらしたのち、十千万に帰ってきた。

「あら、お帰り。今日は千歌ちゃんと一緒じゃないのね。」

旅館に入ると、いつものように志満姉が笑顔で出迎えてくれた。

「今日は部活ないの？」

「んー、なんかよくわからないけど来るなって言われちゃってさ。」

「ふーん、誰に？」

「曜に。」

「あー、なるほど。そういうことか曜ちゃんも乙女ねえ。」

うふふ、と笑みを浮かべる志満姉だが、俺には何のことかさっぱりわからなかった。

「志満姉？それってどういう…「ただいまー!!」

旅館に元気な声が響いた。

「千歌、お帰り。」

「たっだいまー！くらえビタミンCパワー！」

「それ好きだな。それは今はおいと置いて。千歌、話がある。」

「え？なにになに？」

「とりあえず部屋に…」

「ん？なんかわかんないけどわかった！」

——千歌の部屋——

「単刀直入に聞くけど今日の曜、なんか変わったことあったか？」  
千歌の頭のアホ毛がはてなマークに変わり、首をかしげながら言った。

「ん？よーちゃんはいつも通りだったよ？」

「そうか、というか、俺が今日いなかった理由は知ってるか？」

「あー、それはよーちゃんが…」

千歌は何かを言いかけたがいうのをやめてしまった。

「え？なに？なんなの？」

「…ひ。」

「ひ？」

「秘密!!それじゃあ、しいたけの散歩行ってくる!!」

「えっ?!うそだろ?!待ってくれ!!」

その後、いろいろな手段を使い聞き出そうとするもののすべて失敗に終わってしまった。

—— { 曜 side } ——

練習終了後…

「曜ちゃん、ちょっとお話しかな？」

梨子ちゃんから誘ってくるのはめずらしいと思いつつももちろん承諾する。

「うん、いいよ？ここじゃダメなの？」

「んー、できれば音楽室かな？」

「うん、わかった。」

—— 音楽室 ——

「あのね、話っているのは…、今朝の話なんだけどね？」

「うん、」

今朝って、もしかして好きな人のこと？

「曜ちゃんの好きな人ってゆうくんなんですよ？」

「う、うん。／＼／まあ、そうだよ…／＼／」

「実はね、」

今朝とは、違う梨子の表情に違和感を覚えながら話を進める。

「う、うん。それで？」

「私の好きな人ね、」



「…え…」

「。の。な。く。ゆ。…」

修羅場は寝落ちで十分。

「…え？嘘でしょ？」

「嘘じゃないよ。ほんとだもん。出会った時に好きになったんだ。」

空気が一気に重くなる。

(梨子ちゃんがゆうくんの事…)

…

「ごめん、曜。俺、梨子と付き合うことにしたんだ。」

「私、ゆうくと付き合うことになったから、ごめんね。曜ちゃん。」

そ、そんな。嫌だ。嫌だよ。ゆうくん…。

チュンチュン

「はっ!」ガバッ

「なんだ…、夢かあ…。」

カレンダーに目をやると

日付は梨子ちゃんの告白があったその日であった。

「今日、学校いきたくないな…。」

(でも、これで休んで授業受けないのもなあ。)

結局、学校に行き夢と同じように梨子ちゃんに歌詞を渡した。

「もうかけたの?早いね。」

梨子ちゃんは私が書いた詞を読んでいく。

数分後

「うん!いいと思うよ!恋の歌かあ、もしかして曜ちゃん、恋してるの?」

夢でみたのと同じ質問が投げ掛けられ、変な緊張感に満たされる。

「ま、まあね。」

「ふーん、あ、わかった。ゆうくんでしょ?」

「えっ、そ、そ、そんなわけ／＼」

「嘘だ、顔真っ赤だよ?」

(やっぱり二回目でも恥ずかしい。一回は夢だけど。)

「そ、その、梨子ちゃん。」

「ん?なに?」

「梨子ちゃんもゆうくんの事好きだったりする?」

「えっ?」

私は聞いてしまった。夢が正夢でないことを願いながら。

「ゆうくん、かっこよくて優しいけど私のタイプとはちよつと違うかなあ?」

「えっ?!ほんと?!」ガタッ

思わず、身を乗り出してしまう。

「え、あ、うん。なんか、今日の曜ちゃん変だよ?」

「あ、ごめん。ちよつと今朝変な夢見ちゃって。」

「ふーん、よくわかんないけど、色々あったんだね。」

「うん。」

ガラガラ

そこからは夢と同じだった。

変わっているところと言えば、梨子ちゃんが音楽室に呼び出した理由が曲のイメージとあっているか聞かされたものだった。

(正夢じゃなくてよかった。)

そつと胸を撫で下ろす曜であった。

∴ (雄飛視点)

なんやかんやで二週間が過ぎた。

今回もまた曜の家に来ている。

でも、今回はなんだか前回と様子が違う。

「ゆうくん…。」スリスリ

そう、あの歌詞を書いてからと言うものの曜がめちやくちや甘えてくるようになった。

理由を聞いても、ゆうくんのが好きだからという理由の一点張り。

おれが思うにあきらかに何かあったよなあ。

まあ、そんなことはどうでもよくなるくらいおれの肩に頬をすりすりしてくる曜がかわいいんだけど…。

「曜？今回は緊張してる？」

「うん…。前よりかは大丈夫なんだけどね。でも、今回のライブは緊張よりも楽しみが勝ってるかな！」

曜はいきなり元気になり立ち上がった。

「お、おう。それはなぜ？」

「なぜってあたりまえでしょ！ゆうくんに想いを、っ！」

曜は俺に何かを伝えようとしたがやめてしまった。

「ん？どした？」

「な、なんでもない！明日のライブを見たらわかるよ！」

なんだか落ち着きがない曜を見ながら、曜のお母さんから出されたポテチを口にいれる。

「なんだか、心配だなあ。」

「む？なんでなのさ！」ムスツ

「だって、練習も自分達で全部管理してやったんでしょ？俺の仕事なくなつて次のラブライブに向けての練習に邪魔だからもうこないでとか言われそうだから。」

すると、曜は顔を勢いよく近づけてきた。

「そんなこと私が許すわけない!!」

「お、おう。」

あまりの威圧に倒されそうになる。

「と、とりあえず、明日のライブ、楽しみにしてるぞ！」

「うん！楽しみにしててね！」

曜は太陽のような笑顔で言った。

…（入浴後）

さて、おれはどこで寝ようか…。

部屋に帰ると明日に備えて先に布団に入った曜が静かな寝息をたてていた。

部屋を見渡すが案の定、俺の布団は見つからない。

そして、曜のお母さんからは「ゴムはするのよ♡」という意味深発言をされた。

俺そんなに性欲の塊じゃないんだけもなあ…。

床で寝たら曜に怒られるだろうしと曜と同じ布団に入った。

布団に入った直後、

「んっ…」ゴロン

曜が寝返りを打ってきた。

そのせいでおれと曜の顔はほぼゼロ距離。曜の吐息が当たり変な気分になる。

や、ヤバい。無性にムラムラしてきた。

今日の曜の寝顔はなぜか色気に満ちたおとなの顔に見えた。

おれは必死に理性と格闘しながら眠りにつくのであった。

そしてなんとか迎えた朝、曜の胸の中で目覚めたのはまた別の話。

おまけ

朝、曜ママとの会話

「昨日はよく寝れた？」

「ま、まあ、いい眠りでしたよ。」

「…。ゴムはちゃんとした？」

「してません!!」

「えっ?! ってことは生で…」

「そう言う意味じゃなあああい  
!!!!!!!」

おわりよ。



恋を伝えるアクアリウム

ライブ会場――

今回のライブは遅れることなく、時間内に全員が衣装に着替えて支度を済ませた。

「みんな、よく似合ってる！流石、曜とルビィちゃんだな！」

「でしょー！かわいいでしょよ♪」

曜はその場で一回転して衣装を見せた。

ルビィちゃんは褒められるのになれてないのか顔を赤くし、黙って下を向いた。

「みんな、準備はいいか？」

俺達は円陣を組み、手を中央に出した。

「ここからおれらの、いや、Aqoursの本当のスタートだ！千歌が作り出したこのAqoursで、ラブライブ優勝を目指すぞ！」

9人「おおー!!」

そして、手を掲げながらこう言った。

全員「Aqoursー！サンシャイン!!!」

アナウンス「A q o u r sの皆さんは舞台裏に集合してください。」  
集合のアナウンスが控え室に流れる。

その途端、緊張のせいかな賑やかだった控え室は沈黙に包まれた。

ここはリーダーの俺が緊張を振り払うよう言うしかないと思い、声をあげた。

「よしーみんないってこい！俺に、そして観客、審査員に練習の成果をみしてくれよ！」

「うむーがんばってくるよ♪せっかくここまでできたもんね！」

「イエースー！がんばってきまーす!!」

「ゆうさんに日頃の練習の成果を見せますわ！」

「みんな！いくよー！」

果南のその言葉に答えるようにA q o u r sは舞台裏への移動を始めた。

おれも移動の準備に掛かろうと荷物の整理を始めた。

ガチャツ

すると突然ドアが開き、さつき舞台裏にいったはずの曜がこっちに駆け寄ってきた。

「ん？どうした？忘れ物か？」

「うん♪忘れ物！」

曜は俺の肩に手をおき、背伸びをしながら顔を近付けてきた。

チユツ

俺の頬に柔らかい感触を感じた。

「ゆうくんパワー充電完了♪いってくるね！」

曜はその場を早足に去っていった。

突然の出来事に頭が回らず呆然と立ち尽くした雄飛と曜が走りさった足音だけがその場に響いていた。

「突然のそれは反則だろ：／／／」

何にも聞こえなくなった静かな控え室でそう呟くのであった。

：

俺はラブライブ関係者の枠なので特別にアリーナ席に座れることになっている。

家族や友人が近くで見れるようにアリーナ席は一つのグループにつき、二つの観客席（アリーナの）を与えてくれる。

特等席に席をおろし、Aqoursが出てくるのを待った。

すると、俺に話かけて来た一人の女性がいた。

「この隣って座っても大丈夫ですか？」

そう聞いて来たのは紫色の髪に、右に一つ括りした綺麗な人がいた。

「あ、そこは空席ですのでどうぞ。」

志満姉や美渡姉は団体客が入り仕事で忙しくて今回の地区本選には来れなくなっている。

よって、俺の隣の席は空席となっている。

「ありがとうございますー！」

その女性はペコリと礼儀正しく頭を下げ、俺の横に座った。

「ここに座っているとすることはあなたもラブライブの関係者ですか？」

「あ、はい。一応、Aqoursのマネージャーをやっています…。」

俺がそう言うとその女性はすこし驚いた顔をした。

「珍しいですね。男の人がマネージャーなんて。」

そう言うのも無理はない。

なぜならスクールアイドル部を作ることができるのは女子高というところが絶対条件であるからだ。

Aqoursの高校もちろん女子高なのですが、そのなかでたった一人の男なんですよ。」アハハ

「そうなんです。あ、自己紹介遅れました。私、鹿角聖良といいます。よろしくお願いします。」

「あ、俺は吉田雄飛っていいいます。こちらこそよろしくお願いします。聖良さん。」

いきなりしたの名前で言うのは不味かったと少し後悔しながら顔色を見ているとそれは予想と反対だった。

「あ、あの私も雄飛さんってよばしてもらってもいいですか？／／／」

「はい！どうぞー！」

聖良さんは顔を赤くしながらそういった。

怒られるんじゃないかと身を構えていたが大丈夫そうではなかった。というか、なんで顔を赤く？

そんなことを考えているとスタジオム全体に放送があった。

アナウンス「ただいまからA q o u r sのライブを始めます。曲名は「恋になりたいアクリウム」です。」

拍手とともに衣装に身を包んだA q o u r sのメンバーが現れた。

伴奏が始まり、曜に言われた通り歌詞を重点的に聞きながら観賞した。

ダンスのパフォーマンスは前回のライブより良く、声も出ていた。

ライブが終わると歓声があがり会場は大盛り上がりだった。

しかし、俺はそれどころではなかった。

なぜなら曜の伝えたかった事というのが良くわかったからである。

曜が俺を練習からはずした理由。千歌がその理由を教えてくれたかった理由。

それら全てがこの曲を通して伝わったからであった。

雄飛は曜からの気持ちがわかり、うれしかくてしようがなかった。

俺はそんな気持ちを胸に秘め極力顔に出さないようにしながら控え室に戻った。

控え室のドアの前で、ライブを終えたみんなにどんな言葉をかけようか迷い立ち止まっていると

「あつ、ゆうくん。」

着替えが終わり、ジュースを片手に持った曜とハチ会わせてしまったのだ。

正直、心情が不安定な（嬉しすぎて）今一番会いたくなかった人である。

そして、歌を歌い、ダンスを楽しそうに踊る曜が可愛すぎて今すぐにもキスをしたい気持ちでいっぱいだったからである。

「曜、ライブよかったぞ！ダンスも可愛かったし、歌もよかった！」

必死に理性を保ちながら話を続けるが、我慢の限界がきたため、逃げるように俺は控え室に入ろうとドアノブに手をかけたがそれを曜がとどまらせるように上に手を重ねた。

「ねえ、ゆうくん。想い…伝わった？」

その曜の放った言葉によりおれはもう自分を押しさえきれなくなつた。

ドンツ

チュツ

壁に曜を押し付けキスをした。

「んっ…い」

曜は驚いた顔はしたが抵抗することなく受け止めた。

お互いの口が離れると、曜がさきに口を開いた。

「ゆ、ゆうくん？…どうしたの？…いきなり…／＼／＼」

「ライブの曜がかわいすぎたんだ。」

「ふえっ／＼／＼」

変な声をあげ顔をさらに赤くする曜。

「曜、やっと言えるよ。」

「な、なにが？／＼」

「曜の事が好きだ。おれと、付き合ってくれ。」

「…。／＼／＼」

曜は黙りこんだまま下を向いた。

「…。」グスツ

そして、泣き始めてしまった。

「えっ…？曜？さすがにこういう雰囲気と言うのはまずかったか…？」

曜は首をふり、覗き込むように見る雄飛の頬に両手を添えた。

次の瞬間、

俺と曜のやわらかい唇が重なった。

「わ、私もゆうくんの事が好き！大好き！！不束か者ですが、これからもよろしくお願いします。」



そして、その後俺達は恋人として初めてのキスをした。

おまけ

…控え室

フツツカモノデスガヨロシクオネガイシマス

「ひゃー／＼／＼」

「び、びぎいっ！き、きいちゃった…／＼／＼」

「善子ちゃんにルビィちゃん。こういうのはあんまり聞いたらダメずらよ…」

「だってしょうがないでしょ！ずらまるも気になってるくせに！」

「ま、まるはそんなに…」

カシャッ

三人で話をしていると着替え場のカーテンがあいた。

「ん？どしたの三人揃って。廊下でなんかやってるの？」

「か、果南ちゃん…。」

「な、なんにもないわ！ただ、ビクデーモンの話をしていただけよ

！

「そ、そうなんです！果南ちゃんは気にしないで！！」

「ふーん。じゃあ、そういうことにしとこつかな。」

（絶対、曜とゆうの事だね。）

（ゆう、曜の事、これからよろしくね♪）

結論、果南ちゃんには全部ばれてた。

おわりよ。

久しぶりの休日。

あの地区本選から数日後…

「っ、ついにだな…」

静まり返った部室でそう呟いた。

今日は7月15日。

数日前、善子ちゃんの誕生日祝いをサプライズで行った。

部室に隠れ、練習という定で訪れた善子ちゃんをみんなでお祝いした。

善子ちゃんはこんなに大勢で祝われたことなかったとうれし涙を流しながら喜んでくれた。

その時の部室の雰囲気ははっちゃけていたが、いまそんな雰囲気は微塵も残っていないかった。

逆に、緊張と不安でミシミシした空気に変わっていた。

なぜ、こんなことになっているのか。

そう、それは今日は地区本戦の結果がわかる日であったからであ

る。

ピロン

通知音が部室に響き渡った途端、  
もともと静かだった部室が物音ひとつしなくなりさらに静かになっ  
た。

どうでもいい話だが、千歌は緊張の表情でミカンを頬張っている。

俺は立ち上がりパソコンの前に移動する。

パソコンを広げるとメールボックスに一件通知がついていた。

「つ、ついにだな。」

「これでラブライブ！の出場が決まる……！」

今回事業と同様に全力を出し切り、

前回よりも戦闘力（ダンスのパフォーマンス力）

を格段にあげてきたA q o u r sであったが、地区本戦になるとや  
はり厳しいものがあつた。

ドーム（ラブライブの本戦）に立ったことのあるような実力のある  
チーム、ネットの掲示板で優勝するかもしれないと話題になるような  
チームもいた。

そんな中で優勝するのは正直言って至難の技であつた。

エンターキーを押そうとするが震えて押せない手の上にあたたか  
いなにかが重なった。

「手」だった。

その手の主は曜であった。

「ゆうくん、私たち、A q o u r sなら大丈夫だよ！」

曜からのたった一つのその言葉で部室の空気が変わった。

「よしー押すぞー！」

おれは勢いよくエンターキーを押した。

.....

7月25日

現在の時刻は8時30分。

アラームが鳴り重い体を無理やり起こす。

少し眠いが今日はそんなことをいつている場合ではない。

ちなみに地区本戦はぎりぎり通った。  
2位との差が1点という僅差の勝利であった。

地区本戦でこの結果だと本戦はかなり厳しい。  
だが、ここで詰めて練習しても身に入らないということで今日は休みになった。

「おいー、千歌起きろー。」

隣の部屋でグースカ寝ている千歌を起こしに部屋の前にやってきたが返事がない。

ちなみに雄飛の毎日のルーティーンは千歌を起こすところから始まる。

「千歌ー、入るぞ。」

襖を開けるとそこには人影があった。

その人影を見たとき俺は目を手で覆った。

「おい…、千歌…。」

「わっ?!ゆうくんいたの?!」

「いるよ。というかなんで下着姿なんだよ。」

雄飛が見たものとは下着姿でベットに寝転がる千歌の姿であった。

「朝ごはんんだ。服着るなりなんなりして降りてこいよ。」

「もう…。というか、ゆうくんは乙女の素肌を見てもなにもおもわないの?」

「おもうよ。だからこうして目を隠している。」

「あっ!なるほど!」

「じゃあ、先に下に言ってるからな。」

「うん!」

…

「おはよう、志満姉、美渡姉。」

「おう!おはようさん!雄飛!!」

起きてそうそう背中をバシバシ叩かれる。

いつものことであるが、初めてやられたときは正直キレそうになった。

「おはよう、ってあら?今日は早いのね雄飛。」

「ま、まあね。」

「うふふ♪なんか楽しみなことでもあるの?」

「なんだよ、そのなにもかも知っているような笑みは…!」

「知ってるからよ♪」

「な、なんで?!だれから?!」

「え?曜ちゃんのお母さんからよ♪」

田舎は噂が広まるのが早い。

ちなみに何があるかというタイトルにあるように曜とデートをするからである。

これだから田舎はとやれやれと頭をかかえているとどこかどかした大きな足音と共に千歌が降りてきた。

「おまたっせ!!」

「遅い!!千歌!」

美渡姉が千歌の頭をぐりぐりしてする。

「いたたたたた!!」

頭を抱えて涙目になりながら千歌がテーブルに着いた。それに便乗するように俺も席に着いた。

全員が食卓についてからご飯を食べる。

それが高海家のルールである。

志満姉が作ったあたたかくておいしい朝ごはんをいつもより早く食べてから、急ぎ足で自室に戻った。

「さて、そろそろ準備しなきゃな。」

クローゼットを開けて最近バイト代で買った服を手取る。

色合いが変じやないかしっかり確認してから、改めて鏡をみて服装をチェックする。

「よし、変じやないな。」

出かけようとカバンを背負うと襖が開いた。

「あれ? ゆうくんどこか行くの?」

そこにはいつもより少しおしゃれをした千歌の姿があった。いつもならまだ部屋着でいる時間だが着替えているということとは、どこかに行くのだろう。

「うむ、千歌もどっか行くのか?」

「うん! 梨子ちゃんとお出かけ! ゆうくんは?」

「ま、まあ、俺も出かけるんだ。」

ちなみに俺と曜が付き合っていることはだれにも言っていない。

というか、スクールアイドルと付き合うってどうなのかな。下手したらファンからの反感を買う気が…、あんまり考えないようにしてお



こう。

「…一人でだよ。」

「そっか！じゃあ、ゆうくんも千歌たちのお買い物についてくる？」

「いや、邪魔したら悪いしやめとくよ。」

「そんなことないよ！梨子ちゃん絶対喜ぶもん！」

まずい、千歌はこういうのはなかなか諦めないタイプだ。

こういう時は一番たちが悪い。

千歌から視線をずらし、壁にかけてある時計で時間を確認すると集合予定時間まで残り15分。

完全に遅刻だ。もしかしたら曜はもう待ってるかもしれない。

改めて千歌に視線を戻すところらをじーっと見つめている。

「…。」

「…。」

どうしたらいいものかと固まっていると再び襖が開いた。

「あら？雄飛まだ行ってなかったの？」

「し、志満姉！」

救世主の登場により千歌の視線が一瞬、志満姉の方向に移る。

雄飛はその瞬間を見逃さなかった。

すかさず廊下に突っ走った。

十千万を出てから振り返るが千歌の姿はない。

安心して前を振り返ると

「キャッ?!」

鼻息が当たるレベルで近いところに梨子がいた。

「あ、ごめん！」

「うんうん、大丈夫よ／＼／」

（いつもよりおしやれしてるゆうくんかつこいい…！／＼／＼／）  
「じゃあ、俺、急いでるから！」

そして俺はたまたまた来た沼津行きのバスに飛び乗り沼津に向かった。

——おまけ——

「おまたせ、梨子ちゃん！」

「：／／／」

「ん？顔赤いけど大丈夫？梨子ちゃん？」

「だ、大丈夫。／／／」

「なんかあったの？」

「な、何でもないの、ただただゆうくんがかっこよすぎて…／／／」  
「へ？」

顔が好みじゃないとは言え、雄飛はかなりのイケメンである。それを超近くで見たため面食い好きの梨子はテンションがとんでもなく上がっていた。

その結果として本音をすべてぶちまけてしまうのであった。

が、千歌はまだ理解が追いついてないようであった。

おわりよ。

恋人として初めてのデート。 1

バス停を降りて走って待ち合わせ場所の沼津駅に行く。

待ち合わせの場所に着くと曜が少し怒った顔で待っていた。

「ご、ごめん！待った？」

「待ってませんよおーだ。」

やはりとても、いや、すごーく、ご立腹のようだ。

「言い訳すると、千歌に足止めされてだな…。」

「ふーん、私より千歌ちゃんの方が大事なんだー。」ツーン

「い、いやそういう訳じゃなくて…。」

やばい、これはかなり厄介だなあ。どうしよ…

うっしっしっ！

実は私も今きたばかりなのだ。

あーあ、ゆうくんあんな悲しそうな顔しちやってかわいい！

そろそろネタばらししよっかな？

さすがに可愛いそうになってきたし…。

「ゆうくん。」

「は、はい…。」

チュッ

曜は雄飛の頬にキスをした。

「え？」

「えへへ、実はわたしも今来たところなんだ♪」

「え？、え？」

おれは現状がさっぱり理解できなかった。

あれ？怒ってるんじゃないの？いま来たところ？あつ。

雄飛はそこですべてを察した。

曜め…、おれをからかったんだな?!

「曜…。」

「ご、ごめん！ゆうくんの困った顔みたくってつい！」

「嫌われるんじゃないかって心配したんだからな?！」

「そんなわけ無いよ！でも、ちよつと遅れてきたからゆうくんが悪  
いってことで！」

「えーっ?!」

そんな感じで俺たちの恋人としてのデートが始まった。

…草むら

「梨子ちゃん、あれって…。」

「うん、ゆうくんと曜ちゃんだね…。」

「なにしてるんだろう…。というか、ゆうくん今日一人で出かけるつ  
て聞いたよ?。」

「ねえ、千歌ちゃん。」

「どうしたの梨子ちゃん?」

「二人について行ってみない?」

「面白そう〴〵いくいく!!」

…

アナウンス「東京行きが2番ホームに参ります。ご注意ください。」

「お、電車が来た。これに乗るのか?」

「うん！これで東京に行けるよ！」

「おー！なるほどー！それじゃあ、全速全身！」  
「ヨーソロー!!」

…自動販売機の裏

「仲良しさんだね、曜ちゃんとゆうくん。」

「…。」

「ん？どうしたの、梨子ちゃん？」

「いいなあって思ってた…。」

「え？」

…東京

「ここが…、ここが東京か!!」

「ゆ、ゆうくん？落ち着いて…。」

周りを見渡すと周囲の人の視線が自分に集中していることに気が付いた。

俺たちは、速足でその場を後にして近くのカフェに身をひそめることにした。

…

「もう！ゆうくん、興奮しすぎー！」

「まじで、すみませんでした。」

「ゆうくんって東京来るの初めてなの？」

「ま、まあな。俺の住まいは近畿だしな。」

「そうだったね、これからどうするの？」

「うーん、コスプレ喫茶でも行く？」

「あつ！行きたいであります!!」  
「よし、いくか！と、その前に。」  
「ん？まだ何かあるの？」  
「ここの喫茶店のケーキ、結構ネットで有名らしい。」  
「おお！それは食べないと損だね！」  
「おう！」

…

「まさか一個900円もするとは…」  
「思わなかったね…。」

俺たちの目の前には900円のケーキが一つ。

「曜、食べてもいいぞ。」

「え？でも、ゆうくんのは？」

「俺のはいいよ、また今度来た時にたべる！」

「ん…。あつ！」

曜は何かいい案を思いついたのか、ケーキを一口サイズにした。

「はい！」

一口サイズのケーキをフォークにさしてこちらに向けてきた。

「ん？どうしたんだ？」

「あーん♡」

「え…。」

俺も思考は完全に停止した。

なぜなら、あーんをする曜があまりにもかわいかったからである。

「あ、あーん。」

口を開けると甘いイチゴの香りとコクが深いチョコレート味が  
口の中に広がった。

「おいしい…。」

「わ、わたしも、あーん♡ってして?」

上目遣いでこっちをみないでほしい。

かわいすぎて心臓が弾けそうだ。

「あ、あーん」

「…」パクツ

「わあ!おいしいね!はい、もう一回!ゆうくん!あーん♡」

「い、いや!自分で食べれるし!それに恥ずかしいし…!」

「もう!なにいつてるの?私達恋人だよ?これぐらい当然だよ!」

「そういうものなのか?」

「うん!つてことであーん♡」

「や、やっぱり恥ずかしい!」

「もお!なんでよ!」

…

「梨子ちゃん…。」ボソツ

「なに?千歌ちゃん。」ボソツ

「恋人つてなに?」ボソツ

「そこから?!」

恋人として初めてのデート。 2

前回のつづき。

コスプレ喫茶にて

「この衣装かわいい!!こっちも!こっちのも!!」

嬉しそうに騒ぐ曜を見ながらコーヒーを飲む。

(今日も楽しかったな。)

窓の外をみるとまだ明るい徐徐に日が落ちているのがわかった。

「ねえ!ゆうくん!」

「ん?どうした?」

「この衣装着てみてよ!」

俺は思考が固まった。

スーツや軍隊の服、色々な服がここには揃ってある。

しかし、曜がもっている衣装はガチガチのメイド服だ。



あきらかに男である俺が着るものではない。

「…あ、それを曜が着るんだな！それで俺はなにを…」

「え？…これだよ？」

曜は平然とした顔でこちらに渡してこようとする衣装はやはりあのメイド服である。

「はい！試着室いこ！」

「えっ…？？」

俺は曜に手を引かれながら更衣室に連れていかれた。

中に入るとこれでもかという量の化粧品が置いてあった。

「こ、これは…？？」

「見ての通り！化粧品だよ♪」

「い、いや、男のおれが使うものじゃないよな？」

「なにいつてるの？ゆうくんを使うに決まってるでしょ！ほら！ここに座って！早く早く！」グイグイ

「え、ちよつ！だ、だれか！助けて!!」

「だあくめ♡」ハグ

「…。」ズキユン

おれは大人しく椅子に座ることにした。

…数時間後…

スタバにて

「…。」グツタリ

「ゆ、ゆうくん？大丈夫？」

「…。」グツタリ

「ご、ごめんね、わ、私が暴走したばかりに…」アセアセ

「…。」

「…。」シユン

スタバの窓の外…

ちか「あれ、曜ちゃんの様子がおかしい。」

梨子「あ、ほんとだ。なにかあったのかな。」

ちか「これはちかが行くしかないね!!」

梨子「いやいやいや、沼津からこれだけ離れた東京に行きなりちかちゃんが現れたら尾行してたのばれちゃうよ?!」

ちか「あつ!そつか、でも曜ちゃんが…。」

梨子「大丈夫、ゆうくんがどうにかしてくれるよ。」クスツ

ちか「…。」

…

「はしやいでいる曜も、かわいかったぞ。」ボソツ

「へ?なんて?」

「いや、なんにもない。次行こうか!」

「あ、あれ?つかれてないの?」

「ん?なんのこと?むしろ元気になったよ?」

「え？あんなに振り回しちやっただのに…なんで？」

「曜の笑顔が見れたからな！」ニカッ

「ドキ♡」

「で、でも、さっきあんなに疲れて…」曜の困ってる顔が見たかったからだけど？」

「え？そうだったの？じゃああれは全部…」

「うん、演技だよ？」

「もー！びつくりしたじゃん！本当に…ちよつと幻滅されたかと思っただよボソツ」

「ん？最後何て言ったの？」

「き、気にしないで！さー！次どこ行く？」

時計を見ると午後6時を回っていた。

「そうだな、次は…、あ、この近くに夜景がきれいに見えるところあるらしいよ？」

「あっ！じゃあ、そこいってよ」

「わかった！というか、門限大丈夫か？」

「うん、今日と明日はお父さんとお母さん両方いないから！」

「そっか。じゃあ行こうか！」

「うん！」

手を繋ぎ歩きだそうとしたがなぜか雄飛は動かない。

「ん？どうかしたの？」

「おれは…」

「曜に幻滅するなんてことは絶対にならないからな、今までも、これからも。だから曜の全部を俺に見してくれ、素直で真っ直ぐで優しい君が、俺が一番好きだから。」

「ぎ、聞こえてたの？／＼／＼」

「逆に、俺が曜の言ったことを聞き逃すとても思ってたの？」

「うう、聞こえてたならそういつてよお…／＼／＼」

「あはは、ごめんごめん、曜がかわいいからつい」

「もう！／＼／＼ゆうくんったら！／＼」

イチヤイチヤ

ちか「だいじよぶだったね。」

梨子「うん、さすがゆうくんだよ。」

ちか「…。」

梨子「ん？どうかしたの？」

ちか「いや、梨子ちゃんってゆうくんのこと好きなのかなーって」

梨子「…。」

ちか「梨子ちゃん？」

梨子「いや、なんでもないの。ほら、ゆうくん達移動するみたい、い  
い。」

ちか「う、うん。」

…夜景

「す、すごい…!」

「こ、これは…。」

エレベーターのドアが開くとそこには東京を一望…とまではいかないが絶景があった。

数万という光が輝きその一つ一つは、まるで宝石のようだった。

「きれいだな!」

「うん!」

「それと、曜も。」

「へ?／／／」

「曜もきれい。」

「ゆ、ゆうくんもかっこいいよ／／／」

「夜景とかっこいいってなんの関係があるんだ?」ニヤニヤ

「じゃあ、きれい?」

「それはそれで変だよな、いじめてごめん。」ハハ

「もう!／／／」

：

ちか 「なんかいちゃいちゃしてる?」

梨子 「：。」

ちか 「梨子ちゃん?」

梨子 「いや、なんにもないの!それじゃあ、そろそろ帰ろっか!」

ちか 「え?曜ちゃん達まだ帰らないみ：梨子「帰ろ!」

ちか 「う、うん：。」

ちか (どうしちやっただろう：。)

そんなことがあったのにも関わらずあのバカップルは：

「ねえ、ゆうくん。」

「どした?」

「今日さ、この後、うちこない?」

「っ!」



「だめ？」ウワメズカイ

「い、いいよ。てか、むしろ大歓迎。」（かわいいすぎだろこの天使）

「やった♪じゃあ、早速帰路に着くであります！」

…

おわりよ

## 朝の営み

カーテンの間から射し込んできた太陽で目を覚ますと、みたことがある天井があった。

ん…、ここはどこだ？昨日なにしてたっけ…。

なんとか回らない頭を回転させて何とか状況を整理していく。

たしか曜とデートして…。

あのあと、なにしたっけ…。

あ、そうだ。曜の家に行ったんだ。

つてことはここは…

まさか曜の家なのか?!

ま、まてよ。てことは仮にここが曜の家だとして、ここで朝を迎えた…。

しかも、俺たちはただの友達ではない。

もう恋人になったのだ。

そんなことを考えているとおれの隣でなにかが動いた。

その動いたものの正体は…

「?!」

「すう…、すう…。」

よ、曜?!なんで?!どういうことだ?!いや、曜の家なんだから当然な  
んだけどね!?

しばらくしてなんとか状況を呑み込んだ俺は重いからだを起こした。

そして、もう一つの間が感覚がこれまで以上に俺を焦らせた。

肌寒い…。

布団をめくってみるとそこには俺の…がまる見えの状態であった。どうか裸だった。

記憶が正しければ家を出るときは履いていたし、着ていた。というか履かないわけがないし、着ていないわけがない。

つてことは曜も…。

さらに布団をめくるとそこには…

「…っ!!」／／／バサッ!

あわてて布団を被せた。

そこにはおれと同じ状態の曜がいた。

その途端、額に冷や汗が流れる。

おれは…曜を汚してしまった…。

それ以前にスクールアイドルである曜を犯したことに罪悪感を感じた。反対にそれと同時に恋人として進展したという喜びもあり、複雑な感情になってしまった。

それから数分間、どうすればいいのか。

万が一、子どもができた、なんてことがあれば、スクールアイドルをやめなさせないといけないし、みんなにどう伝えたらいいのか、そんなことを考えていた。

「んう…」モゾ

「?!」ビクッ!!

「あ、お、おはよう…／／／ゆうくん／／／」

「お、おはよう…」

顔を赤らめながらいう曜はいつもの可愛さの数倍、いや数十倍の破壊力があり、それに加えていつもより見えている肌の面積が圧倒的に

広い。それは下半身のもう一人のおれを刺激するには十分な破壊力だった。

それに気付いた曜はさらに顔を赤くした。

「昨日あれだけしたのにまだ足りないの?／＼／＼」

「い、いやそういうわけじゃないんだ／＼／＼」

これを見られて恥ずかしくない男はいない。

「ごこは、私にまかせてよ／＼／＼」

曜は布団の中を移動してもう一人の俺を手でしごき始めた。

「あ、あの、よ、曜さん?!／＼／＼」

「ゆうくんのココ、もっと固くなってるよ?／＼／＼」

曜の手でしごくペースがさらに早くなる。

「よ、曜、もうっ…!」

「いいよ、このまま出して、くわえてるから」

そう言っつて曜はアソコを口に入れた。

「くっつ!!」

「ぶはっ／＼／昨日あれだけしたのにっばい出たね／＼／＼」

あれだけっつてどんだけやったけ…と心の中で思いながら余韻に浸っていると突然ドアが開いた。

「あれ?曜ちゃんは?」

なんといないはずの曜の母親である。

あ…、完全に終わった…。

「さ、さあ、起きた時にはもういなくて…。」

目を泳がしながらなんとかそう言った。

布団がかなり膨らんでいるため絶対ばれると思っていたが…

「…そうなの?あ、ママまたパパとまた出かけてくるから雄飛君ゆっくりしていつてね／＼」

よかったばれなかった、と内心思っていたが、よくよく考えてみると曜ママの顔が心なしか赤かったような…。まあ、もういいや、諦めよう…。

そんなことを頭の中で考えていると今度は曜が覆いかぶさってきた。

「ゆうくん、もう私我慢できないよ／＼」

「へ？またっ!？」

「だめ？／＼」

そう言いながら胸を押し当ててくる曜。

そのかわいさと、エロさで圧倒的なパワー負けを引き起こした俺は理性を完全に失った。

この後、めっちゃめっちゃエッチした。

…曜の両親…

「パパ：。／＼」

「どうしたんだ？ママそんなに顔を赤くして…」

「今日はホテルに泊まりましたよ？／＼」

「どういうことだ？昨日二人でいったら？」

「そっちのホテルじゃなくて：／＼」

「ああ：／／そっちか、最近は曜がいたしご無沙汰だったな：／／」

「うん…いい？／／」

「しょうがないな、いくか／／」

この後めちやくちやエツチした。

お盛んな渡辺一家であった。

終わりよ。

## 雄飛のとある日常

チュンチュンチュン

小鳥の鳴き声で目を覚ますとそこは曜の家：  
ではなくいまは俺の家、十千万旅館である。

今日は日曜日で部活もなくデートの予定も旅館での手伝いもない。  
旅館で手伝った時間の分だけお金をもらっている。

そして今日は、最近ずっと練習が忙しかったからとダイヤがくれた  
休日である。

ドタンツ！

隣の部屋から物音がした。

おそらく千歌がベットから落ちた音だ。でも彼女のことだからま  
だ寝ているだろう。

平日や部活がある時は起こしに行くが今日に至ってはその必要も  
ない。

階段を降りて行くと志満姉の置き手紙と朝食が置いてあった。

ー千歌、雄飛おはよう。

ご飯置いてるからあたためてたべてね♪ー

とのことだった。相変わらず優しい人である。

旅館の仕事で忙しいにも関わらず、妹の千歌、赤の他人の俺にもこ  
んなことをしてくれる。

あ、赤の他人って言ったら怒られるんだった。

いまとなつては俺も、彼女の弟である。

「いただきます。」

手を合わせて朝食を食べ始めた。

ちなみにメニューはパンの上にチーズを乗せたいわゆる

チーズトーストというやつと、新鮮野菜の数々が盛り込まれたサラ  
ダである。

初めてここで朝食を食べたとき、和風の旅館なのにトーストが出てきたときは色々な意味で驚いたものであった。

そして、デザートにはみかん。これは毎日でてくる。

千歌いわく、

「昔からずつと食べてるよ！朝は、みかん！昼は、みかん！おやつはみかん！晩ごはんはみかん！」

お前はみかんしか言えないのかと言いたくなるほどのみかん三昧である。

千歌の言う通りここ高海家のデザートはほぼみかんである。

たまに常連客や近所の人からもらったメロンやらマンゴーやらのフルーツが来るときもあるが、それは極稀である。

「ごちそうさまでした。」

美味しい志満姉の朝食を食べ終わり伸びをする。

いつもの千歌や美渡姉が言い合いしてる賑やかな雰囲気ももちろん大好きだが、こういう静かな雰囲気も新鮮でいい。

「さて、久しぶりに直しますか。」

俺は、裏にあるガレージに向かった。

向かう途中、千歌と出会ったが

「梨子ちゃんと約束してたの忘れてたああ!!」

と、寝癖も直さず急いで家から出ていった。

これでも彼女は女子高生で高校2年である。

もう少しちゃんとしてほしいものだ。

…ガレージ…

高海家の裏に車が入るほどのガレージが5つほどある。



昔送迎バスが格納されていたとのことだが最近（といっても大昔）は駅からバスがでるようになり不必要になったらしい。

ほぼ空いているガレージの一つにうちの親父が残した車を保管してもらっている。（里帰り　～in兵庫～にて）

車はRX7　FD

MAZDA社が作りたいいわゆるスポーツカーというやつである。

「今日はミッション系を直そうかな。」

車の下に潜り込みついているパーツを丁寧に外していく。

長い間実家で眠っていたためかなり劣化が進んでおり、いまはエンジンすらかからない状態であるが、

それをこうして休日の空き時間に直すのが雄飛なりの過ごし方の一つだ。

ちなみに治すお金は旅館で手伝ったときにももらえるお金でおぎなっている。

作業を始めて2時間ほどたった。

「…ふう。休憩挟むか。」

肩を回しながらガレージをでて浜辺にある自販機で冷たいコーヒーを買った。

プシュツゴクツ

「ぶはあく、うまい。」

口の中にコーヒー特有の匂いと味が広がり、体全身の疲労を軽減してくれるように感じる。

ザブーン　ザブーン

「…ここにてよかつたな。」

砂浜に一人座ってそんなことを考える。

（今思えばここに来てまだ半年も経っていない。そのはずなのにこんなにもこの街に馴染めたのはこの人がいいからだろう。）

あの警官が言っていたことは本当だった。(一話)

でも、なぜそんなことを兵庫県の警官のはずの彼が知っていたのだろうか。

地元がここなのだろうか、まあ、気にしてもしょうがないか。

作業に戻ろうと腰を上げて伸びをした。

「あ、ゆうくん！」

聞き慣れた声が出た。

「お？ 曜か！ どうしたんだ？」

最愛の人である。

「えへへ♪ 会いに来ちゃった♪」

「(かわいい…) 連絡してくれればこっちから会いに行つたのになんでいつもみたいと言わなかったんだ？」

曜からたまに会いに来てと連絡がある。

旅館が忙しくないときであれば会いに行っているのだが、こうして向こうから来るのはこれが初めてだった。

「だって、繋がらないんだもん。」

曜は少し拗ねた口調になった。

そんなはずはと、ポケットから携帯を取り出し、電源をつけると不在着信とメッセージがいくつか表示された。

「あ…。」

「そういうことでありますかー。私を放つてほかのことに夢中だった

のでありますかー」

曜が更に拗ねた口調になった。

「ち、ちがう！サイレントになって気づかなかっただけで…」  
「ふーん。」

「…すまん。」

「…。」

「やっぱり、怒ってる?」

しばらくの沈黙のあと曜が口を開いた。

「…ハグ。」

「え?」

「してくれたら許す。」

と笑顔でいわれた。

「よろこんで。」

おれは精一杯曜を抱きしめた。

そこをたまたまお客さんと出てきた志満姉に見つかった。  
そのあとガレージに戻って曜と一緒に作業をしていると

志満「うふふ♪青春ねえ♪」

と言われ二人して顔を赤くしたのは言うまでもないだろう。

曜を家まで送り届け帰宅する。

たまたまお客さんが食堂にいないタイミングで帰ってこれたため  
珍しく家族揃ってご飯を食べた。

美渡姉と千歌がみかんを争って喧嘩をする。

これが高海家の日常。

こうして普通にある幸せがずっと続けばいいのにとと思うの雄飛で  
あった。

もう二度と失いたくない。

そしてこの思いが将来、彼の原動力になることを彼はまだ知らない。

：

お風呂はお客さんが寝てから入るのが鉄則だ。

遅い時間になるにはなるが、誰もいない大浴場とはなかなかいいものである。

「今日も一日疲れたー！」

こんなふうに大声を出しても大丈夫。

「想いをく乗せて〜♪」

と歌っても大丈夫。

一時間ほどの長い入浴のあと冷蔵庫で冷やしてある瓶コーラを飲む。

これが格別にうまい。

そのあと明日の用意をするなりなんなりしていると時刻は0時を回った。

家族に寝る前のあいさつをして、寝床に入る。

今日あった一日を、平凡な日である幸せを噛み締めて目を瞑る。

すると聞こえる千歌の叫び声。

「ゆうくん！宿題手伝って!!」

「え…。」

これもまた日常である。

こうして吉田雄飛、兼、高海雄飛の休日は幕を閉じた。

## 日記

雄飛にとつての曜。

この街で最初に出会った彼女は今となつては俺の彼女である。出会った当時はこんなことになるなんて思つても見なかった。

彼女は四季のように表情が変わる可愛らしい人だ。

でも、みんなの前では元気いっぱいには振る舞つていても実は心の奥で不安や、劣等感を感じることが彼氏という立場になつて初めて知った。

この人も人間なんだと実感した瞬間だった。

なんせ、人の前で弱みを極力見せないようにする人だったからだ。でも関わりが増えて行くに連れて俺に弱みを見せるようになった。彼女は完璧超人ではなかった。

でも、そんな彼女に失望なんかしない。

むしろ、守つて上げたいと思つた。おれができることならなんでもしてあげようとそう思つた。

そんな彼女が俺は大好きだ。そして、愛している。

おわりよ。

## 埋め合わせデート

先生「さて、みな聞きたまえ。  
今年の修学旅行の行き先は：」

一同ゴクリ

先生「北海道だあああ!!!」

一同「え？」

先生「え？反応薄くない？」

一同「だって、去年と一緒にやない？」

先生「あー、まあ、はい：。」

高校あるある。修学旅行の行き先が毎年同じ。

「ねえねえ！班決めどうする？」

「おれは、曜と同じならどこでもかな。」

「もう：／／／」

「きゃー！熱いねりこちゃん！」

「そ、そうね：。」

千歌とは反対に苦虫をかみつぶしたような顔をする梨子。

先生「いまから配る紙に班のメンバーを書いてくれ。」

なんやかんやで班のメンバーは千歌、梨子。曜、雄飛となった。

帰宅中：（バスの中）

「っーん」

「よ、曜。悪かったよ。べつにそういう気持ちがあつてやったんじや…。」  
「っーん。」

後ろの席

「り、梨子ちゃん。」ボソツ

「どうしたの、千歌ちゃん？」ボソツ

「なんで曜ちゃんと雄くんあんな感じになつてるの？」ボソツ

「あーそれは…。」

…放課後の屋上

「…つてことで2週間後の日曜から北海道に行くから練習には数日参加できなくなる。」

「そうですか、それは残念ですわ…。」

肩を落として残念そうにするダイヤ。

「ダイヤはさみしがつてるみたいだけど、こっちは気にせず楽しんできてね！」

「な！鞠梨さん！そういう適当なことは言わないでくださいまし！」

「まあ、楽しんできてね。あ、お土産、期待してるよー。」

「ふふ、2週間後雄飛たちは墮天するのね！」

「何わけわかんないこと言ってるぞら。」

「うう。雄飛さんに練習してもらえないのはさみしいなあ…。」

小動物のようにしょんぼりするルビィ。

帰ったらいつもより多めに練習見てやるよと頭をなでていたタイミングで、

「曜ちゃん、帰還であります！」

「あ、」



「あ。」

…

「つてことがあって…。」

「ふくん、やきもちやくつていうやつ?」

「ふふ、そうね。曜ちゃん雄くんのこと大好きだから。」

「甘いなあ〜」

「なんだか千歌ちゃんさつきからおじさんみたいよ?」

前の席

「よ、曜」

「ふん!」プイツ

「今度、駅前のスイーツを…」

「ふん!」プイツ

(いつもならこれくらいで許してくれるのに…ど、どうしたら…)

「デート…」ボソツ

「え?」

「今度の日曜日、デートしてくれたら許す。最近二人きりであんまり行けてなかったし…。」

「ツ!ああ!もちろんだ!」

「やった!」

後ろの席

「甘々だねえ〜」

「…ええ、そうね。」

少し羨ましそうな梨子であった。

「じゃあ、また明日ね!」

「…またね〜」

…十千万前の海

曜ちゃんと別れた千歌ちゃんとうくんは、旅館の仕事があると急いで帰って行ってしまった。

「はあ…」

(なんか、もやもやするなあ。)

バス内の出来事である。曜と雄飛のイチヤついているのをみて、千歌のような祝福?のようなものではないなにか、梨子自身の内面に変化を感じるのである。

「もしかして、私、。ゆうくんのこと…」

…デート当日

「おはよーそろー!」

「おはよーそろー、曜。ごめんな、わざわざ旅館まで来てもらってしまつて…」

「うん、全然大丈夫だよ!今日はミトシーにいこうよ!」

「おう!」

…水族館前

「…相変わらず、入場料たけえなあ…。」(2200円)

アルバイトをしていない雄飛にとつて2200円はとんでもないほどの高額である。一応、志満姉からのおこずかい制度はあるものの、基本的には住まわしてもらっている側のため受け取らないようにしているからである。

「払ってあげようか?」

「え、」

「え?」

財布の中を覗き込むおれに曜がそんな言葉を投げかけてきた。

「いやいや、そんなの悪いよ。自分の分くらいは、」

「私、お母さんからゆうくんと使つてってたくさんもらってきたから出すよ!チケット2つください!!」(4400円)

「あつ!ちよつ!」

(勢いで買われてしまった)

「はいっ！」

チケットをこちらに差し出してくる曜

「あ、ありがとう…。」

「うん！」

(ああ…、なんていい彼女なんだ…)

この間の埋め合わせのためのデートだったのにも関わらず、そのお代は曜もちであることのかかなりの罪悪感を感じながら二人で水族館のゲートを通って行った。

みとしーの入場ゲートを通ってすぐのスロープで俺の手を引く曜の顔はいつもみんなという時とは少し違う別の笑顔であった。

「曜。」

「ん？なあに？」

雄飛はその場に片膝をついて曜の手を握りなおした。

「これからお前の…、曜の笑顔を守り続けるからな」

「えっ／＼／＼、その、これからもよろしくお願いします…／＼／＼」

二人はお互いを見つめ合いながらしばらくの沈黙が流れた。

パシヤッ！

「え？…」

「いやあ、お暑いですね！私長らくここでカメラマンをしておりますが、あなた方ほどのアツアツのカップルは見たことがありませんでした！」

そういう彼女の手には、水族館にきた記念写真の撮影用カメラが握られており、その状況と先ほどの発言から一部始終を見られていたことは安易に想像がついた。

「／＼／＼／＼」

二人は、これまで史上最大に顔を赤くしたという。

…

「写真もらっちゃったね…。」

「ああ…」

あのあとカメラマンから写真をまさかのタダで受けとった俺たち

は、イルカショーを見るために中を進んでいった。

「ここ、何度見てもすごいよな。」

「ん？なにが？」

「なんていうかな、雰囲気懐かしい水族館なんだよな。」

雄飛の住んでいた兵庫県には須磨水族園や城崎マリンワールドがある。

特にマリンワールドに関しては、ミトシーのように海の上につくられている箇所が数か所あり親近感を案じていたのである。

「雄くんの実家があった近くの水族館にもいつか行ってみたいな。」

「実家の近くといっても、ちよつと遠いけどな」

「雄くんと一緒ならどこまでもついていくよ？」

(幸せそうな笑顔でそんなことを言うなんて反則級だろ…)

雄飛は曜の手を少し強く握り直した。

「ああ、おれも曜と一緒にならどこまでも行けそうだ。」

「えへへ／＼／＼」

アナウンス「あと五分でイルカショーおよびアシカショーが始まります。ご入場するお客様はお急ぎください。」

「あつ！始まつちやう！」

「よし！行こうか！」

「うん！」

「全速前進」

「「ヨーソロー!!」」

…十千万前の浜辺…

「あー！楽しかった！」

両腕の上に伸ばして背伸びをする曜

「今日は誘ってくれてありがとな！」

「うん！」

「ゆうくん…」

「ん？どうしてた？yっ?!」

チュッ

「曜…、いきなりだな。どうした？」

「私ね、ちよつとだけ独占欲強いかもしれない…」

「どうしてそう思うんだ？」

「この前の練習の時、ルビィちゃんの頭なでてたでしょ？」

「あ、ああ…」

（そのお詫びのデートだったことを完全に忘れて楽しんでしまっていた…）

「その時、最近、そういうことしてくれてないなあって。」

「なんだ、そんなことか。」

「そんなことっ?!」

ナゲナゲ

「曜がそんなこと思ってたなんてわからなかった。ごめんな。」

「ち、ちがうの。私の独占欲が強いだけで…」

雄飛はそういう曜の唇を自分の唇でふさいだ。

「んっ…」

今回はぎっつきのととは違う少し長くて濃厚なキス。

「も、もう／＼／雄くんずるいよう…／／／」

「満足か？」

「もうちよつとだけ…」

「全く、曜は欲しがりだな。」

「むっ。こんな曜ちゃんは嫌いですか？」ムスツ

「いや、むしろ大好きだ。」

「えへへ／／」

なんやかんや一時間近くいちゃついた。

「じゃっ！帰ろうか！」

「うん！帰ろ！」

そういつて二人は肩を並べて歩き出した。

二人のかばんには、今朝までではなかった色違いのイルカのキーホルダーがつるされていたという。

おわり。

動き出す感情 北海道旅行 PART 1

日は飛んで、北海道旅行当日…

AM6:00

先生「班長は全員そろっているか確認しろよ！集まり次第先生のところへ報告しにきなさい！」

梨子「いよいよだね、曜ちゃん。」

曜「うん！楽しみだね！って思ったけど、千歌ちゃんとゆうくんは？」

梨子「たしかに、まだ来てないよね？どうしたんだろ…。」

…一方千歌と雄飛…

千歌「むにや…」ZZZ

雄飛「…ん？今何時だ？」

朝目覚めるとそこはいつも見ている天井ではなかった。

雄飛「ん？あれ？」

あたりを見渡すとそこが千歌の部屋だということがわかった。

まあ、あたりを見渡すと自然に時計が目に入るわけで…。

雄飛「…は？」

その言葉を発した刹那俺は自分の出せる最大の速度で部屋に移動し、服を着替え始めた。

千歌「ん？ゆうくん？おはよー」ムニヤムニヤ

部屋を走った音で目を覚ました千歌が目をごすりながら体を起こした。

雄飛「おはよーじゃない！千歌！時間みろ！」

千歌「へ？」

その言葉を発した瞬間千歌も大慌てで寝間着を脱ぎ始めた。

千歌の控えめとはいいがたいその胸部があらわん…

雄飛「おい！扉ぐらい閉めろ！」

千歌「あー！ごめーん！」

全く自分の発育の良さを彼女は理解しているのだろうか。

高速で着替えを終わるせ、昨日用意した荷物を背負った二人は、表口からとりあえず外に出た。いつも通り行こうとする千歌を引き止め、雄飛は裏から自転車を持ってきた。

雄飛「見つかったら怒られるけど、今回はしょうがない！今の時間じゃ、なんせバスがない！千歌後ろに乗れ！」

千歌「うん！」

雄&千「いってきまーす!!」

志満「気を付けてね〜」

美渡「お土産たくさん頼むぞ〜」

高海姉妹の二人に見送られながら、俺は自転車のペダルを力強く踏み込んだ。

…学校付近

雄飛「はあはあ…」

千歌「ありがとう、ゆうくん！」

雄飛「ああ…、さあ、ここから走るぞ！」

千歌「え？なんで？」

雄飛「ぼかちか、学校は自転車の乗り入れ禁止なのを忘れたか？」

千歌「あ…」

雄飛「いくぞ！」

雄飛は千歌の手を引いて走り出した。

…学校



先生「おーい、桜内の班はまだ全員来てないのかー？」

梨子「あ、はい。まだ吉田さんと高海さんが来てません。」

先生「そういえば、あの二人って住所同じだったよな？どういうことなんだ？付き合ってるのか？」

梨子「え、いや、それは…」

曜「ゆうくんの彼女はわたしです!!」（大声）

梨子「よ、曜ちゃん?!」

曜「こんなこと言われたら、黙ってられないよ!」

梨子「部活以外では秘密にするんじや…」ボソツ

曜「あつ」

そう。

渡辺曜はその外見と内面で学校ではかなり目立つ存在である。それもあつて、スクールアイドル部以外では彼氏がいることを内密にしている（そうしているつもり）。

また、雄飛に関しても学校唯一の男子ということでも有名であり、二人とも有名人である。

そして、よく考えてほしい。修学旅行ということは、第2学年が全員揃っているということ。さらにここで大声を出すことは、どういうことなのかと。

Aちゃん「え？やっぱり曜ちゃん、吉田さんと付き合ってたんだね!!」

Bちゃん「聞いてもずっと顔真っ赤にしなから否定してくるから怪しいなあつて思ってたけど、やっぱりそうだったんだね!」

曜「え。あ、うん…。ご、ごめんね!だまってt」

とりあえずだましていたことを謝ろうと謝罪しようとしたタイミングで息を切らした雄飛と千歌が学校に到着した。

雄飛「遅れました!!大変申し訳ございません!!」

曜「あつ!ゆうくん!」

Aちゃん「お、彼氏くんだー!」

そこでBちゃんはある違和感に気づいた。

Bちゃん「え、ちよつとまつて、千歌ちゃんと手繋いでない？」

よくよく見ると千歌と雄飛は手をつないでいた。

千歌が遅いから手を引いていただけなのだが、もちろん客観的に見ればあれがカツプルである。

曜「あ、ホントだ……。シユン

Aちゃん「よ、曜ちゃん、元気出してー」ナデナデ

Bちゃん「さつきまでの勢いを取り戻せー！」ユサユサ

：

先生のお叱りから帰還。

雄飛「な、なんとか間に合った……」

千歌「はあ、はあ……。ゆうくんはやすぎい」

雄飛「千歌お前、ちゃんとトレーニングしてんのか？」

千歌「むっ！してるもん！」

雄飛「じゃあ、このほつぺのモチモチはなにかなあ？」

千歌「なっ！乙女の顔にケチを付けるのか！」

雄飛「そうは言ってないけど、最近だらけ過ぎなんじゃないか？」

千歌「うぐっ……た、たしかに……」

曜「……ゆうくん。」

雄飛「お、曜か！おはよーそr……？どした？」

いつも朝から元気いっぱいなの曜だったがなぜか今日はその元気を一切感じない暗い表情をしている。

曜「千歌ちゃんとずいぶん仲がいいんだね。手も繋いでたし。」

雄飛「え、いや、まあ、それは千歌が走るの遅かったから……」

その言葉を発した瞬間曜の顔色が更に曇ったのがわかった。

雄飛（これは……何を言ってもまずいパターンかも……）

千歌「そーだよ、曜ちゃん。ちかとゆうくんは同じ家なんだから。

というか、家族なんだから当然だよ！」

ザワザワ

雄飛「ば、ばかちか！大声でそんな言い方したら誤解するだろ！」  
千歌「へ？」

曜「ゆうくん。旅行終わったらしばらく私の家で泊まって。」

雄飛「え、でm「泊まって。」はい…。」

Aちゃん「ひえ、曜ちゃん激おこだよ…。」

Bちゃん「これに関しては、雄飛くんの落ち度だね。」

曜を、…かわいい彼女を怒らせてはいけない。

そんな訳で今回は、快調なすべり出し？をした浦の星女学院の修学旅行のお話である。

…空港に向かう道中バス内

曜「えへへ♪ゆうくん…」

雄飛「曜、今日もかわいいな。」

さつきまでの暗い雰囲気は何処かに吹っ飛ばす勢いでイチヤイ  
チャする二人。

梨子「な、なんかあそこだけピンク色のオーラが…。」

千歌「むぐっ。」

梨子「あ、ゆうくんにいらぬことを話せないようにガムテープ貼  
られてたの忘れてた。外してあげないと。」ベリッ

千歌「あ、梨子ちゃん！詞なんだけど、もうちよつとmペチャツン  
！んー！」

梨子「やつぱりもうちよつと黙っておこつかあ…。」ニコニコ

…そんなこんなしているうちに空港。

空港についてトイレ休憩を済ました。

雄飛「空港でかいなあ。」

千歌「千歌こんなところにくるの初めてだよ。梨子ちゃんは？」

梨子「私も初めてかな…。」

曜「私もだけど、みんな案外乗ったことないんだね。飛行機。」  
雄飛（旅客機は初めてだな…。）

雄飛たちが乗る飛行機の発着上に向かう途中…。

雄飛「うおー!! かつこいい!!」

曜「飛行機いいよねー!!」

雄飛「お！わかるのか曜！」

窓に張り付いて二人で興奮するバカップル。

梨子「もう！おいてくわよ！」

曜&雄「あ、ごめんなさーいー!!」

梨子「まったく、ちゃんといってきてよ！ほら、千歌ちゃんだってここに…あれ？」

さつきまで梨子の隣を歩いていた千歌の姿がない。

あたりを見渡すと少し離れた場所で千歌が癖毛をびよこびよこさせながらなにかを見ていた。

千歌「梨子ちゃんみてー！でっかいみかん!!」

千歌が指を指している方向を見るとお土産屋に大きいみかんの飾りがおいてあった。

千歌「てんいんさん！これください!!」

梨子「は、はあ…。さ、先が思いやられるわ…。」

雄飛「梨子、すまん。おれらもちゃんとやるから千歌の暴走を止めよう。」

曜「梨子ちゃん。なんかさつきはごめんね…。」

なんやかんやで乗車完了

席順

前

梨子 雄飛

曜 千歌

後

：

曜「ゆうくんのバカ。」

後ろの席から身を乗り出してこちらに不満ですとばかりに頬を少し膨らませて、抗議の目を向けてくる。かわいい。

雄飛「俺が悪かったって…。」

なぜこんな状況になったか。

先生からももらえるチケットは班ごとに固められた席になっており、あとは各自で自由に決めることになっていた。

適当なやり方で、場所を決めることにしたのだが…。

：回想

雄飛「じゃあ、席順の決め方は班長である梨子に決めてもらおう。」

梨子「え?!そ、そんないきなり…じゃ、じゃあ…、ゆうくんが曜ちゃんの考えていること当てられたら曜ちゃんとなりつていうのはどう?」

雄飛「ふっ、そんなの簡単だよ。」

梨子「ふふっ、言ったわね?曜ちゃん、今考えていること教えてくれる?」

曜「わかった!ボソ」

梨子「…なるほど。」

曜の考えていることなど一瞬でわかるなぜなら…。

曜のことを愛しているからだ!!

梨子「さあ、ゆうくんどうぞ。」

おれはドヤ顔で答えた。

「飛行機かっこi…梨「不正解！」

てなわけで、梨子と隣になった。

ちなみに答えは、「ゆうくん大好き」でした。

んー、なんで気づかんかったんかなあ

いや、なんとなくそんな気もしてただけど、流石にみんなの前でその回答で外したら恥ずかしいじゃん？わかるよね？

飛行機には全員が無事に乗員し、エンジンの音を唸らせながら滑走路の方に向かっていく。

梨子「そういえば、ゆうくんって飛行機乗ったことあるの？」

雄飛「いや、旅客機は初めてかもな。」

梨子「えっ、旅客機じゃない飛行機って…。」

雄飛「戦闘機。父親は航空自衛隊の人間だったんだ。」

梨子「一般人でも戦闘機の速さ？加速Gっていうんだっけ？それに耐えられるの？」

雄飛「いや、流石にちゃんと訓練してから乗ったよ。」ハハッ

梨子「それって何歳のときの話？」

雄飛「んー、小学生の高学年ぐらいだったんじゃないか？」

梨子「ちゅっ、小学生?!」

梨子（ゆうくんってもしかしてかなりすごい人？）

アナウンス ポーン、本日は、〇〇航空会社をご利用いただき誠にありがとうございます。この便は、静岡空港から函館空港に向こう便でございます。羅陸までもう少々お待ち下さいませ。また、シートベルトの着用チェック並びに、お荷物がしっかり収納されているか、

ロックがかけられるいるか、今一度お確かめください。アナウンス終了後、約2分後に離陸いたします。

千歌「き、緊張してきた…。」

曜「わ、私も…。」

雄飛「大丈夫、ちゃんと飛ぶよ。パイロットになるためにはかなり鍛錬を積む必要があるからな。梨子はこわくないのか？」

梨子「べ、別に大丈夫よ！」

雄飛「裏返った声で言われても説得力ないぞく。」

梨子「もう！」

アナウンス 離陸いたします。急加速いたしますのでご注意ください。

放つ。エンジンが今までの状態とは比べ物にならないほど回転し、轟音を

前に動き出したかと思うと、次の瞬間にはパワーバンドに入り、その鉄の巨体は地面をとらえ、さらに急加速する。

ある程度速度が上がってくると、主翼が下向きに下がり期待の下側を流れる空気の流れを変えたその瞬間、鉄の塊は宙に浮かんだ。

千歌「と、とんだ！飛んだよ！曜ちゃん！」

曜「ほ、ほんとだ…。飛んでる…。」

その発言から察するに、加速中は怖くて外が見られなかったのだらうと思うと、なんだかその姿が愛おしく思えてきた。

梨子「ふ、ふう…、やっと終わった…。」

雄飛「そんなに怖かったのなら言ってくれたら手を握ってやってもよかったのに。」

と冗談っぽく言った。どうせ梨子なら曜ちゃんに怒られるよ、とか、あんまりそういうこと言くと勘違いする女の子いるから言わないほうがいいよとか、そんなまじめな答えが返ってくると予想していたのだが…

梨子「じゃあ、降りるときにやってもらおうかな？」

まさか、そんな返しが返ってくるとは想定していなかったため、余裕ぶって口に運んでいたコーヒーを吹き出しそうになった。

雄飛「ゲホツゲホツ！」

梨子「ちよつとゆうくん大丈夫?!」

と言いながら、テツシユを差し出してくる。

雄飛「梨子…、成長したんだな…」

ありがとうと言い、もらったテツシユで少しだけこぼれたコーヒーをふき取った。

梨子「ふふつ、やられてばかりだと対策は思い付いてくるものよ?」「やられたらやり返す」って、ゆうくんの地元では言うんだっけ?」

雄飛「それは大阪のほうだけだな…」

雄飛（本当はそのセリフの後に、「倍返しだ」というセリフが続くのだが、それを言うとき今の梨子は本当に倍返ししてきそうなのでやめておいた。）

そんなやり取りをしているうちに飛行機のシートベルト着用のサインがポーンと、静かな音とともに消えた。

後ろの二人の声が全く聞こえないので、シートベルトを外してから後ろを覗き込むと二人は片を並べて眠りについていた。

雄飛「曜はまだわかるけど、何で千歌も寝てんだよ。寝坊したくせに…」ボソツ

梨子「はしやぎすぎて疲れたんじゃない?というか、それに関しては何もかもでしょ。」ボソツ

雄飛「確かに…、そうかもな。」ボソツ

気持ちよさそうに寝る二人を見ているとなんだかこつちまで眠たくなってきた。

ちなみに遅刻した原因だが…

…昨日の晩

荷物の最終チェックを終え、一息ついたその瞬間に千歌側の扉が急に開き、部屋に押し掛けてきた千歌が、



千歌「ゆうくん！明日の準備できてないよ！手伝って！」  
といい、夜遅くまで手伝っていたため正直、起きているのは限界  
だった。

ちなみに近くしたのもそれがかなり大きく影響している。

雄飛「おれも…寝ようかな。梨子はどうする？」  
と聞くと、少しだけ考えてから

梨子「私はもうちよつとだけ起きていようかな？」  
というので、俺は先に寝ることにした。

：

雄飛「すう…すう…。」

しばらく窓の外を眺めていると横から寝息が聞こえてきた。

振り返るとそこには無防備に寝る【好きな人】の顔があった。

雄飛の寝顔をこんなに近くで見るのは初めてで、なんだか恥ずかし  
くなり一人で顔を赤くした。

：

自分が抱いている感情は隠さなければならぬ、それはずいぶん昔  
からわかっていた。

曜ちゃんがゆうくんのことが好きだと知ったその瞬間から。

もしかすると、出会ったその時にはすでにそう感じていたのかもし  
れない。

ゆうくんは曜ちゃんがお似合いだと、自分なんかでは彼女役は務ま  
らないと、だから曜ちゃんに聞かれたときは正直ドキツとした。

ばれないように装ったつもりだけど、本当に隠せているかどうかは  
あやしい。

少し前まではしっかりと隠せていた。

でも、最近は自分の感情がだんだん表に出始めている。

梨子（はあ、ゆうくん…）。もし、あのととき私が曜ちゃんより先に告

白していれば…)

そんなありもしないことを考えている自分が情けなくなり、首を振って邪念を振り払った。

起きていても心臓がうるさくなるだけなので、もう一度飛行機の窓から見える景色を眺め、心を落ち着かせてから目を閉じた。

飛行機特有のエンジンの音に耳を傾けながら私も意識を手放した。

：

：函館空港

千歌「んー!! ついたー!!」

曜「千歌ちゃん元気だね…、さ、寒い…。」

梨子「ほんとに…、よくそんな元気に騒げるわね…。」

函館について体を震わす二人とは反対に千歌は元気いっぱいである。

ちなみに着いてからは、班行動の自由時間が与えられた。

自由時間といっても一日中自由時間ではなく、夕方の6時に函館山の山頂にある展望台で合流し、そこからバスに乗って宿泊先のホテルまで向かうというのが学校のスケジュールである。それまではどこにいてもいいとのこと。

現在の時刻は11時を少し回ったあたりである。

そこにたどり着くまでの時間を考えれば、完全な自由時間は5時間ほどといったところであろうか？

千歌「ねえねえ! どこに行く?!」

雄飛「とりあえず有名所についてみるか?」

梨子「函館といえば、…五稜郭タワーか赤レンガの倉庫よね。」

曜「あ、位置関係的に五稜郭タワーのほうが近いから先にそっちに行つて、そのあとおやつになにか食べてから、赤レンガ倉庫つていうのはどうかな？」

千歌「おやつ！北海道のみかんたべたい！」

雄飛「おまえはそればつかだな！」ペシッ

千歌「あだっ！ひどいよおく」

曜&梨「あははっ!!」

…五稜郭タワー…

雄飛「うわあ、すげえ高い…。」

梨子「た、たかいね…。」

千歌「ソー、わっ!!!」

梨子「うわあ!!!」ガシッ!

千歌の声に驚いた梨子が雄飛の腕に抱きついた。

雄飛「おい！千歌！」

千歌「え、えへへ。そんなにびっくりするとは思わなかった…。」

梨子「びっくりしたよおく、」

(ゆうくんの顔がこんなに近くに…)

梨子「…／／／」

雄飛「梨子…もう落ち着いたか？そろそろ腕を離してくれないと

…。」

曜「ジ〜」

梨子「はっ！ご、ごめんね！ゆうくん、曜ちゃんも！」

曜「べ、別に嫉妬してなんか…！／／／」

梨子「ふーん、じゃあ、こうしててもいい？」

そういうと梨子はもう一度おれの腕に抱きつき、曜に見せつけるように笑った。

…まあ、怒らない訳がないよね。

曜「むー!!!梨子ちゃん！離れて！ゆうくんもまんざらでもない顔し

ない!!」ベシベシッ!

雄飛「いたい!てか、してない!!」

曜は、もう片方の腕に抱きつき「私が彼女だー!」とかなんだとか叫んでいる。

完全に両手に花である。

さらに、

千歌「むー!曜ちゃん達ずるい!!私も!!」

千歌は正面から抱きついてくる。

もう完全かというと、これは

梨子 雄飛 曜

千歌

「ハーレム」…だな…

おれ、曜の彼氏なんだけど… タイトルサギナンダケド

…

千歌「おやつく♪おやつく♪みかん♪」

梨子「ふふつ、千歌ちゃん、ノリノリね。」↑流石に腕から離れた

曜「ゆうくんは食べたいものある?」↑ガツチリホールド

雄飛「うーん、そうだなあ…。喫茶店…とか?」

曜「喫茶店?」

スマホを操作していた梨子が口を開いた。

梨子「ああ、白玉のぜんざい?みたいなのが調べたら出てきたわよ。」

雄飛「あ、そうそう。それ!」

曜「有名なの?」

梨子「うーん、お店の外見的には知る人ぞ知るって感じかな?人気

はかなり高いみたい。」

曜「いつてみる？」

雄飛「梨子、距離的にはどうなんだ？」

梨子「最後の集会所の近くみたいね。とりあえず千歌ちゃんの要望のみかんを食べてからいつても遅くはないかも。」

「みかん!!!」と目を輝かせている千歌のほうを見ながらいった。

雄飛「じゃあ、先にそっちの方にいこうか。」

曜「ヨーソロー！賛成であります！」

千歌「やったー！ありがとうみんな！」

…とある休憩所

売店で買った北海道産のみかんをみんなで食べていると…

千歌「こ、これは、北海道の味?!」

梨子「な、なによその味…。」

千歌「えー！わかんないの？梨子ちゃん。」ジトー

梨子「わかるわけないでしょ！」

二人がコントをしているのを尻目に空を見上げていた。

雲ひとつない快晴。気温は…寒い。流石最北端の場所である（北方領土を除く）。飛行機に乗りとほんの数時間でこんなところまでこれてしまう。最新の技術はすごいものだとしみじみ感じながらその青い空を呆然と見上げていた。青い空を見ていると、昔父親に乗せてもらった戦闘機での風景を思い出した。

父親は、自分が中学生の時に交通事故で母親と共にこの世を去った。一応事故という扱いになっており、当時のおれもそれに納得していたのだが、考える力がついてからその事故に違和感を覚えるようになった。本当に両親は事故死だったのかと。

曜「…うくん？おーい、ゆうくーん」

曜（全然反応がない…。）

空を見上げている雄飛の顔は、何処かさみしげである。

なにか遠い昔の記憶を振り返っているような、そんな表情だった。

曜（あ、そうだ。ニシシ♪）

立ち上がり、雄飛の後ろに回り込んだ。

依然として遊飛は動かない。先程と同じく、空を見上げたままである。

最終確認として、あたりを見渡す。

周りには、千歌ちゃんと梨子ちゃんしかいない。そして、二人は会話を夢中である。

曜（よし。）

雄飛に覆い被さるように後ろから抱きつき、雄飛の唇に自分の唇を優しく重ねた。

覆い被さった瞬間、雄飛は目を見開いたが、抵抗することなくそれを受け入れた。

優しく、だけど、短くはない。そんなキスだった。

ゆうくんがさっきまで食べていたみかんの味：甘くてちよつぷり酸味がきいたキスの味だった。

雄飛「どうした？寂しくなったのか？」

曜「かわいい彼女が名前を呼んでるのに無視をしてきたので罰ゲー

ム：。」ムスッ

わざと拗ねたような顔を試みる。

雄飛「す、すまん。ちよつと昔のことを思い出して…。」

曜「昔のこと？」

雄飛「うん、もう数年も前の話なんだけd：「ゆうくん！」

話そうとした瞬間、千歌が声をかけてきた。

その隣には梨子もいる。

また、二人きりの世界に入ってしまったのだと自覚し、少しだけ恥ずかしくなった。

梨子「もうそろそろ赤レンガ倉庫に行かないと、ゆうくんが行きかけた喫茶店よれなくなっちゃうよ?」

雄飛「えっ?!」

慌てて時計を見るともう15時になっていた。

雄飛は喫茶店で割りどゆっくり過ぎたと思う派なのを知って声をかけてくれたのだろう。(※番外編で書く予定)

雄飛「じゃあ、いこうか!」

曜「うん!また後で話の続き、聞かせてね。」

雄飛「もちろん。」

千歌「あ!バスがきた!!」

バスが停留所に入ってきているのを見た千歌はそっちに向かって走り出そうとした。

梨子「千歌ちゃんそっちじゃないわよ!」

行こうとする千歌を慌てて引き止める。

千歌「えー!!」

雄&曜「あははっ!!」

雄飛&曜(とうかなんかあの二人を見ていると旅行に来た親子を見ている気分になるのは俺(私)だけかな…)ニガワライ

∴